

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

**平成 27 年度～令和元年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 学校法人龍谷大学 2 大学名 龍谷大学

3 研究組織名 里山学研究センター

4 プロジェクト所在地 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

5 研究プロジェクト名 琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究
—Satoyama モデルによる地域・環境政策の新展開—

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
牛尾 洋也	法学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数 47 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
牛尾 洋也	法学部・ 教授	地域・環境政策	<センター長・総合研究班 長、第 3 班ユニット長> 全体の研究推進、研究成 果のとりまとめ責任者
村澤 真保呂	社会学部・ 教授	環境倫理	<総合研究副班長> 全体の研究推進、研究成 果のとりまとめ責任者
伊達 浩憲	経済学部・ 教授	地域・環境政策	全体の研究推進、環境政 策のとりまとめ責任者
丸山 徳次	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	環境倫理	全体の研究推進、環境倫 理のとりまとめ責任者
谷垣 岳人	政策学部・ 准教授	環境教育	全体の研究推進、環境教 育のとりまとめ責任者
田中 滋	社会学部・ 教授	地域・環境政策	<第 1 班班長> 全体の研究推進、研究成 果とりまとめ
遊磨 正秀	理工学部・ 教授	環境教育	<第 1 班ユニット長> 全体の研究推進、研究成

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

			果とりまとめ
横田 岳人	理工学部・ 准教授	地域・環境政策	<第1班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
宮浦 富保	理工学部・ 教授	地域・環境政策	<第2班班長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
吉岡 祥充	法学部・ 教授	地域・環境政策	<第2班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
山崎 英恵	農学部・ 准教授	環境倫理	<第2班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
鈴木 龍也	法学部・ 教授	地域・環境政策	<第3班班長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
清水 万由子	政策学部・ 教授	環境倫理	<第3班ユニット長> 全体の研究推進、研究成果とりまとめ
<第1研究班「水と生命」>			
(1)「水系環境の変遷過程」研究ユニット			
田中 滋	社会学部・ 教授	河川と近代化の研究	<第1研究班長> 河川・湖沼の近代化装置による環境改変とその影響
遊磨 正秀	理工学部・ 教授	水系環境の変遷過程の研究	<ユニット長> 人為作用による水中景観の変化が琵琶湖－河川間回遊魚に及ぼす影響
越川 博元	理工学部・ 准教授	水系環境の変遷過程の研究	水の再利用の研究
中川 晃成	理工学部・ 講師	水系環境の変遷過程の研究	画像情報からの里山流域環境の分析評価の試み
丸山 敦	理工学部・ 准教授	水系環境の変遷過程の研究	産業による自然利用の変化が引き起こす課題の、地域間(琵琶湖とマラウイ湖の集水域など)での共通点と相違点を見る
吉田 竜司	社会学部・ 教授	水系環境の変遷過程の研究	河川流域における農村共同体の水利秩序のあり方を祭りという視点からの解

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

			明
池田 恒男	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	河川の近代化の研究	琵琶湖水域圏と砂防法、 河川法等の影響
須川 恒	日本鳥学会・ 会員	水系環境の変遷過程の研究	水鳥の種別・生態の理解 と湖岸景観との関連
秋山 道雄	滋賀県立大 学・ 名誉教授	水系環境の変遷過程の研究	自然調和型の住環境と防 災の研究
(2)「生物多様性と生態系サービスの研究」ユニット			
横田 岳人	理工学部・ 准教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	<ユニット長> 里山の生態系サービスの 質を高める生態系機能の 回復方策の提言
遊磨 正秀	理工学部・ 教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	人為作用による水中景観 の変化が琵琶湖-河川間 回遊魚におよぼす影響
丸山 敦	理工学部・ 准教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	環境 DNA 技術によって生 物多様性を把握する技術 の発展
山中 裕樹	理工学部・ 講師	生物多様性と生態系サー ビスの研究	ヒトと自然環境との相互 作用について生態学的視 点から定性的・定量的情 報を取得し、効果的な保 全方策を決定するための 基盤情報を提供
金 紅実	政策学部・ 准教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	生態系サービスの維持・ 向上のための経済学的 なインセンティブ措置の 提言
谷垣 岳人	政策学部・ 准教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	生態系保全と環境教育 の結合
林 珠乃	理工学部・ 実験助手	生物多様性と生態系サー ビスの研究	里山・里湖の生態系サー ビスの変遷
岩瀬 剛二	帝京科学大 学生命環境 学部・ 教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	里山とその周辺環境にお いて外来帰化植物がもた らす役割の解明と提言
江南 和幸	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	生物多様性と生態系サー ビスの研究	生態系サービスの経済 的考察
須川 恒	日本鳥学会・ 会員	生物多様性と生態系サー ビスの研究	里山・里海環境におけ る鳥獣害問題

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

須藤 明子	株式会社イ ーグレット・オフィ ス・ 専務取締役	生物多様性と生態系サービ スの研究	カワウ管理と内水面漁業 と河川管理をめぐる課題 の整理と対策の提案
高桑 進	京都女子大 学・ 名誉教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山の生物多様性を活用 したエコツーリズムの企画 と提案
高橋 佳孝	全国草原再 生ネットワ ーク・会長 /NPO 法人 緑と水の連 絡会議・顧 問	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山草原の生態系サービ ス機能を高めるための技 術的方策の提言
夏原 由博	名古屋大学 大学院環境 学研究科・ 教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山の生態系サービスと 生物多様性の持続的な利 用に関する景観生態学的 な解析
野間 直彦	滋賀県立大 学環境科学 部・ 准教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山の生物の現状と保全 策 生態学的な獣害対 策
山中 勝次	京都菌類研 究所・ 所長	生物多様性と生態系サービ スの研究	里山における食用菌類の 活用の開発
好廣 眞一	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	生物多様性と生態系サービ スの研究	琵琶湖水系の里山にすむ けものたちと人の関係史

<第2研究班「資源と産業」>

(3)「森林資源とエネルギー利用の研究」ユニット

宮浦 富保	理工学部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	<第2研究班長> 里山の生産生態学的研究
吉岡 祥充	法学部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	<ユニット長> 里山保全の法政策
中川 晃成	理工学部・ 講師	森林資源とエネルギー利用の 研究	画像情報からの里山流域 環境の分析評価の試み
水原 詞治	理工学部・ 講師	森林資源とエネルギー利用の 研究	バイオマス資源の再生可 能エネルギーとしての利用 方法の提案
池田 恒男	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	森林法政策の分析

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

金 紅実	政策学部・ 准教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	森林公益的機能の維持・ 向上のための森林資源の 有効な利活用方策への提 言
牛尾 洋也	法学部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	森林法とエネルギー政策 の分析
飯國 芳明	高知大学教 育研究部・ 教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	森林資源の管理に関する 制度の検討と素材及びエ ネルギー利用の展望
占部 武生	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	里山バイオマスの燃焼効 率の評価
江南 和幸	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	森林資源の有効活用、バ イオマス・機能性木炭の開 発とその応用と里山経済 学モデルの研究と提案
大住 克博	鳥取大学農 学部附属フ ィールドサイ エンスセン ター・ 教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	里山管理上の造林学・生 態学的な問題の指摘
高桑 進	京都女子大 学・ 名誉教授	森林資源とエネルギー利用の 研究	持続可能な環境教育プロ グラムとしての炭焼き活動 の提案
高橋 佳孝	全国草原再 生ネットワ ーク・会長 /NPO 法人 緑と水の連 絡会議・顧 問	森林資源とエネルギー利用の 研究	森林、草地資源の持続可 能な利用の提言
西脇 秀一郎	大阪経済大 学 経営学 部・専任講 師 / 里山学 研究セン ター・客員 研究員	森林資源とエネルギー利用の 研究	農林地の所有・管理の法 制度、資源管理主体の法 的分析 / 地域資源の所有・ 管理主体論、ガバナンス、 団体の内部組織・意思決 定規範、構成員・ステー クホルダーの権利義務の法 的分析
(4)「エコロジー的な食と農の研究」ユニット			
山崎 英恵	農学部・ 准教授	エコロジー時代の食と農の研究	<ユニット長> 農業と食の循環における

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

			里山食文化の価値醸成とその継承
猪谷 富雄	県立広島大学・名誉教授／龍谷大学・研究フェロー	エコロジー時代の食と農の研究	イネの多様性と水田保持策の研究
渡辺 めぐみ	社会学部・准教授	エコロジー時代の食と農の研究	農業と食についてのジェンダー視点からの社会学的研究
伊達 浩憲	経済学部・教授	エコロジー時代の食と農の研究	茶業における環境経済学的分析
鈴木 龍也	法学部・教授	エコロジー時代の食と農の研究	環境配慮型農業の法政策の分析
丸山 敦	理工学部・准教授	エコロジー時代の食と農の研究	粘液の安定同位体分析による琵琶湖-河川-水田間の生物移動追跡手法の革新
谷垣 岳人	政策学部・准教授	エコロジー時代の食と農の研究	環境配慮型農業と食の研究
山中 裕樹	理工学部・講師	エコロジー時代の食と農の研究	ヒトと自然環境との相互作用について生態学的視点から定性的・定量的情報を取得し、効果的な保全方を決定するための基盤情報を提供
秋津 元輝	京都大学大学院農学研究科・教授	エコロジー時代の食と農の研究	自給的農業実践の拡大をつうじた食農文化の継承と創造および農業景観保全の実現
江南 和幸	龍谷大学・研究フェロー／名誉教授	エコロジー時代の食と農の研究	里山が提供する食材・自然食の研究とその普及と、里山経済学モデルの研究と提案
須藤 護	龍谷大学・研究フェロー／名誉教授	エコロジー時代の食と農の研究	山国日本において、とくに耕地として利用しにくい斜面の活用事例の収集
夏原 由博	名古屋大学大学院環境学研究科・教授	エコロジー時代の食と農の研究	里山の生態系サービスと生物多様性の持続的な利用に関する景観生態学的な解析
<第3研究班「人と暮らし」>			

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

(5)「自然調和型の住環境と防災の研究」ユニット			
牛尾 洋也	法学部・教授	自然調和型の住環境と防災の研究	<ユニット長> 里山景観と防災の研究
横田 岳人	理工学部・准教授	自然調和型の住環境と防災の研究	里山の生態系サービスによる地域防災機能の向上を促す方策の提言
石塚 武志	法学部・准教授	自然調和型の住環境と防災の研究	都市における自然公物の管理と防災の関係に関する法的分析
中川 晃成	理工学部・講師	自然調和型の住環境と防災の研究	画像情報からの里山流域環境の分析評価の試み
林 珠乃	理工学部・実験助手	自然調和型の住環境と防災の研究	里山・里湖の GIS による総合的解析
徐 光輝	国際学部・教授	自然調和型の住環境と防災の研究	資源循環型コミュニティの新たな創造
釜井 俊孝	京都大学防災研究所・教授	自然調和型の住環境と防災の研究	里山成立過程の防災考古学的考察に基づく、サステイナブル都市構造の提言
夏原 由博	名古屋大学大学院環境学研究科・教授	自然調和型の住環境と防災の研究	里山の生態系の景観生態学的な解析
秋山 道雄	滋賀県立大学・名誉教授	自然調和型の住環境と防災の研究	自然調和型の住環境と防災の研究
(6)「資源循環型コミュニティの新たな創造」の研究ユニット			
清水 万由子	政策学部・准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	<ユニット長> 地域社会の持続可能な発展の研究
鈴木 龍也	法学部・教授	コモンズ論からの持続可能社会研究	<第3研究班長> コモンズ論からの法政策分析
丸山 徳次	龍谷大学・研究フェロー/ 名誉教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	資源循環型コミュニティの理論
牛尾 洋也	法学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	地域づくりにおける地域資源と景観構成の研究
伊達 浩憲	経済学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	環境循環型の地域づくりの研究
村澤 真保呂	社会学部・教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	資源循環型コミュニティの理論

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

渡辺 めぐみ	社会学部・ 准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	地域社会づくりにおけるジェンダー的研究
阿部 大輔	政策学部・ 教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	地域づくりにおける文化的景観・世界遺産等の地域資源の意義の研究
金 紅実	政策学部・ 准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	石油由来製品依存型から地域資源循環活用の生活・消費様式への転換を目指す地域コミュニティづくりのための方策提言
吉田 竜司	社会学部・ 教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	河川流域における農村共同体の水利秩序のあり方を祭りという視点からの解明
笠井 賢紀	慶應義塾大学法学部政治学科・専任講師	資源循環型コミュニティの新たな創造	資源循環型コミュニティの理論
江南 和幸	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	森林資源の有効活用や里山の食材による里山経済学モデルの研究と提案
奥 敬一	富山大学芸術文化学部・ 准教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	文化的景観における里山の価値付けとコミュニティによる持続的な資源活用方策の検討
須川 恒	日本鳥学会・ 会員	資源循環型コミュニティの新たな創造	生物親和都市の基本構想
須藤 護	龍谷大学・ 研究フェロー/ 名誉教授	資源循環型コミュニティの新たな創造	日本人の山地利用に関する知恵を掘り起こし、里山利用の将来について提言
西脇 秀一郎	大阪経済大学経営学部・専任講師/里山学研究センター・客員研究員	資源循環型コミュニティの新たな創造	農林地の所有・管理の法制度、資源管理主体の法的分析/地域資源の所有・管理主体論、ガバナンス、団体の内部組織・意思決定規範、構成員・ステークホルダーの権利義務の法的分析
(共同研究機関等)			

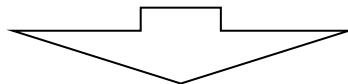
法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成27年6月25日)



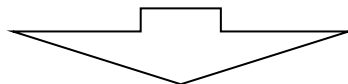
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
滋賀県立大学・ 名誉教授	滋賀県立大学・ 名誉教授	秋山 道雄	自然調和型の住環境 と防災の研究

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成27年11月26日)



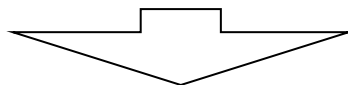
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 国際学部・教授	龍谷大学・ 国際学部・教授	徐 光輝	資源循環型コミュニテ ィの新たな創造

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成27年11月26日)



新

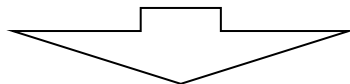
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 社会学部・教授	龍谷大学・ 社会学部・教授	吉田 竜司	河川流域における農 村共同体の水利秩序 のあり方を祭りという 視点からの解明

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
エコロジー時代の食と農の研究	京都大学大学院農学研究科・准教授	秋津 元輝	自給的農業実践の拡大をつうじた食農文化の継承と創造および農業景観保全の実現

(変更の時期:平成28年4月1日)



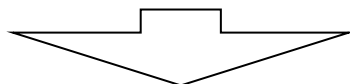
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
京都大学大学院農学研究科・准教授	京都大学大学院農学研究科・教授	秋津 元輝	自給的農業実践の拡大をつうじた食農文化の継承と創造および農業景観保全の実現

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
自然調和型の住環境と防災の研究	龍谷大学・法学部・講師	石塚 武志	都市における自然公物の管理と防災の関係に関する法的分析

(変更の時期:平成28年4月1日)



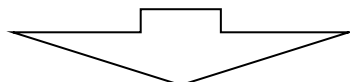
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・法学部・講師	龍谷大学・法学部・准教授	石塚 武志	都市における自然公物の管理と防災の関係に関する法的分析

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
環境倫理/資源循環型コミュニティの新たな創造	龍谷大学・社会学部・准教授	村澤 真保呂	<総合研究副班長> 全体の研究推進、研究成果のとりまとめ責任者

(変更の時期:平成28年4月1日)



新

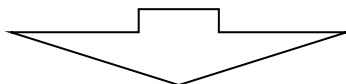
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・社会学部・准教授	龍谷大学・社会学部・教授	村澤 真保呂	<総合研究副班長> 全体の研究推進、研究成果のとりまとめ責任者

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期: 平成28年4月22日)



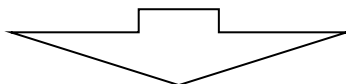
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 社会学部・講師	龍谷大学・ 社会学部・講師	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの理論

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
資源循環型コミュニティの 新たな創造	龍谷大学・ 社会学部・講師	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの 理論

(変更の時期: 平成29年4月1日)



新

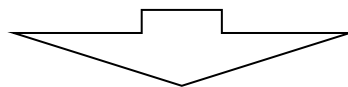
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 社会学部・講師	龍谷大学・ 社会学部・准教授	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの理論

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水系環境の変遷過程の研究/生物多様性と生態系サービスの研究/エコロジー時代の食と農の研究	龍谷大学・ 理工学部・講師	丸山 敦	産業による自然利用の変化が引き起こす課題の、地域間(琵琶湖とマラウイ湖の集水域など)での共通点と相違点を見る/環境DNA技術によって生物多様性を把握する技術の発展/粘液の安定同位体分析による琵琶湖-河川-水田間の生物移動追跡手法の革新

(変更の時期:平成29年4月1日)



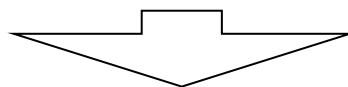
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 理工学部・講師	龍谷大学・ 理工学部・准教授	丸山 敦	産業による自然利用の変化が引き起こす課題の、地域間(琵琶湖とマラウイ湖の集水域など)での共通点と相違点を見る/環境DNA技術によって生物多様性を把握する技術の発展/粘液の安定同位体分析による琵琶湖-河川-水田間の生物移動追跡手法の革新

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
環境倫理/資源循環型コミュニティの新たな創造	龍谷大学・ 文学部・教授	丸山 徳次	全体の研究推進、環境倫理のとりまとめ責任者/資源循環型コミュニティの理論

(変更の時期:平成29年6月1日)



新

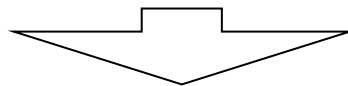
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・ 文学部・教授	龍谷大学・ 研究フェロー/名誉教授	丸山 徳次	全体の研究推進、環境倫理のとりまとめ責任者/資源循環型コミュニティの理論

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
河川の近代化の研究/森林資源とエネルギー利用の研究	龍谷大学・法学部・教授	池田 恒男	琵琶湖水域圏と砂防法、河川法等の影響/森林法政策の分析

(変更の時期:平成29年6月1日)



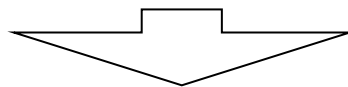
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・法学部・教授	龍谷大学・研究フェロー/名誉教授	池田 恒男	琵琶湖水域圏と砂防法、河川法等の影響/森林法政策の分析

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
環境教育 / 生物多様性と生態系サービスの研究 / エコロジー時代の食と農の研究	龍谷大学政策学部・講師 / 里山学研究センター・兼任研究員	谷垣 岳人	全体の研究推進、環境教育のとりまとめ責任者 / 生物多様性と生態系サービスの研究、生態系保全と環境教育の結合 / エコロジー時代の食と農の研究、環境配慮型農業と食の研究

(変更の時期:平成30年4月1日)



新

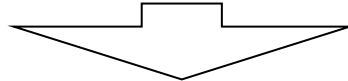
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学政策学部・講師 / 里山学研究センター・兼任研究員	龍谷大学政策学部・准教授 / 里山学研究センター・兼任研究員	谷垣 岳人	谷全体の研究推進、環境教育のとりまとめ責任者 / 生物多様性と生態系サービスの研究、生態系保全と環境教育の結合 / エコロジー時代の食と農の研究、環境配慮型農業と食の研究

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
資源循環型コミュニティの新たな創造	龍谷大学社会学部・准教授 / 里山学研究センター・兼任研究員	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの理論

(変更の時期:平成31年4月1日)



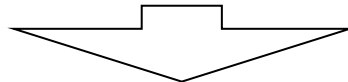
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学社会学部・准教授 / 里山学研究センター・兼任研究員	慶應義塾大学法学部・専任講師 / 里山学研究センター・客員研究員	笠井 賢紀	資源循環型コミュニティの理論

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
エコロジー時代の食と農の研究	龍谷大学農学部・教授 / 里山学研究センター・兼任研究員	猪谷 富雄	イネの多様性と水田保持策の

(変更の時期:平成31年4月1日)



新

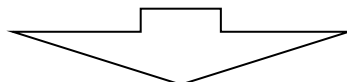
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学農学部・教授 / 里山学研究センター・兼任研究員	県立広島大学・名誉教授 / 里山学研究センター・研究フェロー・客員研究員	猪谷 富雄	イネの多様性と水田保持策の研究

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水系環境の変遷課程の研究/生物多様性と生態系サービスの研究/資源循環型コミュニティの新たな創造	龍谷大学・非常勤講師 / 里山学研究センター・客員研究員	須川 恒	水鳥の種別・生態の理解と湖岸景観との関連/里山・里海環境における鳥獣害問題/生物親和都市の基本構想

(変更の時期:平成31年4月1日)



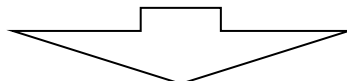
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学・非常勤講師 / 里山学研究センター・客員研究員	日本鳥学会・会員/里山学研究センター・客員研究員	須川 恒	水鳥の種別・生態の理解と湖岸景観との関連/里山・里海環境における鳥獣害問題/生物親和都市の基本構想

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
生物多様性と生態系サービスの研究/森林資源とエネルギー利用の研究	近畿中国四国農業研究センター・専門員 / 里山学研究センター・客員研究員	高橋 佳孝	里山草原の生態系サービス機能を高めるための技術的方策の提言/森林、草地資源の持続可能な利用の提言

(変更の時期:平成31年4月1日)



新

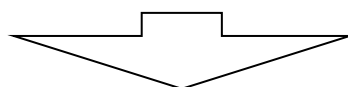
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
近畿中国四国農業研究センター・専門員 / 里山学研究センター・客員研究員	全国草原再生ネットワーク・会長/NPO 法人緑と水の連絡会議・顧問/里山学研究センター・客員研究員	高橋 佳孝	里山草原の生態系サービス機能を高めるための技術的方策の提言/森林、草地資源の持続可能な利用の提言

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
生物多様性と生態系サービスの研究/エコロジー時代の食と農の研究/自然調和型の住環境と防災の研究	名古屋大学・教授 / 里山学研究センター・客員研究員	夏原 由博	里山の生態系サービスと生物多様性の持続的な利用に関する景観生態学的な解析/里山の生態系サービスと生物多様性の持続的な利用に関する景観生態学的な解析/里山の生態系の景観生態学的な解析

(変更の時期:平成31年4月1日)



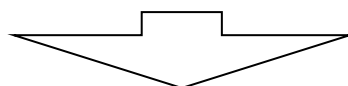
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
名古屋大学・教授 / 里山学研究センター・客員研究員	名古屋大学大学院環境学研究科・教授 / 里山学研究センター・客員研究員	夏原 由博	里山の生態系サービスと生物多様性の持続的な利用に関する景観生態学的な解析 / 里山の生態系サービスと生物多様性の持続的な利用に関する景観生態学的な解析 / 里山の生態系の景観生態学的な解析

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
森林資源とエネルギー利用の研究	龍谷大学工学部・助教 / 里山学研究センター・兼任研究員	水原 詞治	バイオマス資源の再生可能エネルギーとしての利用方法の提案

(変更の時期:平成31年4月1日)



新

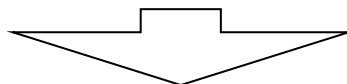
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
龍谷大学工学部・助教 / 里山学研究センター・兼任研究員	龍谷大学工学部・講師 / 里山学研究センター・兼任研究員	水原 詞治	バイオマス資源の再生可能エネルギーとしての利用方法の提案

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成31年4月1日)



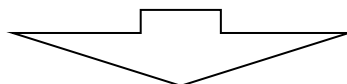
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
里山学研究センター・ リサーチアシスタント	大阪経済大学経営学部・専 任講師/里山学研究センタ ー・客員研究員	西脇 秀一郎	農林地の所有・管理 の法制度、資源管理 主体の法的分析/地 域資源の所有・管理 主体論、ガバナンス、 団体の内部組織・意 思決定規範、構成員・ ステークホルダーの 権利義務の法的分析

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
森林資源とエネルギー利 用の研究	京都大学大学院農 学研究科・教授 / 里山学研究センタ ー・客員研究員	大澤 晃	バイオマス生産における 地下部の資源活用方策の 検討

(変更の時期:平成31年5月23日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本研究プロジェクトは、主として琵琶湖水域圏を中心に、自然生態系を基盤とする社会と経済の持続可能な発展関係を構築するため、「Satoyama モデル」に基づく新たな社会モデルの総合的研究を行う。近時、「地方消滅」が叫ばれ、改正都市再生措置法(平成 26 年 8 月)や地方創生関連 2 法(同年 11 月)への対応が検討される中、都市部と農村部が地理的にも強い影響関係にある日本の地方・地域社会の現実に立脚し、一定の経済圏(琵琶湖水域圏)のなかで、各関連行政、地域住民、NPO、民間企業、研究機関等の各主体が横断的に協働する、自然共生・循環型の持続可能社会のあり方について研究する。その際、里山が有する自然循環・生態系保全機能、森林育成・食と農の基盤形成機能、都市・農村の防災や景観などの生活基盤整備機能、生活・文化・社会・コミュニケーション形成機能を、物質・文化・経済・人の「循環の総体」として捉えることにより、全球スケールの環境問題を意識した新たな「Satoyama モデル」を再構築し、一定の地方・地域社会共通の基盤となる自然・社会・文化の循環型社会の実現を目指して「琵琶湖イニシアティブ」の政策提言を行う。

(2) 研究組織

本研究プロジェクトは、龍谷大学 8 学部の研究者を中心とする文理融合による共同研究である。龍谷大学には、全学横断型・複合型・異分野融合型等の学際的研究を推進する機関として、人間・科学・宗教総合研究センターがあり、その下で個別研究センターの研究推進体制が整っている。また、大学のみならず、地域の市民向け環境教育を行い、さらに、国内外の様々な組織に対する研修機関の役割を果たすことができる。

琵琶湖を見下ろす瀬田キャンパスのある滋賀、および深草、大宮キャンパスのある京都の各行政および地域社会に対し、環境・循環型社会の推進を目指す研究の拠点としての基盤と地位を確立し、地域に根ざした具体的な地域・環境政策の提案を行うとともに、同様の課題に対する普遍的な社会モデルを提唱することで、大学の公共的役割を一層高める役割を果たすことが期待される。

本研究プロジェクトでは、自然生態系に立脚した社会を構築するため、自然・客観的要因、自然要因に対する人的作用因、人の文化要因を研究対象として設定し、以下 3 つの研究班および研究ユニットをおく。研究班は、各要因の相互作用を意識し、それぞれの研究成果を共有するが、成果を体系的に取りまとめるため「総合研究班」を設置する。

第 1 の「水と生命」研究班では、「水系環境の変遷過程」研究ユニットが、第 3 班と共同で、まず対象となる琵琶湖水域圏の地理的現状や河川の現状とその変遷を把握するため、その歴史的検討、制度的検討を行う。次に、「生物多様性と生態系サービス」研究ユニットは、「次世代シーケンサー」を用い、水系環境の違いによる琵琶湖水域圏の生物多様性の変化と諸条件の研究を行い、第 2 班と共同で、環境保全型農業の生態系サービスの研究および水環境保全ツールの研究を行う。

第 2 の「資源と産業」研究班では、「森林資源とエネルギー利用」研究ユニットが、琵琶湖水域圏の環境に大きく作用する森林資源の持続可能な管理・利用を研究する。そのため、木質バイオマス・エネルギーの固定メカニズムとその利用・燃焼技術を研究し、その科学的知見をベースとして、総合研究班と共同して、地域における再生可能エネルギーの利用可能性と持続可能な森林管理の具体策を検討する。次に、「エコロジ的な食と農」研究ユニットは、環境保全型農業および新しい農業政策の研究および地域独自の「食」の研究を行い、地域における持続可能な生産と消費の構造を追求する。

第 3 の「人と暮らし」研究班では、「自然調和型の住環境と防災」研究ユニットが、第 1 班と共同で、最新の景観地理学と防災学の研究水準を取り入れ、その成果を地図上で重ね合わせ総合化する。その成果をベースに、「資源循環型コミュニティの新たな創造」研究ユニットは、あるべき都市再生や地域創生に資する循環型社会にふさわしい新しい社会の関係性構築に向けた研究を行い、総合研究班における議論のプラットフォームを作る。

「総合研究班」は、各研究班の代表者および総合研究班取りまとめ責任者で構成し、毎月の運営会議と年 8 回程度の共同研究会を開催し、研究の進捗状況と成果の共有を図り、Satoyama モデルの(1)環境倫理、(2)環境教育、(3)地域・環境政策の 3 本柱の形で、各研究班の研究推進と研究成果をとりまとめ、政策提言を行う。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

(3) 研究施設・設備等

- 研究施設 1: 深草学舎 紫光館 3 階事務局事務室
(面積: 140.81 m²/使用者数: 9 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度/共同利用)
- 研究施設 2: 瀬田学舎 3 号館 3 階 301 研究室
(面積: 28.35 m²/使用者数: 17 名程度/利用時間数: 月 90 時間程度)
- 研究施設 3: 瀬田学舎 3 号館 3 階 302 研究室
(面積: 26.25 m²/使用者数: 17 名程度/利用時間数: 月 90 時間程度)
- 研究施設 4: 深草学舎 紫光館 3 階 PD・RA 室
(面積: 38.32 m²/使用者数: 11 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度)
- 研究施設 5: 深草学舎 紫光館 3 階展示・会議スペース
(面積: 47.04 m²/使用者数: 11 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度)
- 研究施設 6: 深草学舎 紫光館 3 階展示・会議スペース
(面積: 9.85 m²/使用者数: 11 名程度/利用時間数: 月 120 時間程度)
- 研究設備: MiSeq[®]システム(DNA 増幅、シーケンサー、データ解析コンピューター内蔵)
(使用者数: 5 名程度/利用時間数: 年 167 時間程度)

研究施設 1 は、研究部(人間・科学・宗教総合研究センター)の下に、本プロジェクトの支援を行う事務室として使用している。研究施設 2-6 は、研究プロジェクトの研究打合せや会議、シンポジウムの準備作業等の業務を行う場所として、PD、RA が主となって活用している。

また、研究設備については、第 1 研究班の「水と生命」研究において、次世代シーケンサー: MiSeq システムを導入している。このシステムは、環境水中の DNA(RNA) 分析により、迅速かつ定量的に琵琶湖周辺の魚類相(魚類の生物量や種構成と遺伝的特徴)を把握するとともに、生態学的視点から、各種人間活動との関連性を調査する中で、効果的な保全方策の検討に活用している。

上記のほか自己財源や他の補助金等で整備された研究装置等 7 点も活用して研究を進めている。

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

(1) 概要

本研究プロジェクトは、自然生態系を基盤とする社会と経済の持続可能な発展関係構築のため、琵琶湖水域圏を中心とする、「Satoyama モデル」に基づく新たな社会モデルの総合的研究を行うことを目的とし、そのために、本研究プロジェクトでは、「水と生命」「資源と産業」「人と暮らし」の 3 つの研究班と、それらを統合する「総合研究班」を組織し研究に取り組んできた。

そして、研究対象および分析枠組みとしての「琵琶湖水域圏」概念と、問題解決に向けた考察・検討・追及対象としての「里山モデル(Satoyama モデル)」概念の二つを新たに提示し、これらの概念の深化とその意義・有用性を明らかにしながら、地方・地域社会共通の基盤となる自然・社会・文化の循環型社会の実現に向けた研究提言をおこなうことが、中心的な研究課題であった。そして、琵琶湖水域圏の具体的特徴と対象を示すために、本プロジェクトでは、特に愛知川流域を集中的な研究対象地域として選択した。

そこで、本研究プロジェクトの成果の概要を示すにあたり、以下では、まず、3 つの研究班ごとの成果を示しつつ、次に、それらを踏まえ、新たな二つの概念の提示に集約された本研究プロジェクト全体として、総合研究班を中心に新たに得られた成果の概要を示す。

(2) 班別の研究成果の概要

(1) 第 1 班「水と生命」研究班

第 1 班では、①琵琶湖流域治水および水理研究、②琵琶湖および愛知川の水環境と生態系に関する研究、③流域景観調査を行い、その成果の一部は第 3 班の④景観地理学および景観生態学的研究、および⑤水と人々の暮らしにかかわる研究に、一部は総合研究班における⑥琵琶湖保全および流域の政策提言につながった。

そこで、④⑤⑥については、それぞれの研究班でまとめて概要を示す。

①琵琶湖流域治水および水理研究

琵琶湖の治水対策において、滋賀県が「流域治水」という先進的な考え方を条例化した「滋賀県流

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

域治水条例」は、単なる河川管理にとどまらず、流域全体で治水に取り組む方策について明らかにしたものであり、本研究センターとして重要な分析対象であった。その結果、政策形成過程、生活環境主義と流域治水の政策的関連と位置づけ、条例の運用状況を踏まえ、あるべき治水政策の方針を明らかにした*1、*2、*3。また、豪雨時における淀川水系中下流域の水門観測値に基づき、琵琶湖流域を含む琵琶湖水域圏における淀川水系の治水の問題点を指摘し、その歴史的起源について考察した*4。その結果、従来の河川法中心の治水対策だけでなく景観地理学的知見を活かした土地の新たな利用計画の重要性を明らかにした点で、大きな成果を挙げた。

②琵琶湖および愛知川の水環境と生態系に関する研究

滋賀県の愛知川を主要河川として研究を進めてきた。まず、大きな成果としては、「次世代シーケンサー」を用いた環境 DNA 分析に基づき、琵琶湖水域圏の魚類の生物多様性の現状把握を行った*5、*6、*7。具体的には、琵琶湖の湖岸帯における環境 DNA 分析から、種組成や空間的分布の季節変化を追跡できることを示した。また、淀川におけるスズキとボラの季節的移動を環境 DNA 分析によって確認した。これらの成果は、環境 DNA 分析手法の確立に大きく資するものであり、今後の生態系調査の大きな足掛かりを得た。

次に、愛知川流域の水環境と生物多様性との関わりを検討し、特徴を明らかにした。永源寺ダムをはじめとする農業水利施設の建設の影響が大きい一方で、砂礫洲も維持されていて、河川生物の存在も確認された*8、*9、*10、*11。

また、湿地に生息する生物として希少性の高いガン類の観点から、里山保全を進めることの重要性を指摘した*12。さらに、湿地としての琵琶湖がラムサール条約に登録されることによる大きな影響を指摘した*13。

対象地域外ではあるが、関東地方の荒川河川敷において、外来寄生植物やセウツボがムラサキツメクサを主な宿主として繁殖していることを明らかにした*14。攪乱が頻繁に起こる河川周辺環境の生態学的知見として重要である。

③流域に関する景観分析調査

琵琶湖水域圏における土地改変を分析可能な大縮尺の空中写真画像を作成し、これに基づいて愛知川流域の地形や地割の歴史的変遷をたどることで、今までにない新たな景観復元、景観変遷の理解と把握の手段を新たに提唱した点で大きな成果を挙げた*15、*16。

(2) 第2班「資源と産業」研究班

第2班では、①森林資源・林業に関わる研究、②農業・漁業等に関わる研究を行った。さらにそれに基づいた総合研究については、総合研究班で改めて触れる。以下その成果の概要を示す。

①森林資源・林業に関わる研究

第1に、日本における森林資源の利活用の方策を検討するにあたり、その国際比較研究を行った。その一つとして、ドイツ・オーストリアの森林管理調査*17を行った。また、中国における森林資源の総合政策の調査*18、*19を行い、その成果として、森林を公益材と理解する新たな財政的政策のあり方を示した*20。もう一つとして、マラウイ共和国の「マラウイ湖国立公園」における森林資源の利活用に関する調査を行った。これは、日本のように過少利用が問題となっている地域の里山との比較し、里山資源の持続的利用についての考察を深めることを目的に、過剰利用が問題となっているマラウイにおける森林利用について実態調査に基づく研究であり*21、*22、*23、*24、*25、それに基づいた学会報告を行った*26、*27。

第2に、第1の知見を踏まえ森林資源と地域との関連性を探るなかで、日本における森林経営・管理のあり方を検討し、森林経営管理法および関連法を批判的に検討するとともに、集落を中心に現状や意向の把握を行う「東近江方式」による森林の経営・管理システムの可能性を確認した*28、*29。また、日本の森林経営を担い手のあり方と、それに規定された入会や公社造林などによる森林管理に対する批判的研究を通じ、今後の担い手問題に対する大きな示唆を示した*30、*31、*32、*33。

第3に、日本の森林利用の歴史的変遷を理解するべく、東近江市における森林利用の歴史の整

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

理し * 34、中山間地の広葉樹を用いた循環的な森林資源の利活用方策を研究することにより * 35、人工林だけではない幅広い森林資源の活用について新たな知見を提示できた。

また、里山の植生とバイオマスを把握するための手法開発を行った。「格子点法」により比較的集約的かつ継続的に森林植生を把握する手法により、ナラ枯れ被害の分布や、被害後の植生変化を明らかにした。また、ドローンを用いて、網羅的に森林植生を調査し、資源管理に資するきめ細かな情報取得を可能にした。コナラを一事例として、木材資源を用途別(直径階別)に推定する手法を開発した * 36、* 37。

森林のバイオマス生産過程においていまだ明らかでない細根の動態解明を、長期的な観測に基づいて試みている * 38。

簡易に実施できる松村式改良型ドラム缶炭窯を利用し、環境教育プログラムとしての新しい炭焼きの現代的意義を確認した * 39。薪ストーブ燃焼ガス中の一酸化炭素濃度を低減する触媒を探索し、貴金属系の触媒に近い参加触媒効果を持つ褐鉄鋼の有効性を確認した * 40、* 41。さらに、日本におけるバイオマス発電の現状と課題をまとめた * 42。

②農業・漁業に関わる研究

第1は、稲作に関する研究である。すなわち、琵琶湖を擁する滋賀県における弥生時代以降の稲作の歴史と現状を多面的に検討し、環境保全と両立しながら高い人口扶養力を持つイネの役割を再評価し、今後の稲作を検討した * 43。また、滋賀県が進める「魚のゆりかご水田」という環境配慮型農業の意義と課題について研究した * 44。

第2は、琵琶湖の内湖における水環境に即した漁業を研究し、その歴史的意義とその持続可能性について成果を示した * 45。また、阿蘇の草原の利活用とその文化的景観の価値を示し、日本における「草地」の重要な位置づけを示した * 46、* 47、* 48。さらに、環境保全型農業を含む新しい農業政策の研究の一環として、日本における様々な「世界農業遺産」の調査研究を継続し、産業・地域・文化政策として循環型社会にふさわしい新しい自然調和型社会の関係性構築に向けた諸条件を把握した * 49、* 50、* 51、* 52。

(3) 第3班「人と暮らし」研究班

第3班では、①景観地理学的、景観生態学的研究、②暮らしと防災に関する研究、③水・森と暮らしに関する研究、④エコツーリズム、フットパスに関する研究を行った。以下、概観する。

①景観地理学的・景観生態学的研究

琵琶湖水域圏全体の地理的情報や環境資源に関わる情報、歴史的・文化的資源および景観資源等、地域資源に関する情報を収集してきた。その一つとして GIS(地理情報システム)を用いて地形・地質・土地利用の特徴を総合的にみた景観マップを作成した * 53、* 54。この景観マップをもとに、『滋賀県物産誌』から読み取ることができる明治初期に酒造りをしていた村、現存する酒蔵の情報を加え、滋賀の酒をはぐくむ風土マップなどを作成した * 55、* 56。

こうした基礎的研究を踏まえ、琵琶湖水域圏における景観の可視化とその意義についてさらに深い個別研究を行うことで、今後の景観分析と文化・社会の結びつきに関する研究の大きな可能性を示した * 57、* 4。

②暮らしと防災の研究

治水に関しては、既に示した琵琶湖流域治水条例に関する一連の研究において、「流域治水」という新たな知見の意義と可能性を提示し、さらに、ハザードマップ作りを含め、従来の河川法の枠を超えた土地利用を含む景観・土地計画の必要性を明示することができた * 1、* 2、* 3、* 4。また琵琶湖水域圏における地理・地質・地形条件に基づいた地すべり等の災害情報の活かし方に関する研究を行い * 58、* 59、これらの成果をシンポジウムにおいて発表した * 60、* 61。

③水、森と暮らしに関する研究

持続可能な発展評価を行う「資本アプローチ」とその枠組みを用いた「環境ストック」という環境経済学的概念を用いて、源流から海まで続く「琵琶湖水域圏」全体の人と自然の相互作用の変容を把

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

握する意欲的な研究を行った * 62、* 63。また、水と人との法的関係に関する日本の枠組みについて批判的検討を行うなど、人と水の新たな関係を提示した * 64、* 65。

森と暮らしに関して、源流域(奥山)のくらしと文化を知るために、東近江市の奥永源寺の木地師の暮らしや歴史について民俗学的研究を行い、シンポジウムで発表 * 66、* 67、森林文化の今日的意義を提示した * 68。

④エコツーリズム、フットパスに関する研究

森林整備や木材生産など基本的な森林・林業政策を中心としつつ、フットパスを含むエコツーリズムや観光など森林に関わる幅広い分野に視野を広げたも森林ビジョンの必要性について研究を行い、一つは「東近江市の森林ビジョン」に活かされ * 69、さらに、一つは、イギリスを含む諸外国の森林立入権など、多目的な森林資源管理のあり方を提示し、森と人との関係の再構築について提言を行った * 28。こうした研究は、八日市地区、奥永源寺地区におけるフットパス活動を通じたマップ作りを含む実践的研究の成果であり * 70、* 71、* 72、* 73、* 74、2019 年度シンポジウムで発表した * 75、* 76。またフットパスを含む自然遊歩道の法的関係の分析も行った * 77。

(3) 本研究プロジェクト全体の成果の概要

「総合研究班」では、プロジェクト全体に関わるものとして、自然生態系を基盤とする社会と経済の持続可能な発展関係構築のため、先ず、①「琵琶湖水域圏」概念の提唱と分析、②「里山モデル (Satoyama モデル)」概念の提唱と分析、という二つの新たな概念による分析を提示し、課題に対する解決方向を示すとりまとめの研究を行ってきた。

次に、各研究班の研究を総合化し、琵琶湖水域圏のフレームワークに関わる、③水利と水理に関する研究、④琵琶湖水域圏をモデルとする具体的な環境政策の分析と提言を行った。また、愛知川流域での集約的な研究を琵琶湖水域圏全体へ拡張し、さらに、地方の各地の課題解決へと展開をするための手法として、GISなどを効果的に活用した、⑤基盤的景観情報に基づく研究手法を提示した。

続いて、本学が所有する「龍谷の森」で里山保全と食農に関わる実践活動を通じた、⑥新たな環境教育のあり方を示した。

そして、⑦研究成果の公開、として、本プロジェクトの研究成果は、毎年開催しているシンポジウムや、年 7~8 回程度開催する研究会、年次報告書、学術論文、叢書、ホームページ等で公開している。また、これらの研究および取り組みをさらに発信すべく、各年度における年次報告書の刊行およびセンターHP による公表を適宜行い、多くの関心を集めるよう取り組んできた。

①「琵琶湖水域圏」概念の提唱と分析

従来の分析枠組みである「河川」や「水系」、「流域」、「流域圏」などの概念は、従来の「治水」または「利水」中心の把握であり、「環境」や「持続可能性社会」、「資源循環」などの新たな要請に必ずしも応えるものではない。そこで、こうした枠組みを包摂しつつも、より対象と目的に適合した分析概念を求めて研究を行い、環境政策の変遷に対応した「琵琶湖水域圏」概念の必要性を提唱し * 78、* 53、琵琶湖が流入河川と流出河川との二つのシステムを示し * 79、* 80、琵琶湖水域圏概念の有用性とそれによる具体的な分析を行った * 81、* 82。

②「里山モデル (Satoyama モデル)」概念の提唱と分析

「里山モデル」概念については、SDGs をはじめとする持続可能社会の実現を目的とする国際的な政策・学術動向をふまえて議論を重ね、2018 年度里山学研究センターシンポジウム「SDGs と里山モデル—持続可能社会に向けて」の丸山講演 * 83 において提起した。その後、そこで示した里山モデルの琵琶湖水域圏における展開を図るべく、最終的にその概念の詳細な展開を示し * 84、そこからの次世代に向けた新たな展開を示した * 85。

また、「里山モデル」概念の基盤となる「里山学」という学問の意義を示し * 86、国際的な発信することで共通の学問的プラットフォームづくりを行った * 87。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

③里山と環境政策・環境経済

「資本ストック」と「環境ストック」という概念を用いて、持続可能な琵琶湖水域圏のあり方について新たに有用な視点を示した * 62、* 63。また、里山と環境経済について、東日本大震災以後の地域経済生活に関する調査研究を活かし、A.センの「潜在能力アプローチ」を生態系サービスとの関連から捉え直すことで、里山の環境経済を扱う理論的モデルの構築を試みた。生態系サービスの低下を「相対的貧困」として捉えることで既存の経済学の対象として組み入れ可能であることを提言した * 88。

さらに、国連の施策である SDGs を踏まえつつ、里山学研究センターとして目指すべき次世代に向けた代替的な社会像を国際的に提示した * 89。

④琵琶湖水域圏をモデルとする具体的な環境政策の分析と提言

琵琶湖の水理や生態系保全の地理的構造、人々の暮らしなどに照らして、湖岸のエコトーンの重要性を指摘した * 90。

また、2015 年に成立した「琵琶湖保全再生法」と、それを受けた滋賀県の琵琶湖保全・再生計画について、シンポジウムを開催するなど当初から研究対象として注目をしてきた * 91。その研究成果として、「生物多様性の保全」という観点から見た県の琵琶湖保全再生計画の検討をベースとして、琵琶湖総合計画以降の環境政策の全体の評価と今後の環境政策に向け、「治水」、「利水」と並ぶ「環境」に根差した具体的政策の必要性と、「沼地」保全とは異なる「大湖沼」保全の政策の必要性、なにより琵琶湖の全面的な資源調査の必要性を指摘した * 92、* 93。

⑤基盤的景観情報に基づく研究手法の提示

GIS を用いた景観情報の取得と分析の手法については、すでに一定の成果を挙げており * 56、* 94、* 95、さらに小型 UAV を用いて森林を撮影し、植生や資源量を把握する研究と接合し、コナラの樹形解析に基づく材積推定を行いバイオマス把握を行う * 37、* 96 など、森林資源の利活用に活かすための基礎的研究手法を確立した。

また、こうした基盤的景観情報の理解の可能性を拡充し、歴史的な変遷の意味を把握し、今後の計画計画等の土地利用計画への重要な示唆を提供した * 97、* 98、* 99、* 15、* 16。地理情報システム (GIS) を用いて過去の文献資料を可視化することにより景観や生態系サービスの分布を復原する研究に取り組み、資料として公開した * 57、* 53。

すでに、先行研究として、GIS を用いた持続可能な流域圏実現のための空間情報協働プラットフォームづくりと、情報の時間・空間的可視化を行う研究があるが(佐土原聡編(2010)『時空間情報プラットフォーム：環境情報の可視化と協働』(東大出版会))、より地理情報に加え、生態系情報や歴史的変遷の情報に加え、集落単位まで情報を細密化した研究は画期的であり、森林経営管理や土地利用計画における応用が期待される。

⑥新たな環境教育

環境教育の実践として、本学の一般向け教育講座である「龍谷講座」において京都市伏見区の生態系と文化・歴史の関わりを学ぶ野外実習 * 100 など、京都の生物に関する調査結果にもとづいて授業をおこない、里山モデルの教育への還元を図った。また、瀬田丘陵の里山を活用した新たな環境プログラムの提示 * 101、環境教育による人の成長に関する実態調査 * 102 など、大学の資源や地理的条件を生かした新しい環境教育に取り組み、大きな成果を挙げた。

また、本プロジェクトのメンバーを中心に、すでにプロジェクト発足前に公刊された一般向けの環境教育書(『里山学講義』)の内容をふまえ、本学の二回生向け授業「里山学」において、最新の研究成果をふまえて内容のさらなる更新を図った。また、里山学研究センターは 5 年間にわたり、司法修習生に対する選択的実務修習として、環境教育と里山を用いたフィールドワーク教育を行い、社会的に大きな役割を果たしてきた * 103、* 104、* 105、* 106、* 107。

環境教育の理論的研究については、精神医学領域で使用されている心理テスト「風景構成法」をもちいて大学生への調査をおこない、環境心理学・景観心理学の観点から、現代の若者への環境教育の課題を整理し、改善に向けた提言をおこなった * 108。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

⑦研究成果の公開

2015 年度の発足以来、5 年間にわたり、毎年度、公開の総括シンポジウムを行い(計 5 回)(2015 年度～2019 年度) * 91、* 109、* 61、* 110、* 76、年次報告書を刊行し(計 5 冊)(2015 年度～2019 年度) * 111、* 112、* 60、* 113、* 75、それらを PDF 等で HP 上に挙げるなど、研究成果を積極的に発信してきた。

また、研究叢書 2 冊 * 114、* 82、英文図書 1 冊(* 87)、目で見る琵琶湖水域圏と南大萱の地名に関する 2 つの資料集 * 53、* 115 を刊行した。また共同研究会は計 35 回開催してきた。

さらに、ドイツ・オーストリア、マラウイ、中国の森林資源利用に関する 3 回の海外調査をはじめ、国内の様々な調査研究を行ない、年報等で成果を公開してきた。

その他、各種の環境教育活動や様々な行政との社会連携による研究・教育活動を行ってきた。

<優れた成果が上がった点>

第1は、里山研究において、「琵琶湖水域圏」という新たな概念を提示し、琵琶湖という具体的な対象を据えつつ、その研究を通じて汎用性のある分析を行ったことである。具体的には、河川や湖を含む水をめぐる土地の利用計画において、「環境」と「持続可能性」に焦点あてた「琵琶湖水域圏」概念の提唱とそれによる琵琶湖を含むさまざまな課題の分析を行ったことである。これによって、水環境における持続可能な生態系保全のあり方や、治水における「流域治水」という考え方の具体的な意義を明確に位置づけ、今後の政策的具体化に資するものである。

また、「次世代シーケンサー」を用いた琵琶湖の湖岸帯および淀川における環境 DNA 分析を大規模に実施し、環境 DNA 分析手法の確立に大きく資する成果を得るとともに、今後の生態系調査の大きな足掛かりを得た。

第2は、「里山モデル(Satoyama モデル)」概念を提唱し、それに基づく次世代社会の倫理的基礎の研究を行った点である。丸山による「里山モデル」の哲学的・倫理的な基礎研究は、本プロジェクトの理論的支柱として当初から重要性が高く、期間中にその成果は叢書、年次報告書、シンポジウムのすべてにおいて公開され、つねに研究成果が積み重ねられてきた。その成果にもとづいて村澤らの応用研究が重ねられ、そこから本プロジェクトを継承する次期プロジェクトが発足し、龍谷大学の重点強化型研究推進事業「人新世」時代の新・里山学の創造—新たな「自然」概念構築と「自然との対話」方法論の確立に向けた文理融合研究」として採択されたことにより、従来より広範囲かつグローバルな研究領域を扱う基礎が整うことになった。

また、「里山モデル」の基盤となる「里山(Satoyama)」という概念については、英語圏で注目されているにもかかわらず現時点では数に乏しい Satoyama Studies を扱う貴重な資料として、本プロジェクトの研究成果の論文を集めた英文書籍を発行し * 87、今後のグローバルで共通の議論を発展させた。

第3は、「琵琶湖水域圏」および「里山モデル」を基軸とする自然共生・循環型の持続可能社会のあり方についての新たな環境政策の提言としては、期間中におこなわれた琵琶湖の保全再生に向けた諸課題についての研究をまとめて最終年度のシンポジウムおよび叢書にて発表・公刊し * 82、自治体のみならず地域住民にとっても有益な指針を提供した。

さらに、こうした研究を土台として、「琵琶湖保全再生」という喫緊の政策課題について、具体的な政策の方向性を示した点である。

第4は、「基盤の景観情報に基づく研究手法」を提示し、地域の歴史と文化、地理的諸条件を踏まえた土地や森林、河川等の利用計画立案のための情報整備を行った点である。具体的には、すでに東近江市の森林・林業政策の手法に取り入れられるなど、基礎情報のベースを確立したことである。

第5に、「新たな環境教育プログラムの開発」については、大学院・学部における野心的な学際教育プログラムを計画し、その一部は教養教育科目「里山学」の授業に取り入れられ、さらに大学院の改革案として継続的に審議されている。さらに「人生 100 年時代」や「超スマート社会(Society5.0)」における生涯学習における里山及び環境教育の可能性を示した点である。

第6に、構想調書に記載したように、研究課題を意識した総括シンポジウムを毎年度開催した点である。初年度の 2015 年度には、本研究プロジェクトのオープニング公開シンポジウム「琵琶湖の保全再生と里山・里湖 ～人と水との共生にむけて～」* 91、2016 年度には、「流域のくらしと奥山・里

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

山 ～愛知川から考える～」* 109、2017 年度には、「里山学から考える防災・減災 ～琵琶湖水域圏の保全・再生に向けて～」* 61、2018 年度には、「SDGs と里山モデル—持続可能社会に向けて」* 110、2019 年度には、「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信」* 76 を開催した。

いずれのシンポジウムにおいても、本プロジェクトとして現実的な課題と向き合い、行政や地域住民、研究者が一堂に会し、琵琶湖水域圏における持続可能社会の実現に向けた現状把握とこれからの課題を整理し、自治体や企業、地域住民、研究機関が共通して直面する困難な状況を克服する方向性を示すものであった。

第7に、本研究プロジェクトは、他の類似の研究プロジェクトと比べ、文系、理系にまたがる多くの様々な分野の研究者が協働し、自然科学と人文社会科学を融合した研究成果を挙げたことが何より大きな特徴であるといえる。

<課題となった点>

本プロジェクトが計画を実行するにあたり直面した課題は大きく三つある。

第1は、本プロジェクト発足後に生じた、SDGs に代表される急速かつ世界的な環境意識の高まりと政策、学術動向の変化である。2018 年度にはそうした変化をふまえた研究へとシフトし、シンポジウムと叢書の内容に反映するよう努めたものの、プロジェクトの性格上、その範囲は限られることになった。もっとも、研究構想調書の課題の中で、一定の対応を図ることができた。

第2は、本プロジェクト構想後に発足した琵琶湖保全再生法をめぐる政治的動向が、国外の環境行政の状況とは逆に、停滞したことである。本プロジェクトの重要な課題であった「琵琶湖イニシアティブ」の策定も、「琵琶湖保全再生法」の実効性を担う自治体との協力を前提としたものであったが、地方自治体が直面する人口減少や税収減、景気停滞などの諸問題の激化のために、「琵琶湖保全再生法」自体の実効性が危うくなったため、琵琶湖保全再生法に直結する課題から方向を転換し、「琵琶湖水域圏」全体を包括する政策提言にシフトすることになった。

第3は、新たな環境教育プログラムを構想し、実行するにあたり前提となる本学の教学体制との連携が、学内事情により、期間内には実現しなかったことである。本プロジェクトでは持続可能社会を主題とした野心的で学際的な大学院・学部教育のプログラムを構想し、実現に努めたが、現時点では本学では学際教育を導入する段階に至っておらず、大学としての実行を待つことになった。

以上が本プロジェクトにとって大きな課題となった事柄である。

<自己評価の実施結果と対応状況>

自己評価としては、毎月一回開かれる研究プロジェクトの「運営会議」において、研究の推進状況やその進捗状況について審議し、さらに、毎年度一回開いた研究員全員を対象とした「全体会議」において、年度毎の計画や目標を定め共通確認を行って進めてきた。

また、研究員全員に対して毎年度 7、8 回行った共同研究会と、各年度の成果報告を総括する場でもある研究センター主催の公開シンポジウム * 91、* 109、* 61、* 110、* 76 において、兼任研究員およびプロジェクト参加した院生・学生、外部の有識者がそれぞれ成果報告・発表を行い、研究手法や結果について相互に指摘し合いながら相互評価、改善活動を恒常的に行ってきた。

これらの成果は、各研究員の個別の研究成果とともに、年次報告書としてまとめて発行し、研究班長およびユニット長が各年度の達成状況の確認を行っている。

さらに、5 年間で 2 冊の研究叢書 * 114、* 82 をまとめて公刊し、それについて外部者による書評会を開くなど、研究手法や達成度について改善を図ってきた。

学術論文	図書	学会報告	研究会(学内開催)
77	21	47	35

上記のように、自己評価結果としては、当初の計画に従い着実に研究を進めており、特に文理連携の研究に基づく図書の出版など、成果物を公表できていると判断している。

さらに、研究費の支出・配分についても、上記の「運営会議」において審議・決定しており、適正な管理を行ってきた。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

<外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

第1回目は、2016年度終了時点(2017年6月15日実施)で、第2回目は、2018年度終了時点(2018年3月13日)で外部評価を行った。

第1回目、2回目ともに、本学の研究規定に従い、学外者を含む外部評価委員を組織し、評価を実施した。センターが最初に研究の概要を説明し、その後、評価委員から質疑がなされる形で行われ、その成果報告書およびヒアリング(90分)をもとに、3名の外部評価委員による評価(各項目5点満点)を受けた。

(1) 第1回目の外部評価の対応状況

評価項目	J委員	K委員	L委員	平均点
①研究計画の妥当性	4	4	5	4.33
②研究進捗状況	4	4	4	4.00
③研究体制	4	4	4	4.00
④研究業績	3	3	5	3.66
合計	15	15	18	4.00

以上のように、外部有識者による評価は本プロジェクトの着実な進捗を高く評価するものであり、本学としても引き続き、強みのある研究として推進することを決定した。

(2) 第2回目の評価状況

評価項目	委員1	委員2	委員3	平均点
①研究計画の妥当性	4	5	4	4.30
②研究進捗状況	4	4	4	4.00
③研究体制	3	4	4	3.70
④研究業績	3	5	5	5.00
合計	16	18	17	4.25

外部評価の主な指摘としては、①提言しようとする政策(琵琶湖イニシアティブ)との研究成果・研究分野の関連付け、②具体的な政策提案に向けた行政・財界とのチャンネルづくり、③経済学的分析の必要性である。

①については運営会議での議論をつうじて、2018年度および2019年度のそれぞれのシンポジウム*110、*76と叢書*114、*82において、具体的なかたちで示すことにより対応を図った。また、②については、東近江市および滋賀県を中心とした自治体担当者との連携を深めることにより、対応を図った。③については、里山の環境経済を扱う理論的モデルの構築を図り、今日の持続可能社会における評価指標を示し、課題に応えた。

<研究期間終了後の展望>

本研究期間の終了後は、龍谷大学の重点強化型研究推進事業「人新世」時代の新・里山学の創造—新たな「自然」概念構築と「自然との対話」方法論の確立に向けた文理融合研究をおこなうことが決まっており、すでに活動を開始している。この事業においては、これまでの里山学の研究蓄積を発展的かつ批判的に継承しつつ、「人新世」や「地球の限界」の提唱といった時代認識を踏まえて、新たな「自然」概念構築と「自然との対話」のための方法論確立・実践に向けた文理融合研究を行うことを目的とする。そのために自然科学・人文科学・社会科学の学際的研究を推進する4つの文理融合型研究ユニット(①「龍谷の森」で森の生きものたちと学生・社会人・子どもたちとの「対話」を支援する方法論の構築、②東近江の森の診断を通じて森と住民との「対話」を支援する方法論の構築、③琵琶湖・淀川流域圏の「森・里・川・湖」と住民との「対話」を支援する方法論の構築、④「人新世」時代の新たな科学パラダイムの構築(新しいトポスの知「新・里山学」の創造)を設置し、学術動向のグローバル化にも対応するべく国際的研究発信を進める予定である。

また、5年間の本プロジェクトの成果にもとづき、これまでの「龍谷の森」の活用と琵琶湖・淀川水域圏における持続可能社会の実現に向けた学際研究を継続しつつ、持続可能社会を主題として急

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

速に進展する政策・学術動向に対応するべく、あらたに今後の学際研究拠点として必要な次世代型学術パラダイムの構築作業をおこない、成果を上げることを展望している。

<研究成果の副次的効果>

これまでの里山学研究センターの一連の活動により、「琵琶湖水域圏」概念を中心とした文理連携および官学連携による総合的研究を推進する研究拠点を生み出すことができた。特に、滋賀県(琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課)とは 2015 年の琵琶湖保全再生法に基づく具体的な計画の設定に向けて、これまで継続的に連携強化を図っており、加えて、東近江市(市民環境部水と森政策課)とも恒常的に連携・協力し、国の施策や地域の課題を適切に把握しつつ広域自治体・基礎自治体において研究成果を具体化することで、地域連携の貢献および期待を創出している。具体的には、東近江市における地方創生および森林・林業政策に関して、エコツーリズム・フットパスのコースづくりや WaW(ウォーカーズ・アー・ウエルカム)タウンづくり、および「東近江 100 年の森づくりビジョン」の策定に関わるなど、行政と研究との連携が生み出され、今後一層の連携が進む予定である。

さらに、国外の研究機関との連携として、東アジア圏における森林政策の課題と展望につき中華人民共和国の「国家林業局経済発展センター」と、森林資源の利用と保全に関する研究につき「マラウイ湖国立公園」および「マラウイ大学」と、継続的にワークショップや調査研究をするに至っており、今後もさらなる連携強化が図られる予定である。

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 琵琶湖水域圏 (2) Satoyama モデル (3) 琵琶湖イニシアティブ
 (4) 文理融合 (5) 生物多様性 (6) バイオマス
 (7) 里山 (8) 環境・社会政策

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

1. Furuhashi T, Nakamura T, Iwase K. Analysis of metabolites in stem parasitic plant interactions: Interaction of Cuscuta-Momordica versus Cassytha-Ipomoea. *Plants* 5:43.2016. 査読付
2. 岩瀬剛二・乙幡奨平、西表島の海岸植物の多様性、帝京科学大学紀要 12:57-74. 2016、査読付
3. Sawabe K, Natuhara Y. Extensive distribution models of the harvest mouse (*Micromys minutus*) in different landscapes. *Global Ecology and Conservation* 8. 2016年10月. 108-115. 査読付
4. Ramamonjisoa N, Rakotonoely H, Y. Natuhara. Animal or algal materials: food toughness, food concentration and competitor density influence food choice in an omnivorous tadpole. *Herpetologica* 72. 2016年7月. 114-119. 査読付
5. Ramamonjisoa N, Iwai N, Natuhara Y. Post-metamorphic costs of larval animal diet in an omnivorous tadpole. *Copeia* 104. 2016年11月. 808-815. 査読付
6. Ramamonjisoa N, Rakotonoely H, Natuhara Y. Food preference in relation to food protein content and toughness in a pond dwelling tadpole. *Journal of Herpetology* 51. 2017年3月. 47-51. 査読付
7. Ramamonjisoa N, Natuhara Y. Hierarchical competitive ability and phenotypic investment in preys: inferior competitors compete and defend. *Journal of Zoology* doi: 10.1111/jzo. 12406. 2016年10月. 査読付
8. 高橋佳孝・井上雅仁、三瓶山ススキ草地の種多様性を指標する植物種の抽出、島根県立三瓶自然館研究報告 15:13-19、2017年3月31日、2017
9. 大谷一郎・高橋佳孝・堤 道生、ススキ(*Miscanthus sinensis* Anderss.)の導入方法の違いがススキの定着ならびに植生に及ぼす影響、日本草地学会誌 62:75-78、2016、査読付
10. 高桑 進、杉が21世紀の日本を救う、国際いけ花学会論文集、2017
11. Takashi Yamamoto, Hiroyoshi Kohno, Akira Mizutani, Ken Yoda, Sakiko Matsumoto, Ryo Kawabe, Shinichi Watanabe, Nariko Oka, Katsufumi Sato, Maki Yamamoto, Hisashi Sugawa, Kiyotaka Karino, Kozue Shiomi, Yoshinari Yonehara and Akinori Takahashi. Geographical variation in body size of pelagic seabird, the streaked shearwater *Calonectris leucomelas*. *Journal of Biogeography* (J. Biogeogr.) 43. 801-808. 2016
12. 須川 恒、京都府・冠島のオオミズナギドリの巣穴数の35年後の変化、ALULA (No. 52, 2016 春号): 26-30、2016
13. 須川 恒、大阪バードフェスティバル 2015『カラーマーキング調査が開く野鳥の世界』ブース展示報告、ALULA (No. 52, 2016 春号): 43-51、2016
14. 須川 恒、ツバメの集団ねぐらを通してヨシ原を守る、野鳥、2016年7月号、No. 806: 16
15. 須川 恒、ツバメの渡りと集団ねぐら、ソングポスト、201(2016年8-9月号): 16-18、2016
16. 須川 恒、いのちの森と京都の自然、いのちの森 No. 20: 61-63、京都ビオトープ研究会、2016
17. 須川 恒・狩野清貴、京都府冠島におけるオオミズナギドリ 現状と課題、月刊海洋9月号(オオミズナギドリ特集号(上)): 409-414、2016
18. 須川 恒、湖北地方で越冬する亜種オオヒシクイの繁殖地の探求(特集巻頭エッセイ)、み～な、vol. 129: 2-3、2016
19. Maruyama, A., Tanahashi, E., Hirayama, T., and Yonekura, R., "A comparison of changes in stable isotope ratios in the epidermal mucus and muscle tissue of slow-growing adult catfish", *Ecology of Freshwater Fish.* 26: pp636-642(2017), 査読付

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

20. Shigeta, K., Tsuma, S., Yonekura, R, Kakamu H., Maruyama, A., “Isotopic analysis of epidermal mucus in freshwater fishes can reveal short-time diet variations”, *Ecological Research* . 32 : pp633-641(2017),査読付
21. Iwai, N.*, Koyama, N.*, Tsuji, S.*, Maruyama, A.*, “Functions of indigenous animals in paddy fields: An in situ experiment on their effects on water quality, phytoplankton, weeds, soil structure, and rice growth”, *Paddy and Water Environment*. In press., 査読付 *: equal contribution.
22. 神松幸弘・富田晋介・丸山 敦・船津耕平・門司和彦、“メコン川下流水田域における生業、土地利用、生態系サービス:水位変動下における適応”、*環太平洋文明研究*. 1 : pp69-92(2017)、査読付
23. 西大嵩樹・丸山 敦、“ニジマスの採餌応答に見られるルアー色と濁度の交互作用”、*魚類学雑誌*、64(2)、(2017)、査読付
24. 今村彰生・橋本果穂・丸山 敦、“2015 年夏季に琵琶湖北西岸で捕獲された魚食性絶滅危惧魚種ハス(*Opsariichthys uncirostris uncirostris*)の空腸率と体型について”、*伊豆沼・内沼研究報告*、(2017)、査読付
25. 沢田 隼・米倉竜次・丸山 敦、“アユの炭素、窒素安定同位体比分析のための脂質量補正式と筋肉、卵巣、粘液における濃縮係数”、*魚類学雑誌*. 65(1)、(2018)、査読付
26. Sato H, Sogo Y, Doi H, Yamanaka H , “Usefulness and limitations of sample pooling for environmental DNA metabarcoding of freshwater fish communities”, *Scientific Reports* Vol.7 pp14860(1 Nov 2017)、査読付
27. **秋山道雄、“ラムサール条約湿地としての琵琶湖—登録が果たした機能を中心に—”、『地理科学』Vol. 72, No. 3, pp. 166-181(2017 年 10 月)、査読付 * 13**
28. Watanabe, S., Kaneko, Y., Maesako, Y., Noma, N. , “Detecting the early genetic effects of habitat degradation in small size remnant populations of *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. (Lauraceae) ”, *International Journal of Forestry Research* Volume 2017: pp1-7.(2017 年 3 月), 査読付
29. 神松幸弘・丸山 敦、“変態の遅延するモリアオガエル(*Rhacophorus arboreus*)幼生の観察および炭素・窒素安定同位体分析による生態的地位の推定”、*爬虫両棲類学会誌*. 2017(1):pp30-36 (2017)
30. 遊磨正秀 編、“ホタル関連文献目録 2016 年版”、全国ホタル研究会. 297 pp(2017)
31. 遊磨正秀、“総説動植物に対する「光害」, 特にホタル類への影響”、*全国ホタル研究会誌* 50 : pp25-40(2017)
32. 秋山道雄、“分水嶺にきていた工業用水問題の分析”、『*水資源・環境研究*』Vol. 30, No. 2,pp. 25-26(2017 年 12 月)
33. 須川 恒、“北の国からの来訪者—オオミズナギドリ・ユリカモメ・コクガン—”、*ALULA*(No.54,2017 春号): pp36-42(2017)
34. 須川 恒、“ユリカモメのカラーリング調査は世界を結ぶ—大阪自然史フェス 2016 ブース展示報告—”、*ALULA*(No.54,2017 春号): pp43-48(2017)
35. 高橋佳孝、“阿蘇草原の自然再生と草資源の堆肥利用”、*GREEN AGE* 2017 年 7 月号 pp30-33 (2017 年 7 月 15 日)
36. **高橋佳孝、“風景を語る 第 1 回高橋佳孝氏(阿蘇草原再生協議会会長)”、文化的景観だより(阿蘇都市世界文化遺産登録事業推進協議会事務局(阿蘇世界文化遺産推進室))1 号 pp3(2017 年 3 月) * 48**
37. 林珠乃(2016)「天津市瀨田・田上地区の景観」*龍谷理工ジャーナル* 28 巻 1 号(pp.1-6)
38. 横川昌史・佐藤千芳・高橋佳孝、“過去の草地改良が草原植生に与える影響:阿蘇地域での一例”、*地域自然史と保全* Vol.39 No.2 pp113-119(2017 年 1 月) 査読付
39. 増井太樹・横川昌史・高橋佳孝・津田智、“熊本県阿蘇地域における斜面崩壊後 4 年目および 26 年目の半自然草原植生”、*日本緑化学会誌* 44 pp352-359(2018 年 11 月)査読付
40. 丸山徳次、“事件の哲学と応答倫理学—「事例研究」ではなく”、*関西倫理学会編『倫理学研究』* 第 48 号 pp28-39 査読付
41. 遊磨正秀、“ゲンジボタル成虫発生量の年変動:降雨以外に月の明るさは影響するのか”、*全国*

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ホタル研究会 51 pp12-15.(2018年7月)
42. 秋山道雄、“桂川流域の経験”、水資源・環境学会 NEWS LETTER No.78 pp7-8(2018年12月)
 43. 井上雅仁・高橋佳孝、“島根県三瓶山の刈り取り草原における絶滅危惧植物スズサイコの動態”、島根県立三瓶自然館研究報告 Vol.16 pp7-14(2018年3月)
 44. Thomas Lei, Naoko Yamashita, Takuya Watanabe, Takayuki Kawahara, Tomiyasu Miyaura, “Why does *Daphne pseudomezereum* drop its leaves in the summer? An adaptive alternative to surviving forest shade”, *Physiologia Plantarum* (doi:10.1111/ppl.12972),(2019年) 査読付
 45. Mahoro MURASAWA, Stéphane NADAUD, “Ecosophy as an ethical mode of existence”, in *Why Guattari? A liberation of cartographies, ecologies, and politics.*: Routledge Studies in Human Geography (Thomas Jellis et al. eds.), Routledge, pp.119-132., 2019 may. 査読付
 46. **伊達浩憲、“水陸移行帯における漁業・採藻の生業—明治期の琵琶湖・大中の湖周辺村落の事例”『経済学論集』Vol.59 No.1 pp.51-68(2019年11月) 査読付 * 45**
 47. Sawada Hayato, Shigeta Kanji, Kawakami Masaki, Yuma Masahide, Maruyama Atsushi, “Isotope analysis reveals proportional change and site-selection variation of river- and lake-produced eggs of a landlocked migratory fish” *Journal of Fish Biology*, doi.org/10.1111/jfb.14200 (2019Nov12) 査読付
 48. 岩瀬剛二・石垣圭一・井村信弥・寺嶋芳江、“西表島における海浜性寄生植物スナヅルの成長と増殖”、帝京科学大学紀要 Vol.15 pp23-31(2019年3月) 査読付
 49. 吉田悠樹・雨宮正哲・岩瀬剛二、“ツメクサの草姿形成要因—対生葉序における側芽伸長の優劣性”、帝京科学大学紀要(掲載確定:2020年3月) 査読付
 50. 小田奏・宮浦富保・林珠乃、“小型 UAV による空撮画像からの「龍谷の森」植生図作成の試み”、龍谷大学里山学研究センター2018年度年次報告書 pp227-239(2019年3月)
 51. 宮浦富保、“龍谷の森での学生の研究活動”、龍谷大学里山学研究センター2018年度年次報告書 pp111-112(2019年3月)
 52. Mahoro MURASAWA, “Preface”, in Mahoro MURASAWA ed., *Satoyama Studies: Socio-Ecological Considerations on Cultural Nature*, Union Press, 2020 winter (in press).
 53. 村澤真保呂、“神秘主義が照らす現代世界”、『福音と世界』2020年1月号、新教出版、pp.12-17.
 54. 遊磨正秀、“ホタル関連国外論文紹介:水生ホタル *Luciola ficta* [中国名:黄縁螢]の生活史(鞘翅目:ホタル科)”全国ホタル研究会誌 52: 28-30.(2019年4月)
 55. 遊磨正秀・西野伸・京都ほたるネットワーク2019、“京都市内10か所におけるホタル成虫発生量の年変動ならびに生残率(2010年~2018年)”全国ホタル研究会誌 52: 12-15.(2019年4月)
 56. 須川恒、“冠島の調査とオオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* の日周行動”、*Alula*, No.58:29-33(2019年5月).
 57. 須川恒、“スコット・サイモンさんについて”、*Alula*, No.58:34-35(2019年5月).
 58. 須川恒、“あたらしい時代のバンディングを考える”、*Alula*, No.58:40-49(2019年5月).
 59. 澤祐介・須川恒、“「野鳥を通して身近な自然を知る」夏期集中講義野外観察法”、*Alula*, No.59:34-49(2019年11月).
 60. 須川恒・澤祐介、“ツバメの換羽を観察する前にするクイズ”、*Alula*, No.59:20-23(2019年11月)
 61. 岩瀬剛二・仲山英之・下岡ゆき子・渡邊浩一郎・橋本慎治・本間眞一、“自然環境エキスパート学生養成プログラム—教育推進特別研究事業報告—”、帝京科学大学紀要(掲載確定:2020年3月)
 62. 岩瀬 剛二・小川真紀子・石井愛子・阿部素花・岩本一真・大野由恵・佐藤優夏・吉田悠樹・桑田龍・小島周子、“接ぎ木テープに用いる固定用テープの検討”、帝京科学大学紀要(掲載確定:2020年3月)
 63. 渡辺めぐみ、“下層労働階級による観光—近代イギリスの hop pickers をめぐる—考察”、龍谷大学社会学部紀要(53)pp58-67(2018年11月)
 64. Qianqian Wu, Ken Kawano, Toshiyuki Ishikawa, Masayuki K. Sakata, Ryohei Nakao, Masayoshi K. Hiraiwa, Satsuki Tsuji, Hiroki Yamanaka, Toshifumi Minamoto, “Habitat selection and migration of the common shrimp, *Palaemon paucidens* in Lake Biwa, Japan—An eDNA-based study.”、*Environmental DNA* Vol.I No.1 pp54-63(2019年)、査読付

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

65. Satsuki Tsuji, Teruhiko Takahara, Hideyuki Doi, Naoki Shibata, Hiroki Yamanaka, “The detection of aquatic macroorganisms using environmental DNA analysis—A review of methods for collection, extraction, and detection.”, Environmental DNA Vol.1 No.2 pp99–108(2019 年)、査読付
66. Kimiko Uchii, Hideyuki Doi, T Okahash, Izumi Katano, Hiroki Yamanaka, Masayuki K Sakata, Toshifumi Minamoto, “Comparison of inhibition resistance among PCR reagents for detection and quantification of environmental DNA.”, Environmental DNA Vol.1 No.4 pp359–367(2019 年)、査読付
67. Satsuki Tsuji, Masaki Miya, Masayuki Ushio, Hirotooshi Sato, Toshifumi Minamoto, Hiroki Yamanaka, “Evaluating intraspecific genetic diversity using environmental DNA and denoising approach: A case study using tank water. Environmental DNA.”, Environmental DNA Vol.1 No.2 pp42–52(2019 年)、査読付
68. 山中裕樹、廣原崇也、“環境 DNA 試料の採取から分析に至るまで～採水、保存・運搬、ろ過の現状～.”、化学と生物 Vol.57 No.6 pp380–387(2019 年 6 月 1 日)
69. 村澤真保呂、「精神医学から反記号論哲学へ：フェリックス・ガタリ研究のための覚え書き」、『国際社会文化研究所紀要』(20 号), pp.173–181(2018 年 6 月)、査読付
70. 村澤真保呂、「現代社会分析のためのガタリ思想のアップデート(G.ジェノスコ『フェリックス・ガタリ：危機の世紀を予見した思想家』法政大学出版会)書評」、『図書新聞』(3380 号)(2018 年 12 月)
71. 村澤真保呂、「言葉なき樹木たちの囁き——中井久夫「世界における索引と兆候」をめぐって」、『文藝別冊「中井久夫：精神科医のことばと作法」』、河出書房新社、pp.159–168(2017 年 6 月)
72. 村澤真保呂、「『常軌』を逸脱する思考のために」、『文藝』2016 年春季号、河出書房新社、pp.510–511(2016 年 1 月)
73. 村澤真保呂、「主要著作ガイド『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症』」、『文藝別冊 ドゥルーズ没後 20 年：新たなる転回』、河出書房新社、pp.220–221(2015 年 10 月)
74. 牛尾洋也、「＜法学者の本棚＞ヨアヒム・ラートカウ著『自然と権力 環境の世界史』、(海老根剛・森田直子訳)みすず書房、『法学セミナー(726 号)』、(2015)pp1
75. **牛尾洋也、「里山学からの地域資源管理主体の視座」、『農業法研究』54 巻、pp66–74(2019 年 6 月) * 29**
76. 牛尾洋也、「三木敦朗報告『森林経営管理法の課題と入会林野・生産森林組合』(第 39 号)に関する感想」、『入会林野研究』40 号、pp62–66(2020 年 3 月)
77. 丸山徳次、「問題共同体としての里山学—龍谷大学＜里山学研究センター＞の 16 年—」、『21 世紀倫理創成研究』13 号、pp26–39(2020 年 3 月)

<図書>

1. **牛尾洋也・伊達浩憲・宮浦富保、森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—**、晃洋書房、2020 年 3 月 25 日 * 82 (※内容は、No.12～No.30 を参照。)
2. **Mahoro MURASAWA (ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020. * 87** (※内容は、No.31～No.39 を参照。)
3. **牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子、「琵琶湖水域圏の可能性—里山学からの展望」、晃洋書房、2018 年 3 月 30 日 * 114** (※内容は、No.40～64 を参照。)
4. 宮浦富保、「植物間の競合：種間競争、種内競争」、造林学第四版(丹下健・小池孝良編)、朝倉書店、84–91、2016
5. 高橋佳孝、阿蘇の草原「阿蘇の文化的景観」保存調査報告書 II：詳細調査。(阿蘇世界文化遺産推進室編)、阿蘇市・南小国町・小国町・産山村・高森町・南阿蘇村・西原村、阿蘇、p159–210、2016
6. Takahashi Y, Neef A, Yokogawa H. Conservation and restoration of traditional grasslands in the Mount Aso region of Kyushu, Japan—The role of collaborative management and public policy

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- support-. Shifting Cultivation Policies: Balancing Environmental and Social Sustainability (Cairns M ed.). Centre for Agriculture and Biosciences International (CABI), Oxfordshire.. 2017
7. 西野麻知子・秋山道雄・中島拓男(編)『琵琶湖岸からのメッセージ 保全・再生のための視点』、サンライズ出版 pp. 248(2017年10月5日) * 90
 8. 橋本啓史・須川恒、“第7章 水鳥の現状とその変遷—価値ある湖岸湿地保全のために”、西野麻知子・秋山道雄・中島拓男(編)『琵琶湖岸からのメッセージ 保全・再生のための視点』(pp248)、サンライズ出版 pp176-193(うち 7-1, 7-4 は須川・橋本)
 9. 須川 恒・橋本啓史、“7-14 水鳥”、琵琶湖ハンドブック三訂検討チーム会議(編)『琵琶湖ハンドブック三訂版』、滋賀県琵琶湖環境部環境政策課(2018)
 10. Yositaka Takahashi, Andreas Neef, Hiroshi Yokogawa, “Conservation and Restoration of Traditional Grasslands in the Mount Aso Region of Kyushu, Japan—The role of collaborative management and public policy support—”, Shifting Cultivation Policies: Balancing Environmental and Social Sustainability (Cairns M ed.). Centre for Agriculture and Biosciences International (CABI), pp174-192(2017年11月)
 11. 横川 洋・高橋佳孝(共編著)、“阿蘇地域における農耕景観と生態系サービス—文化的景観論で地域価値を再発見し世界文化遺産登録を支援する—”、農林統計出版 pp1-378(2017年4月11日)
 12. 牛尾洋也、“「琵琶湖水域圏」概念の位置付け”、晃洋書房 pp1-10、(2020年3月) * 81
 13. 丸山徳次、“持続可能社会と里山モデル—琵琶湖水域圏の保全再生にむけて—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp11-28、(2020年3月) * 84
 14. 秋山道雄、“琵琶湖保全再生計画の試金石—生物多様性の保全をめぐる—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp29-42、(2020年3月) * 93
 15. 中川晃成、“淀川水系治水の行方—琵琶湖と巨椋池を含む水理—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp43-58、(2020年3月) * 4
 16. 遊磨正秀・太田真人、“滋賀県湖東平野を流れる愛知川の水利と流況および生物多様性”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp59-72、(2020年3月) * 8
 17. 太田真人・遊磨正秀、“砂礫州と生物多様性—滋賀県愛知川の砂礫性生物—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp73-82、(2020年3月) * 9
 18. 高桑進、“瀬田丘陵にある旧里山を利用する新しい環境教育プログラムの開発—「龍谷の森」の木質バイオマスを活用する新規な炭焼き活動—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp83-92、(2020年3月) * 101
 19. 占部武生・水原詞治、“薪ストーブ燃焼ガス中—酸化炭素等の褐鉄触媒による完全燃焼化—貴金属系触媒から褐鉄触媒への代替化の可能性について”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp93-100、(2020年3月) * 40
 20. 林珠乃、“過去の文化的景観を復原する—明治初期の滋賀県における里山・里湖利用—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp101-112、(2020年3月) * 57
 21. 猪谷富雄、“滋賀県の稲作をめぐる—過去・現在・未来—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp113-128、(2020年3月) * 43
 22. 牛尾洋也、“森林の経営・管理と「地域性」”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp129-144、(2020年3月) * 28
 23. 西脇秀一郎、“公共団体と NPO 法人による賃貸借型の林地管理—私有地の所有と管理に伴う法的課題を踏まえて—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp145-160、(2020年3月) * 31
 24. 鈴木龍也、“自然観賞型遊歩道の管理責任に関する—考察—2つの落枝事故訴訟の検討を通して—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp161-174、(2020年3月) * 77

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

25. 石塚武志、“滋賀県における流域治水条例の運用状況の検討”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp175-184、(2020年3月)*3
26. 伊達浩憲、“潜在能力アプローチから見た生態系サービス享受プロセス—災害復興と well-being の回復—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp185-200、(2020年3月)*88
27. 村澤真保呂、“新たな自然観と里山学—自然共生型社会のための次世代学術パラダイムに向けて—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp201-212、(2020年3月)*85
28. 須川恒、“多様なガン類のいる景観をとりもどす”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp213-224、(2020年3月)*12
29. 谷垣岳人、“環境保全型農業が水田の生物多様性に与える影響と課題—滋賀県と京都府の事例から—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp225-236、(2020年3月)*44
30. 好廣眞一、“人はどこで変わり育つのか?—神興巡行・自然学校・ヤクザル調査隊—”、“森里川湖のくらしと環境—琵琶湖水域圏から観る里山学の展望—”、晃洋書房 pp237-248、(2020年3月)*102
31. Mahoro MURASAWA, “Preface”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.1-18. *89
32. Tokuji MARUYAMA, “What is satoyama studies?: Conservation and restoration of “nature as culture”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.19-40 (Chapter 1).
33. Shigeru TANAKA, “Domestic decolonization of rural villages: Society as viewed from the “crisis” of village forests”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.41-62 (Chapter 2).
34. Tatsuya SUZUKI, “Changes in satoyama issues: Focusing on iriai”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.63-80 (Chapter 3).
35. Hiroya USHIO, “Historical organization process of ownership and management of satoyama: A case study of state mountain sale petitions”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.81-106 (Chapter 4).
36. Tomiyasu MIYAURA, “Relationship between forests and people: Satoyamas in Shiga Prefecture”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.107-118 (Chapter 5).
37. Shuichiro NISHIWAKI, “Issues accompanying Japan’s community association legal systems: Role of the association in community resource management”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.119-148 (Chapter 6).
38. Masahide YUMA, “Waterside environments and satoyama: Familiar living things and the rise and decline of nature cultures”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.149-166 (Chapter 7).
39. Tamano HAYASHI, “Satoyama ecosystem services”, in Mahoro MURASAWA(ed.), Satoyama Studies: Socio-ecological Considerations on Cultural Nature, Union Press, 2020, pp.167-184 (Chapter 8).
40. 牛尾洋也、“公衆の水への権利に向けて—水法の法理論的課題—”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp55-70、(2018年3月)*64
41. 吉岡祥充、“公社造林と里山—「造林公社問題」の残された課題—”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp232-247、(2018年3月)*33
42. 清水万由子、“ストックとしての里山と持続可能な発展—琵琶湖水域圏における人と水の相互作用

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

	<u>用一”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp71-84、(2018年3月)*62</u>
43.	<u>丸山徳次、“「里山問題」の転換と里山学の課題ー<文化としての自然>の保全・再生ー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp3-17、(2018年3月)*86</u>
44.	<u>秋山道雄、“琵琶湖保全再生計画の位相ー琵琶湖総結後 20年間の堆積と変容をめぐってー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp18-29、(2018年3月)*92</u>
45.	<u>田中滋、“琵琶湖とその「乳母」たちー流入河川の存在意義を考えるー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp30-42、(2018年3月)*79</u>
46.	<u>田中滋、“河川、琵琶湖、盆地による<繋がり>と分断>を考えるー近代化の「負の遺産」克服のためにー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp98-110、(2018年3月)*80</u>
47.	<u>石塚武志“琵琶湖流域治水条例”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp43-54、(2018年3月)*2</u>
48.	<u>中川晃成、“流域をとらえるー愛知川流域の地形・水系・地割ー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp87-97、(2018年3月)*15</u>
49.	<u>中川晃成、“近江愛知郡神崎郡の条里と古代愛知川流路”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp111-122、(2018年3月)*16</u>
50.	<u>釜井俊孝、“戦後の里山開発と谷埋め盛土地すべり”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp123-134、(2018年3月)*59</u>
51.	<u>村澤真保呂、“里山の心理的景観と環境教育”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp135-139、(2018年3月)*108</u>
52.	<u>山中裕樹、“環境DNA分析による琵琶湖水系の魚類相解析と生態研究への応用”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp143-154、(2018年3月)*5</u>
53.	<u>須川恒、“カワウ問題解決のための順応的管理と河川環境改善”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp155-164、(2018年3月)</u>
54.	<u>太田真人、“河辺林の特徴と蝶から見る里山的価値”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp165-177、(2018年3月)</u>
55.	<u>岩瀬剛二、“荒川下流河川敷における外来寄生植物ヤセウツボの繁殖”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp178-181、(2018年3月)*14</u>
56.	<u>猪谷富雄、“多様な稲による地域おこしー滋賀県の稲作と古代米ー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp182-187、(2018年3月)</u>
57.	<u>宮浦富保、“東近江市の森林利用の歴史”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp191-197、(2018年3月)*34</u>
58.	<u>須藤護、“東近江・小椋谷と木地師”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp198-209、(2018年3月)*68</u>
59.	<u>山下直子、“中山間地における広葉樹資源の循環的利用と森林再生”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp210-221、(2018年3月)*35</u>
60.	<u>占部武生・水原詞治、“薪ストーブの状況とその燃焼ガス中未燃ガス(一酸化炭素)の触媒による完全燃焼化実験”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp222-231、(2018年3月)</u>
61.	<u>鈴木龍也、“入会の環境保全機能に関するー考察ー近年の入会訴訟の検討からー”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp248-259、(2018年3月)*32</u>

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

62. 西脇秀一郎、“地縁団体の法的性格とその規範的意義”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp260-279、(2018年3月)*30
63. 金紅実、“中国森林財政の発展と森林保全政策の展開—里山学の視座から—”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp280-293、(2018年3月)*20
64. 池田恒男、“水管理の国家化・技術化と「権利の体系」—水・人間関係への法学的接近方法の備忘録—”、牛尾洋也・吉岡祥充・清水万由子(編)『琵琶湖水域圏の可能性 里山学からの展望』、晃洋書房 pp294-315、(2018年3月)*65
65. JIN HONGSHI, “Chapter 11 Issues with Japan’s Agricultural Subsidies, which are Resistant to New Situations: Focusing on the Case Study of Morimoto District, Kyotango City, in the Northern Area of Kyoto Prefecture”, Katsutaka Shiraiishi & Nobutaka Matoba, Depopulation, Deindustrialisation and Disasters: Building Sustainable Communities in Japan, Palgrave Macmillan, 2019年、219-234pp
66. Sugawa, H., Hashimoto, H., “Ramsar Convention and Wintering waterbirds in Lake Biwa”. LAKE BIWA: RELATIONSHIP BETWEEN HUMAN AND NATURE (Second Edition). p-(pp). Springer.
67. 秋山道雄、“琵琶湖の環境政治”、『現代地政学事典』編集委員会編『現代地政学事典』(丸善出版) pp.200-201 (2020年1月)
68. 高桑進、“第3章「東山の森を守ろう～ナラ枯れ被害木の薪割り&ウオーク事業」「京都の森林と文化」”、pp.148-151 (2020) ナカニシヤ出版 京都伝統文化の森推進協議会編
69. 村澤真保呂(共著)、『中井久夫との対話—生命、こころ、世界』、河出書房新社 (2018年8月)
70. W. シュトレーク著(村澤真保呂・信友建志訳)、『資本主義はどう終わるのか』、河出書房新社 (2017年11月)
71. 村澤真保呂、「モラトリアム／ポストモラトリアム」、日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』、丸善出版、pp.226-227 (2017年7月)
72. H. フラスベックほか著(村澤真保呂・森元斎訳)、『ギリシアデフォルト宣言：ユーロ圏の危機と緊縮財政』、河出書房新社 (2015年9月)
73. 釜井俊孝『埋もれた都の防災学 都市と地盤災害の2000年』
京都大学学術出版会 (2016年)
74. 牛尾洋也、「民法上の『まちづくり権』について」花房博文・宮崎淳・大野武編『土地住宅の法理論と展開—藤井俊二先生古稀祝賀論文集—』、成文堂 (2019年12月) pp421-450

<学会発表>

1. 秋山道雄・小野奈々・平山奈央子・中村公人・橋本慧子・皆川明子、「愛知川流域圏における水利システムの特性と課題」、水資源・環境学会大会、2016年6月4日、法政大学
2. 秋山道雄、「琵琶湖研究の経験からみた湿地のワイズユース」、地理科学学会秋季学術大会シンポジウム「湿地のワイズユースを考える—自然の保護と活用を巡る諸問題—」、2016年11月26日、広島大学
3. Iwase, K., Oppata, S., Tajima, H., Furuhashi, T., Terashima, Y. Ecological characteristics of coastal parasitic vine, *Cassytha filiformis* in Yaeyama Islands. 9th International Symposium Exploring the Global Sustainability—Advances in Plant Biotechnology for Agriculture in Semiarid Land, Suita, 2016
4. 奥田史郎・山下直子・中尾勝洋・諏訪錬平・田中真哉・高橋裕史・加藤顕・宮浦富保、「滋賀県落葉広葉樹二次林に優占するコナラの用途別材積の推定」、第128回日本森林学会大会ポスター発表、2017年3月28日*96
5. 隅田明洋・渡辺力・宮浦富保、「ヒノキ個体群の樹冠の枯れ上がりを決める気象要因」、第64回日本生態学会ポスター発表、2017年3月16日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

6. 新谷涼介・福島和也・宮浦富保、「コナラ二次林における土壌深度の変化に伴う微生物呼吸量の推移—IRGA とソーダライムを用いた測定事例—」、第 64 回日本生態学会ポスター発表、2017 年 3 月 15 日
7. 井上雅仁・高橋佳孝、島根県三瓶山麓の刈り取り草原における絶滅危惧植物スズサイコの動態、第 64 回日本生態学会大会、2017、東京
8. 増井太樹・横川昌史・高橋佳孝・津田 智、熊本県阿蘇地域における斜面崩壊後の草原植生の回復、第 64 回日本生態学会大会、2017、東京
9. 橋本啓史・中村進・須川恒、京都市の復元型ビオトープ「いのちの森」における 20 年間の鳥類の記録、日本鳥学会大会、ポスター発表、2016 年 9 月 1 日、北海道大学(札幌市)
10. 須川 恒、大阪自然史フェスティバル 2016 におけるユリカモメのカラーリング調査、日本鳥類標識協会 2016 年度大会、2016 年 12 月 24 日、市川市南行徳市民センター
11. 鶴谷峻之・遊磨正秀、“アジメドジウの摂餌生態と付着藻類をめぐる種間関係”、第 65 回日本生態学会大会、札幌コンベンションセンター(札幌市)(2018 年 3 月)
12. 野村将一郎・遊磨正秀、“琵琶湖沿岸部におけるオオクチバス稚魚の食性”、第 65 回日本生 219 研究活動報告態学会大会、札幌コンベンションセンター(札幌市)(2018 年 3 月)
13. 沢田 隼・藤原壮平・遊磨正秀・丸山敦、“琵琶湖水系に陸封されたアユの安定同位体比からわかること～異なる時間スケールの食性を示す複数組織を組み合わせて～”、第 65 回日本生態学会大会、札幌コンベンションセンター(札幌市)
14. 秋山道雄、“琵琶湖保全再生計画の位相—琵琶湖総結後 20 年間の堆積と変容をめぐる—”、水資源・環境学会 2017 年度研究大会(大阪府茨木市)(2017 年 6 月 3 日)
15. 須川 恒、“京都府冠島におけるオオミズナギドリの生残率推定”、(ポスター発表)日本鳥学会大会(つくば市、筑波大学)(2017 年 9 月 17 日)
16. 横川昌史・井上雅仁・堤 道生・白川勝信・高橋佳孝、“熊本県阿蘇東外輪山における草原再生に伴う 7 年間の植生の変化”、植生学会第 22 回大会沖縄大会(那覇市)(2017 年 10 月 22 日)
17. 川上将樹・篠原耕平・大塚泰介・Bosco Rusuwa・遊磨正秀・丸山敦(2016/9/24-25) マラウイ湖に生息するシクリッド魚類の摂食行動と食性分析から見えるニッチの柔軟性. 日本魚類学会(ポスター発表), 岐阜大学, 岐阜市
18. 武村達也・豊福晋作・遊磨正秀(2015/9/29) 河川におけるオイカワ(*Zacco platypus*)の行動と河川内分布. 日本陸水学会第 80 回大会, 北海道大学函館キャンパス, ポスター発表
19. 東郷有城・遊磨正秀(2015/9/4) 異なる森林環境におけるガ類の食性分類群による環境応答. 環境アセスメント学会 第 14 回大会, ポスター, 龍谷大学, 大津市. (ポスター賞)
20. 山田純平・遊磨正秀(2016/3/27) 開花植物の多様性が訪花昆虫群集の多様性に与える影響. 日本昆虫学会第 76 回大会・第 60 回日本応用動物昆虫学会大会合同大会, 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス, 堺市
21. 豊福晋作・武村達也・遊磨正秀(2016/3/22) ゲンジボタル(*Lucioka cruciata*)とヘイケボタル(*L. lateralis*)の樹木利用. 第 63 回日本生態学会, 仙台市(ポスター発表)
22. 野村賢吾・鶴谷峻之・遊磨正秀(2017/3/16) 農業用水路におけるイシガイ類の生息環境. 第 64 回日本生態学会大会, 早稲田大学, 東京都新宿区.
23. 林珠乃・遊磨正秀・太田真人・Patrick Chinguwo・Bosco Rusuwa・Richard Zatha・Gibson Kamanje・丸山敦、“マラウイ湖国立公園における森林資源の利用と保全”、第 65 回日本生態学会大会(札幌市)(2018 年 3 月 17 日) * 26
24. 林珠乃、“『滋賀県物産誌』を用いた明治初期の滋賀県における自然資源利用の復元”、日本景観生態学会 第 28 回大会(宮崎市)(2018 年 9 月 17 日)
25. 林珠乃、“『滋賀県物産誌』を用いた明治初期の滋賀県における自然資源利用の復元”、2018 年

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- 人文地理学会大会(奈良市)(2018年11月24・25日)
26. 林珠乃、“明治初期の滋賀県全域における里山利用の復元”、第66回日本生態学会大会(神戸市)(2019年3月18日)
 27. 山下直子・奥田史郎・中尾勝洋・倉地奈保子・宮浦富保、“コナラの樹形と直径階別材積との関係—パイプモデルに基づく解析—”、第130回日本森林学会大会(新潟市)(2019年3月22日)
 28. 伊達浩憲、“子育て世帯の生活困難と東日本大震災—陸前高田市『子ども生活アンケート調査』の分析—”、国際開発学会第20回春季大会(岩手県陸前高田市)(2019年6月16日)
伊達浩憲、“子育て世帯の生活困難と東日本大震災—陸前高田市『子ども生活アンケート調査』の分析—”『国際開発学会第20回春季大会報告論文集—被災地の(いま)から開発を問う』427-432、(2019年7月)
 29. 野村将一郎・山下龍河・吉村理・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、“ため池における外来魚が在来生物に与える影響”、第66回日本生態学会(ポスター発表)、神戸(2019年3月17日)
 30. 吉村理・野村将一郎・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、市街地植生におけるクチベニマイマイの季節的移動と利用植物、第66回日本生態学会(ポスター発表)、神戸(2019年3月17日)
 31. 太田真人・遊磨正秀、“滋賀県愛知川砂礫河原における昆虫相”、第66回日本生態学会(ポスター発表)、神戸神戸(2019年3月17日)
 32. **遊磨正秀、“BBTM(バイカル、琵琶、タンガニイカ、マラウイ)湖の湖沼特性”2019年度日本魚類学会年会シンポジウム「古代湖における魚類の適応進化と種多様性創出」(高知市)(2019年9月23日)*27**
 33. 沢田隼・高倉大樹・川原尚顕・廣瀬和基・中川晃成・遊磨正秀・丸山敦、“河川の瀬切れの発生要因と瀬切れが魚類に及ぼす影響”、第67回日本生態学会(ポスター発表)、名古屋(2020年3月)
 34. 吉村理・野村将一郎・森脇優介・太田真人・遊磨正秀、“市街地植生におけるクチベニマイマイの移動能力と利用植物”、第67回日本生態学会(ポスター発表)、名古屋(2020年3月)
 35. 野村将一郎・遊磨正秀・太田真人・吉村理・森脇優介・中村聡美、“ため池の環境構造・餌資源によるコイ科魚類の形態変化”、第67回日本生態学会(ポスター発表)、名古屋(2020年3月)
 36. 太田真人・遊磨正秀・野村将一郎・吉村理・森脇優介、“カワラバッタと砂礫河原の環境”、第67回日本生態学会(ポスター発表)、名古屋(2020年3月)
 37. 久保 星・遊磨正秀・太田 真人・野村 将一郎・吉村理・安田光児・福岡太一、“木津川におけるコクチバスの食性”、第67回日本生態学会(ポスター発表)、名古屋(2020年3月)
 38. Andrew Mvula, Hayato Sawada, Aiko Imamura, Masahide Yuma, Hiroki Yamanaka, Atsushi Maruyama. Migratory ecology of Hasu fish to Lake Biwa tributaries using eDNA and isotopic clock analysis. 第67回日本生態学会, 名古屋. (ポスター) 名古屋(2020年3月)
 39. 呉地正行・須川恒、“千島列島の海鳥、キツネ類生息情報からシジュウカラガンの営巣可能性を評価する試み”(ポスター発表)、日本鳥学会大会(東京都帝京科学大学)(2019年9月14-15日).
 40. 井上雅仁・高橋佳孝、“草地跡地における間伐・下刈り管理に伴う草原生植物の動態”、植生学会第24回大会(弘前市)(2019年10月6日)
 41. 好廣真一・西山勝夫・宗川吉汪、“どんな“さる”だったのだろうか?—イヌノミのペスト媒介能力の実験—”、第35回日本霊長類学会研究大会(熊本)(2019年7月)、査読付
 42. 渡邊和希、廣原嵩也、永峰義寛、山内 寛、重吉実和、芦野洸介、山中裕樹、“環境DNA分析における採水場所の違いが魚類種組成データに与える影響”、第23回応用生態工学会(広島)(2019年9月27日)
 43. 定行洋亮、東 信行、山中裕樹、山下 洋、久米 学、笠井亮秀、和田敏裕、亀山 哲、木村伸吾、“環境DNA手法を用いた日本縁辺域におけるニホンウナギの分布可能性の解明”水産海洋学会発表大会、(仙台)(2019年11月)
 44. 廣原 嵩也、“環境DNA分析におけるPMA色素の有用性”、第2回環境DNA学会(神戸)(2019年11月4日)
 45. 釣 健司、“大型脊椎動物を対象とした環境RNAの検出と展望について”、第2回環境DNA学会(神戸)(2019年11月4日)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

46. 中道友規、“環境RNAと環境DNAにより魚類の検出感度の比較とその時間変化、第2回環境DNA学会(神戸)(2019年11月3日)
47. 藤井明美、“イケチョウガイとヒレイケチョウガイの環境DNA解析を用いた簡易判定の試み、第2回環境DNA学会(神戸)(2019年11月3日)

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

●シンポジウム

1. 2015年度シンポジウム『琵琶湖の保全再生と里山・里湖 一人と水との共生にむけて』*91

開催日: 2016年3月5日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

講演内容:

第一部

主催者挨拶

牛尾 洋也 (龍谷大学里山学研究センター・センター長/法学部・教授)

滋賀県知事ご挨拶

三日月大造(滋賀県知事)

オープニング

太田 真人(龍谷大学里山学研究センター・博士研究員)

西脇秀一郎

(龍谷大学里山学研究センター・RA/龍谷大学大学院法学研究科・博士後期課程)

佐々知紗理(龍谷大学法学部2回生)

基調講演「文理連携をめざす環境研究者の理想を

いかに政策実践にむすびつけたのか?

—琵琶湖研究40年・滋賀県知事8年の経験から—

嘉田由紀子(びわこ成蹊スポーツ大学・学長/前滋賀県知事)

関連講演「琵琶湖の課題と琵琶湖保全再生法の制定」

岡田 英基(滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課琵琶湖保全再生室長)

龍谷大学里山学研究センターの取り組み紹介

① センターの全体構成:

牛尾 洋也(龍谷大学里山学研究センター・センター長/法学部・教授)

「里山学研究センター新プロジェクト構想について」

②第1班「水と生命」班:

山中 裕樹(龍谷大学里山学研究センター・研究員/理工学部・講師)

「汲んだ水から生物調査—DNA分析による水棲生物の分布推定—」

③第2班「資源と産業」班:

宮浦 富保(龍谷大学里山学研究センター・研究員/理工学部・教授)

「里山の食とエネルギー」

④第3班「人と暮らし」班:

林 珠乃(龍谷大学里山学研究センター・研究員/理工学部・助手)

「琵琶湖水域圏の景観のみかた」

第二部

ポスターセッション「里山・里湖にかかわる多様な研究・取り組みのポスター展示」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センターの紹介」
- ・林 珠乃、「琵琶湖水域圏の景観を読み解く外的な視点と内的な視点」
- ・谷垣岳人、「里山環境教育の実践：里山学研究センターの取り組み①」
- ・谷垣岳人、「里山環境教育の実践：里山学研究センターの取り組み②」
- ・高桑進、「環境教育プログラムとしての炭火焼き活動の展開と
炭焼きマイスター制度の普及について：
「里山の保全」「二酸化炭素の削減」「防災燃料の確保を目指して」
- ・中川晃成、「大縮尺空中写真でみる琵琶湖岸の景観変遷」
- ・猪谷富雄、「イネの多様性と水田保持策の研究」
- ・占部武生、「薪ストーブ燃焼ガスの触媒によるクリーン化に関する研究」
- ・伊達浩憲、「東日本大震災で壊滅的打撃を受けた岩手県陸前高田市の
エゾシカゲガイ養殖 ～漁師たちとの交流～」
- ・伊達浩憲、「東日本大震災で壊滅的打撃を受けた岩手県陸前高田市の
畦畔茶園の再生」
- ・伊達浩憲、「京都府唯一の村・南山城の茶業振興をめざし龍谷大学オリジナル
宇治茶『雫』を開発・栽培・販売」
- ・須川恒、「ラムサール条約を生かした湿地保全活動—世界湿地の日 in 湖北—」
- ・野間直彦・渡部俊太郎・今城克啓・金子有子・前迫ゆり・嘉田由紀子、
「伐採の危機に瀕する琵琶湖源流域のトチノキ巨木林」
- ・遊磨正秀・丸山 敦・山中裕樹・太田真人、
「琵琶湖の回遊魚と流入河川の河口付近環境」
- ・太田真人・東郷有城・遊磨正秀、「景観の違いから見たチョウ類と捕食者の関係」
- ・東郷有城・太田真人・遊磨正秀、
「森林環境が食性によって分類されたガ類の群集構造に及ぼす影響」
- ・武村達也・豊福晋作・太田真人・遊磨正秀、
「河川におけるオイカワ(Zacco platypus)の休息及び摂餌行動と河川内分布」
- ・豊福晋作・武村達也・太田真人・遊磨正秀、
「滋賀県田上地域における水路草本環境とゲンジボタル成虫の増減」
- ・山田純平・太田真人・遊磨正秀、
「里山の開花植物の多様性が訪花昆虫群集の多様性に与える影響」
- ・野村賢吾・太田真人・遊磨正秀、
「農業用水路におけるイシガイ類の体長別生息環境」
- ・鶴谷峻之・武村達也・太田真人・遊磨正秀、
「河川におけるアジメドジョウの行動と河床環境利用」
- ・本郷真理・山中裕樹・加納光樹・苅部甚一、
「環境 DNA 分析によるチャネルキャットフィッシュ検出系の確立」
- ・垣見直希・河野吉将・山中裕樹、
「魚類由来の環境 RNA 回収～抽出手法と放出後の動態について～」
- ・谷口雅治、「重要文化的景観とは～水の利用とくらし～」
- ・稲葉大輔、「世界農業遺産」
- ・眞田章午・西脇秀一郎、
「琵琶湖集水域における公私協働の構築—琵琶湖疏水と琵琶湖保全再生法—」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

パネルディスカッション「琵琶湖水域圏における人と水との共生にむけて」

コーディネーター:

牛尾 洋也(里山学研究センター・センター長/龍谷大学法学部・教授)

パネリスト:

嘉田由紀子(びわこ成蹊スポーツ大学・学長/前滋賀県知事)

大崎 康文(滋賀県観光交流局・副主幹)

山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)

秋山 道雄(龍谷大学里山学研究センター・研究員/滋賀県立大学・名誉教授)

山中 裕樹(龍谷大学里山学研究センター・研究員/理工学部・講師)

村澤真保呂(龍谷大学里山学研究センター・研究員/社会学部・准教授)

エンディング

太田 真人(龍谷大学里山学研究センター・博士研究員)

西脇秀一郎

(龍谷大学里山学研究センター・RA/龍谷大学大学院法学研究科・博士後期課程)

谷口 雅治(龍谷大学法学部4回生)

閉会挨拶

田中 滋(龍谷大学里山学研究センター・研究員/社会学部・教授)

2. 2016 年度シンポジウム『流域のくらしと奥山・里山 ～愛知川から考える～』* 109

開催日: 2017 年 3 月 4 日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

講演内容:

第一部

主催者挨拶

牛尾洋也 (龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長)

基調講演 1「なぜ愛知川流域を研究するか—琵琶湖の健全な「乳母」であるために—」

田中 滋(龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・研究員)

基調講演 2「東近江市の流域政策」

山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)

第二部

ポスターセッション「里山・里湖にかかわる多様な研究・取組みのポスター展示」

・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センターの紹介」

・林珠乃、「景観生態学的に見た琵琶湖・瀬田川流入河川の集水域の特徴」

・林珠乃、「明治初期の愛知郡・神崎郡・蒲生郡における自然と人々のくらし
—滋賀県物産誌から読み解く身近な自然と共に生きる姿—」

・中川晃成、「大縮尺空中写真でみる湖と森をむすぶ景観諸相」

・本澤大生・小松鷹介・山中裕樹、

「環境 DNA 分析を用いた琵琶湖・浜名湖周辺における

特定外来生物ヌートリアの侵入初期探知」

・芝田直樹・辻冨月・佐藤博俊・山中裕樹、

「環境 DNA 分析と直接捕獲から得た河川棲魚類相調査結果の比較」

・須川恒・野村祐美子・植田潤、

「世界湿地の日 2017in 湖北『湿地と防災/減災・河川と流域へのまなざし』」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・遊林会事務局、「この河辺林はなぜ残ったか？～里山保全活動 19 年の歩み～」
- ・嶋田可菜・岡野大樹・古太恵人・浦諒太郎・山本竜平、「食の循環から見る農業」
- ・菅野優香・野間元綺・石田聡子・中原広貴、
「公害から地域再生へ～そのプロセスとは～」
- ・吹野僚平・藤坂妃那・井上優大・今西徹、
「日本遺産～信濃川流域に生き続ける縄文文化～」
- ・米住京子・由良康太・山本英樹・西元康宏・安達弘暉、
「佐渡の世界農業遺産と生物多様性」
- ・鎌野有紀・細川晋大朗・佐々知紗理、
「世界農業遺産みなべ・田辺の梅システムと生物多様性」
- ・遊磨正秀・太田真人、「愛知川における河床高の変動」
- ・太田真人・遊磨正秀、「河辺いきものの森」のチョウ類相
- ・山田純平・野村賢吾・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、
「龍谷の森の林内植生環境と訪花昆虫」
- ・鶴谷峻之・野村賢吾・山田純平・太田真人・遊磨正秀、
「河川上流部におけるアジメドジョウの行動と河床利用」
- ・野村賢吾・鶴谷峻之・山田純平・太田真人・遊磨正秀、
「マツカサガイの成長段階に応じた生息環境」
- ・野口聡・太田真人・遊磨正秀、「ヤマトシジミの蜜源植物に対する選好性」
- ・磯谷一毅・太田真人・遊磨正秀、「森林における土壌動物と植生の関係」
- ・澤田司・太田真人・山田純平・野村賢吾・鶴谷峻之・遊磨正秀、
「畦畔の環境変化がカエル類の食性に与える影響」
- ・舘雄大・太田真人・遊磨正秀、
「龍谷大学瀬田キャンパスにおけるセアカゴケグモの生息環境による卵数変動」
- ・野田葵・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、「カジカ大卵型の体色と底質の色彩」
- ・山田直輝・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、
「底生魚カマツカが選択する河床環境」
- ・山鳥将弥・太田真人・遊磨正秀、「アカハライモリの利用環境と移動範囲」

第三部

関連講演 1「小椋谷と木地屋」

須藤 護(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員) * 66

関連講演 2「東近江市 里山林整備の現場から」

松尾扶美(東近江市永源寺森林組合・技術職員)

関連講演 3「東近江の森林資源～特徴と利用可能性」

山下直子(国立研究開発法人森林総合研究所・主任研究員)

第四部

パネルディスカッション「森・川・湖の統合的な流域政策へ」

コーディネーター:

宮浦富保(龍谷大学工学部・教授/里山学研究センター・副センター長)

パネリスト:

山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)

須藤 護(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)

松尾扶美(東近江市永源寺森林組合・技術職員)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

山下直子(国立研究開発法人森林総合研究所・主任研究員)
 田中 滋(龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・研究員)
 林 珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手/里山学研究センター・研究員)

閉会挨拶

丸山徳次(龍谷大学文学部・教授/里山学研究センター・研究員)

3. 2017年度シンポジウム『里山学から考える防災・減災～琵琶湖水域圏の保全・再生に向けて～』

* 61

開催日：2018年3月3日

場 所：ピアザ淡海ピアザホール

講演内容：

第〇部・第二部

ポスターセッション「里山にかかわる多様な研究・取組みのポスター展示」

- ・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センター紹介」
- ・林珠乃、「明治初期の滋賀県における災害の状況」
- ・中川晃成、「愛知川流域とその周辺の地形・水系・条里」
- ・中川晃成・吉田天斗・井上康裕、「琵琶湖水位の150年」
- ・中川晃成、「淀川三川合流地点の水理—宇治川・木津川・桂川の流量と水位—」
- ・渡邊和希・佐藤博俊・本郷真理・本澤大生・櫻井翔・山中裕樹、
「環境DNA分析によるニホンウナギの野外検出およびモニタリング」
- ・須川恒、「カワウ問題解決の順応的管理と河川環境改善」
- ・高桑進・松村賢治、
「里山の未利用バイオマスを活用する新しい炭焼きの取組み」
- ・野間直彦・小崎和樹・稗田真也・石田未基・森小夜子・渡部俊太郎・高柳敦、
「伊吹山頂草原植物群落(天然記念物)のシカ食害からの保全」
- ・稗田真也・栗林実・森小夜子・野間直彦、
「琵琶湖の水辺の絶滅危惧植物ホットスポットおよび侵略的外来植物の研究」
- ・渡部俊太郎・高倉耕一・金子有子・前迫ゆり・野間直彦・西田隆義、
「琵琶湖周辺のタブノキ林—由来と生態と保全—」
- ・丸山敦・麻田弥希・高田恭輔・渡邊和希・佐藤博俊・米倉竜次・山中裕樹、
「環境DNAメタバーコーディングで農業排水路網の魚類の分布を明らかにする」
- ・丸山敦・菅谷紘佑・山中裕樹・今村彰生、
「環境DNAを用いた絶滅危惧魚ハスの繁殖遡上の定量的調査」
- ・丸山敦・村潤市郎・神松幸弘・入口敦志、
「古書籍に漉き混まれた毛髪安定同位体分析による近世の庶民の
食生活の推定」
- ・太田真人・鶴谷峻之・野村賢吾・遊磨正秀、
「トカゲが選ぶのは大きな翅の蝶か大きな胸の蝶か—蝶翅上捕食痕からみる—」
- ・野村賢吾・鶴谷峻之・野村将一郎・吉村理・太田真人・遊磨正秀、
「農業用水路の環境がイシガイ類の成長に与える影響」
- ・鶴谷峻之・野村賢吾・野村将一郎・吉村理・太田真人・遊磨正秀、
「野洲川支流田村川におけるアジメドジョウの摂餌生態と種間関係」
- ・吉村理・野村将一郎・鶴谷峻之・野村賢吾・太田真人・遊磨正秀、

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

「市街地二次植生におけるクチベニマイマイの好適環境」

・野村将一郎・鶴谷峻之・野村賢吾・吉村理・太田真人・遊磨正秀、

「オオクチバス稚魚の食性(魚食への挑戦)」

・浅海一暉・井上滉平・大下智輝・金本さくら・川端日菜々・河野拓海・小松右詩・清水莉子・辻井宏佑・外山由利菜・濱田直幸・藤本和・松崎里歩・松元彰汰・横山智恵・清水万由子、

「人心あれば水心ありー琵琶湖流域における人と水の関わりマップの制作ー」

・安田奈於、「フットパスとは？」

・由良康太、「フットパス始まりの地イギリス」

・澤村奈叶、「花のまち 恵庭市」

・澤村奈叶、「北海道 黒松内町のフットパスの魅力」

・吹野僚平、「里地里山を魅せる～小野路の昔ながらの景観を歩く～」

・湯川希、「山梨県のフットパス」

・本田大輝、「歩くことで観える景色がある～美里町編～」

・由良康太、「日本におけるフットパス 各調査先のまとめ」

・米住京子、「魅力あふれる自然豊かなまち 東近江市」

・山本英樹、「歴史感じる商人のまち～五個荘～」

・野間元綺、「能登川の水面に漂う鷹の羽」

・中原広貴、「御代参街道と八風街道が交わる交通の要衝」

第一部

主催者挨拶

牛尾洋也 (龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長)

基調講演 1「日本人の伝統的自然観と治水のあり方」

大熊孝(新潟大学・名誉教授)

基調講演 2「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)という考え方と国内外の動向」

西田貴明(三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社・副主任研究員)

第三部

関連講演 1「減災型治水システムの社会実装とその課題」

瀧健太郎(滋賀県立大学環境科学部・准教授)

関連講演 2「里山開発と宅地災害ー戦後日本の「遅れてきた公害」ー」

釜井俊孝

(京都大学防災研究所斜面災害研究センター長 里山学研究センター・研究員)

関連講演 3「奥山の自然は蝕まれている

～ニホンジカによる荒廃は災害を誘発するのか？」

横田岳人(龍谷大学理工学部・准教授 里山学研究センター・研究員)

第四部

パネルディスカッション「これからの防災・減災に求められること」

コーディネーター:

清水万由子(龍谷大学政策学部・准教授 里山学研究センター・研究員)

パネリスト:

大熊孝(新潟大学・名誉教授)

西田貴明(三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社・副主任研究員)

瀧健太郎(滋賀県立大学環境科学部・准教授)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

釜井俊孝

(京都大学防災研究所斜面災害研究センター長 里山学研究センター・研究員)

横田岳人(龍谷大学理工学部・准教授 里山学研究センター・研究員)

閉会挨拶

丸山徳次(龍谷大学文学部・教授/里山学研究センター・研究員)

4. 2018年度シンポジウム『SDGsと里山モデル～持続可能社会に向けて～』*110

開催日: 2019年3月9日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

講演内容:

第〇部・第三部

ポスターセッション「里山にかかわる多様な研究・取組みのポスター展示」

・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センター紹介」

・林珠乃、「明治初期の滋賀県全域における里山・里湖利用の復元」

・小田奏・宮浦富保・林珠乃、

「小型 UAV による空撮画像からの「龍谷の森」植生図作成の試み」

・中川晃成、「オールドオオツの歴史地理」

・中川晃成、「空から見た近江の戦争遺跡」

・伊達浩憲、「東日本大震災で壊滅的打撃を受けた岩手県陸前高田市の畦畔茶園の再生」

・朱宏楊・大西晴日・金本さくら・河田彩里・西田駿吾・上村愛・坂田汐里・今村優

里・遠近凌・馬星星・島本佳苗・竹内一輝・段松優希・西川祐輝・韓暎倩・羅勝鐘・

馬建・金紅実・谷垣岳人、

「京都府京丹後市での絶滅危惧種ゲンゴロウ類保全型米作りの実践～龍谷大学政策学部の政策実践探求演習 I A II A (通称、南京 PBL) の取り組み～」

・太田真人・遊磨正秀、

「砂礫州に生きる昆虫たち 滋賀県愛知川での調査」

・吉村理・野村将一郎・鶴谷峻之・太田真人・遊磨正秀、

「市街地植生におけるクチベニマイマイの季節的移動と利用植物」

・野村将一郎・山下龍河・吉村理・太田真人・遊磨正秀、

「ため池に生息する魚類の形態が示すもの」

・鈴木雅・横田岳人、

「国内における外来種ミカヅキゼニゴケの分布について」

・森脇優介・吉村理・野村将一郎・太田真人・遊磨正秀、

「LED 照明がガ類の灯火飛来に及ぼす影響」

・廣原嵩也・釣健司・宮川光一・山中裕樹、

「環境DNA分析におけるPMA色素の有用性」

・沢田隼・中川晃成・遊磨正秀・丸山敦、

「川の瀬切れの発生要因とその魚類への影響の探索」

・小崎和樹・鳥居万恭・増戸秀毅・近藤和夫・藤井肇・中屋敷徳・稗田真也・野間直

彦、

「京都市大原野森林公園のムカゴをつけるキタヤマブシ」

・三輪歩樹・稗田真也・小崎和樹・森小夜子・古川沙央里・辻本典顯・奥野匡哉・渡

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- 部俊太郎・野間直彦、
「焼畑の火入れが植生に与える影響」
- ・永岑吉祥・小崎和樹・稗田真也・野間直彦、
「特定外来生物オオバナミズキンバイの水鳥による種子散布」
- ・稗田真也・野間直彦・中井克樹、
「琵琶湖における特定外来生物オオバナミズキンバイの形態可塑性と駆除」
- ・須川恒、「多様なガン類のいる景観をとりもどす」
- ・高桑進・濱崎三枝子、
「持続可能な里山管理法としての新しい炭焼き活動」
- ・占部武生・水原詞治、
「薪ストーブ燃焼ガス中未燃ガス(一酸化炭素、炭化水素)の褐鉄鉱触媒による完全燃焼化実験—優れた酸化触媒効果を持つミネト鉱等の調査」
- ・澤村奈叶、「秋の奥永源寺 東近江フットパスイベント」
- ・由良康太、「木地師のまち 蛭谷・箕川」
- ・澤村奈叶、「東近江市のニューツーリズム『フットパス』」
- ・斎藤菜乃子、「木地師のふるさと 君ヶ畑町」
- ・中田景子、「魅力いっぱい！八日市てくてくマップ」
- ・綾部友宥、「ありのままの風景を歩く～黄和田町・杠葉尾町～」
- ・峠元太、「茶の息吹 政所 奥永源寺秋のフットパスイベント」
- ・鈴木彩有里・中田景子、
「春のフットパスイベント」
- ・鈴木彩有里・中田景子、
「フットパスの課題とみらい」
- ・中田景子、「コース作り in 八日市」

第一部

主催者挨拶

牛尾洋也（龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長）

講演Ⅰ「SDGsと地域社会の挑戦」

野田真里（茨城大学人文社会科学部社会科学領域・准教授）

「持続可能社会の里山モデル」

丸山徳次（龍谷大学・名誉教授/里山学研究センター・研究フェロー）

第二部

講演Ⅱ「里山の生態系サービス:その歴史変遷と将来」

湯本貴和

（京都大学霊長類研究所・所長/社会生態研究部門生体保全分野・教授）

「順応的な環境ガバナンスのあり方を求めて」

宮内泰介（北海道大学大学院文学研究科・教授）

第四部

パネルディスカッション「持続可能社会への指針を求めて」

コーディネーター:

田中滋（龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・研究員）

パネリスト:

野田真里（茨城大学人文社会科学部社会科学領域・准教授）

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

丸山徳次(龍谷大学・名誉教授/里山学研究センター・研究フェロー)

湯本貴和

(京都大学霊長類研究所・所長/社会生態研究部門生体保全分野・教授)

宮内泰介(北海道大学大学院文学研究科・教授)

閉会挨拶

村澤真保呂(龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・副センター長)

5. **2019 年度シンポジウム『琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～』**

* 76

開催日: 2019 年 12 月 21 日

場 所: ピアザ淡海ピアザホール

講演内容:

第〇部・第二部

ポスターセッション「里山にかかわる多様な研究・取組みのポスター展示」

・龍谷大学里山学研究センター、「里山学研究センター紹介」

・中川晃成、「信楽もまろう」

・中川晃成、「オールドオオツの歴史と地理」

・須川恒、「琵琶湖湖岸の鳥類生息環境から～未来につなげる課題は何か～」

・猪谷富雄・有田啓一郎、

「水稻自然農法の東近江市における栽培事例」

・黒田末壽・野間直彦・三輪歩樹・稗田真也・小崎和樹・森小夜子・古川沙央里・辻本典顯・奥野匡哉・渡部俊太郎・島上宗子・今北哲也・増田和也・河野元子・大石高典・永井好彦・大谷ともよ・鈴木玲治、

「焼畑を活用した日本の食・森・地域の再生: 生業モデル構築の研究 火野山ひろば」

・稗田真也・渡部俊太郎・原田英美子・野間直彦、

「特定外来生物オオバナミズキンバイは、少なくとも 3 クローンが侵入している」

・小崎和樹・鳥居万恭・増戸秀毅・近藤和男・稗田真也・野間直彦、

「ムカゴをつけるイブキトリカブトの分布」

・野村将一郎・吉村理・森脇優介・久保星・福岡太一・太田真人・遊磨正秀、

「ため池に生息する魚類－滋賀県と兵庫県の比較－」

・吉村理・野村将一郎・森脇優介・久保星・福岡太一・太田真人・遊磨正秀、

「梅雨期の市街地植生におけるクチベニマイマイの移動能力」

・森脇優介・野村将一郎・吉村理・久保星・福岡太一・太田真人・遊磨正秀、

「色の異なる LED 電球に集まるガ類の比較」

・久保星・福岡太一・野村将一郎・吉村理・森脇優介・太田真人・遊磨正秀、

「木津川下流域におけるコクチバス *Micropterus dolomieu* の食性」

・福岡太一・田邑龍・久保星・野村将一郎・吉村理・太田真人・遊磨正秀、

「水田におけるクロゲンゴロウ幼虫の食性」

・太田真人・遊磨正秀・野村将一郎・吉村理・森脇優介・安田光児・新堀萌・前川順登・久保星・福岡太一、

「砂礫州に生きる昆虫たち－植生との関係性－」

・久保智朗、「東近江市のニューツーリズム「フットパス」」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・大谷直也、「全国カレッジフットパスフォーラム 2019」
- ・中田景子、「魅力いっぱい！八日市てくてくマップ」
- ・林珠乃、「明治初期の滋賀県全域における里山・里湖利用の復元」
- ・林珠乃、「琵琶湖水域圏の景観を読み解く外的な視点と内的な視点」
- ・林珠乃、「景観生態学的に見た琵琶湖・瀬田川流入河川の集水域の特徴」
- ・遊磨正秀・丸山敦・山中裕樹・太田真人、
「琵琶湖の回遊魚と流入河川の河口付近環境」
- ・小田奏・宮浦富保・林珠乃、
「小型 UAV による空撮画像からの「龍谷の森」植生図作成の試み」

第一部

主催者挨拶

牛尾洋也（龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長）

学長挨拶

入澤崇（学校法人龍谷大学・専務理事）

講演「びわ湖なう2019～びわ湖のこれまで、そしてこれから～」

三和伸彦（滋賀県琵琶湖環境部・技監）

「東近江市100年の森づくりビジョンとその実現に向けて」

水田有夏志（東近江市市民環境部・審議員）

第三部

研究報告「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現に向けた課題」

- ① 丸山徳次（龍谷大学・名誉教授/里山学研究センター・研究フェロー）
- ② 村澤真保呂（龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・副センター長）
- ③ 伊達浩憲（龍谷大学経済学部・教授/里山学研究センター・研究員）
- ④ 宮浦富保（龍谷大学理工学部・教授/里山学研究センター・副センター長）
- ⑤ 中川晃成（龍谷大学理工学部・講師/里山学研究センター・研究員）
- ⑥ 林珠乃（龍谷大学理工学部・実験助手/里山学研究センター・研究員）
- ⑦ 斎藤菜乃子（龍谷大学法学部 4 回生・みらいの環境を考える龍谷プロジェクト代表）
- ⑧ 牛尾洋也（龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長）

閉会挨拶

村澤真保呂（龍谷大学社会学部・教授/里山学研究センター・副センター長）

●研究会

1. 2015 年度第1回研究会

開催日：2015 年 7 月 28 日

場 所：深草学舎和顔館4階第3会議室

講演者：夏原由博（名古屋大学大学院環境学研究科・教授）

「パターンが決めるランドスケープの機能」

2. 2015 年度第2回研究会

開催日：2015 年 8 月 31 日

場 所：west lake hotel 可以登楼会議室

講演者：秋山道雄（滋賀県立大学・名誉教授/里山学研究センター・研究員）

「変貌する琵琶湖—沿岸域研究の経験から—」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

3. 2015 年度第3回研究会
開催日: 2015 年9月 10 日
場 所: 深草学舎和顔館4階第3会議室
講演者: 深町加津枝(京都大学地球環境学堂・准教授)
「琵琶湖湖岸の里山景観めぐり研究と今後の方向性」
大崎理沙(京都大学農学研究科・大学院生)
「里山・里海ライフスタイルの被災時危機適応力に関する研究
ー東日本大震災の事例からー」
4. 2015 年度第4回研究会
開催日: 2015 年 10 月 16 日
場 所: 瀬田学舎7号館環境実習室2
講演者: 横山秀司(九州産業大学大学院フェロー教授)
「景観生態学的にみた琵琶湖集水域」
5. 2015 年度第5回研究会
開催日: 2016 年1月 21 日
場 所: 瀬田学舎7号館環境実習室2
講演者: 林 珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手/里山学研究センター・研究員)
第三研究班「人と暮らし」ユニット5「自然調和型の住環境と防災」研究方針について
6. 2015 年度第6回研究会
開催日: 2016 年1月 22 日
場 所: 瀬田学舎7号館環境実習室2
講演者: 山中裕樹(龍谷大学理工学部・講師/里山学研究センター・研究員)
「次世代シーケンサーによる環境 DNA 分析でできること:
里山里湖の生物相解析に向けた応用」*7
7. 2015 年度第7回研究会
開催日: 2016 年2月 19 日
場 所: 深草学舎和顔館4階第2会議室
講演者: 劉 璩(国家林業局経済発展研究センター・主席研究員)
「中国の集団林権制度改革及びその関連政策の制度整備に関する研究」
8. 2016 年度第1回研究会
開催日: 2016 年4月 20 日
場 所: 瀬田学舎7号館環境実習室2
講演者: 中川晃成(龍谷大学理工学部・講師/里山学研究センター・研究員)
「琵琶湖、その湖際(みずぎわ)の景観変遷ーそれを願うのは誰かー」
林 珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手/里山学研究センター・研究員)
「地理情報システム(GIS)の基礎とその可能性」
9. 2016 年度第2回研究会
開催日: 2016 年6月 3 日
場 所: 深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室
講演者: 大崎康文(滋賀県商工観光労働局観光交流局(滋賀県教育委員会事務局文化財保護
課併任))
「水と暮らしの文化ー日本遺産のとり組みについてー」
10. 2016 年度第3回研究会

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

開催日：2016年6月9日

場 所：深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

講演者：山口美知子(東近江市市民環境部森と水政策課・課長補佐)
「森林の現状と課題及び所有権の問題について」

11. 2016年度第4回研究会

開催日：2016年6月16日

場 所：深草学舎紫英館2階第1共同研究室

講演者：須川 恒(龍谷大学・非常勤講師・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)
「琵琶湖とラムサール条約ー大きな湖で条約を活用するにはー」
須川 恒(龍谷大学・非常勤講師・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)
「ラムサール条約を活かした湿地保全活動ー世界の湿地の日 in 湖北ー」
赤松喜和(龍谷大学大学院政策学研究科)・
金 紅実(龍谷大学政策学部・准教授/里山学研究センター・研究員)
「ラムサールシンポジウム 2016ー中海・宍道湖ーへの参加・報告」

12. 2016年度第5回研究会

開催日：2016年7月30日

場 所：深草学舎紫光館4階講義室 401

講演者：小池浩一郎(島根大学生物資源科学部・教授)
「木質バイオマス発電の現状と課題」
泊みゆき(NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク・理事長)
「日本における木質バイオマス利用の現状と課題」

13. 2016年度第6回研究会

開催日：2016年10月16日

場 所：瀬田学舎智光館地下1階ステューデントコモンズミーティングルーム

講演者：筒井 正(浜松学院大学・非常勤講師)
「廃村茨川に生まれてー森林文化再考」
須藤 護(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー / 里山学研究センター・研究員)
「木地師の活動と里村」* 67

14. 2016年度第7回研究会

開催日：2016年10月24日

場 所：瀬田学舎智光館地下1階ステューデントコモンズミーティングルーム

講演者：Bosco Rusuwa(マラウイ大学チャンセラール校生物学科)
「マラウイ湖の水産業と暮らし」
丸山 敦(龍谷大学理工学部・講師/里山学研究センター・研究員)
「マラウイ湖と琵琶湖の比較を考える」

15. 2016年度第8回研究会

開催日：2016年11月4日

場 所：深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

講演者：岡田英基(滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課・課長)
「琵琶湖保全再生施策に関する計画」の検討状況について」

16. 2016年度第9回研究会

開催日：2016年12月1日

場 所：深草学舎紫光館3階里山学研究センター研究室

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

講演者：釜井俊孝(京都大学防災研究所・斜面災害研究センター長)

「埋もれた都の防災学：都市と地盤災害の 2000 年」

17. 2016 年度特別研究会

開催日：2017 年3月 22 日

場所： 深草学舎 22 号館4階会議室

講演者：池田恒男(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー里山学研究センター・研究員)

「日本民法によって捉えられるべき共同体的所有

—近代民法における「共有(広義)の諸形態」理論のパースペクティブに關説して—

丸山徳次(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー里山学研究センター・研究員)

「森のある大学」の里山学—「龍谷の森」の過去と未来—

18. 2017 年度第1回研究会

開催日：2017 年6月 24 日

場所： 深草学舎紫英館2階東第2会議室

講演者：林珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手里山学研究センター・研究員)

「地理情報システム(GIS)による『滋賀県物産誌』の視覚化

—明治初期の滋賀県における産業と自然の様相—

19. 2017 年度第2回研究会

開催日：2017 年6月 27 日

場所： 深草学舎和顔館4階会議室2

講演者：田井中慎(株式会社4CYCLE・代表取締役)

「カンボジアにおける野蚕エリサン養蚕事業 —持続可能な開発に向けた企業の取り組み—

20. 2017 年度叢書合宿研究会

開催日：2017 年9月 30 日-10 月1日

場所： 草津市立まちづくりセンター3階 308 号室(滋賀県草津市)

アーバンホテル草津会議室コスモス(滋賀県草津市)

講演者：吉岡祥充(龍谷大学法学部・教授里山学研究センター・研究員)

「里山学から見る造林公社問題—「琵琶湖水域圏」を念頭において—」他 16 名

21. 2017 年度第3回研究会

開催日：2017 年 11 月7日

場所： 瀬田学舎7号館環境実習室2

講演者：林珠乃(龍谷大学理工学部・実験助手里山学研究センター・研究員)

「マラウイ湖国立公園の森林資源の利用と保全」* 22

太田真人(龍谷大学里山学研究センター・博士研究員)

「アフリカの里山—森林資源の利用と保全のバランス(植生調査報告)—」* 24

22. 2017 年度第4回研究会

開催日：2018 年2月 1日

場所： 深草学舎和顔館4階会議室3

講演者：劉璨(国家林業局経済発展研究センター・主席研究員)

「中国の6大林業政策の現状と課題」

劉浩(国家林業局経済発展研究センター・副研究員)

「集団林権制度改革は森林保全のインセンティブになっているのか？

～住民アンケート調査から～」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

23. 2017 年度第5回研究会

開催日: 2018 年2月6日

場所: 瀬田学舎1号館6階 619 会議室

講演者: 西田貴明(三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社・副主任研究員)

「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)という考え方と国内外の動向」

横田岳人(龍谷大学理工学部・准教授里山学研究センター・研究員)

「奥山の自然は蝕まれている ～ニホンジカによる荒廃は災害を誘発するのか？」

24. 2017 年度森林所有権制度研究会(共催)

開催日: 2018 年3月9日

場所: 深草学舎 22 号館4階会議室

講演者: 西脇秀一郎(龍谷大学里山学研究センター・リサーチ・アシスタント)

「共同地分割問題に関するドイツ団体法論(法人論)と入会理論」

古積健三郎(中央大学大学院法務研究科・教授)

「入会権と訴訟」

25. 2018 年度第 1 回研究会

開催日: 2018 年5月 11 日

場 所: 瀬田学舎7号館環境実習室2

講演者: 林竜馬(琵琶湖博物館・学芸員)

「花粉分析から探る過去の植生と景観」

26. 2018 年度第2回研究会

開催日: 2018 年6月 30 日

場 所: 深草学舎紫英館2階大会議室

講演者: 奥田太郎(南山大学社会倫理研究所・教授)

瀧健太郎(滋賀県立大学環境科学部・准教授)

万木浩敬(滋賀県琵琶湖環境部森林政策課交流推進係・課長補佐)

26. 2018 年度第3回研究会

開催日: 2018 年8月1日

場 所: 深草学舎和顔館4階大会議会議室2

講演者: 笠井賢紀(龍谷大学社会学部・准教授/里山学研究センター・研究員)

「滋賀県栗東市の左義長について」

27. 2018 年度第4回研究会

開催日: 2018 年8月5日-8月6日

場 所: 深草学舎紫英館2階東第2会議室

講演者: みらいの環境を考える龍谷プロジェクト有志

牛尾洋也(龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長)

「学生が取り組むフットパスの可能性ー東近江市における実験を踏まえて」

江南和幸(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー里山学研究センター・研究員)

「英国に先立つ 100 年前に始まる江戸時代庶民が楽しんだ「パブリックフットパス」の源流ー「都名所図会」、「拾遺都名所図会」、「都林泉名勝図会」、「江戸名所図会」に溢れる庶民の遊山(=パブリックフットパス)の楽しみ」

鈴木龍也(龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・研究員)

「イギリスにおける自然アクセス制度の新展開と WAW の取り組み」

28. 2018 年度第5回研究会

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

開催日: 2018 年 10 月 14 日 場 所: 深草学舎紫英館2階東第2会議室 講演者: 坂本寧男(元龍谷大学国際文化学部・教授/京都大学・名誉教授) 「北小松用地問題について」
29. 2018 年度第6回研究会 開催日: 2019 年2月 23 日 場 所: 深草学舎紫英館2階東第2会議室 講演者: 養父志乃夫(和歌山大学システム工芸部環境デザインメジャー大学院・教授) 「東南アジアの里山ー生きてゆくための知恵と作法」
30. 2019 年度第1回研究会 開催日: 2019 年4月8日 場 所: 深草学舎 22 号館4階会議室 講演者: Christian Busse(ドイツ連邦食料農業省農業市場・部長/欧州農業法学会・理事/ボン大 学・講師) 通 訳: 榎澤能生(早稲田大学法学学術院・教授/日本農業法学会・理事) 「ドイツの農林地取引法ー歴史的発展と現在の議論状況ー」
31. 2019 年度第2回研究会 開催日: 2019 年6月 22 日 場 所: 深草学舎和顔館4階会議室1 講演者: 丸山徳次(龍谷大学・名誉教授・研究フェロー里山学研究センター・研究員) 「里山モデル(持続可能社会の里山モデル)」 牛尾洋也(龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長) 「琵琶湖水域圏」
32. 2019 年度第3回研究会 開催日: 2019 年8月5日ー8月6日 場 所: 深草学舎和顔館4階会議室3 講演者: 牛尾洋也(龍谷大学法学部・教授/里山学研究センター・センター長) 「琵琶湖水域圏概念に関する整理」 「地球環境の課題と森林経営管理ー東近江モデルと京都モデルを比較してー」他 21 名
33. 2019 年度第4回研究会 開催日: 2019 年9月5日ー9月6日 場 所: 八日市商工会議所企業懇談室(滋賀県東近江市)
34. 2019 年度第5回研究会 開催日: 2019 年9月 27 日 場 所: 深草学舎紫英館2階第3共同研究室 講演者: 片野洋平(明治大学農学部・准教授) 「放置される資産のゆくえー地域社会で放置される山林・農地・家屋の現状と対策ー」
35. 2019 年度第6回研究会 開催日: 2019 年 10 月 27 日 場 所: 深草学舎紫英館2階東第2会議室 講演者: 坂井マスミ(神奈川県水源環境保全・再生かながわ県民会議3~4期委員) 「森林の所有と整備と利用はなぜ混迷するか」 北尾邦伸(島根大学・名誉教授)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

「森林管理問題の話—『森林管理』『森林経営』なるものをとらえなおす—」

●ホームページによる研究成果の公表等

1. http://www.est.ryukoku.ac.jp/est/yuhma/YUMA_hotaruDAS2017.html
 掲載情報の概要: 里山学研究センターにおける京滋の里川におけるゲンジボタルの発生量の経年変化に関する研究について、所属研究室の web において公表した。(遊磨正秀)
 公表日: 2017 年 7 月
2. <http://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-982.html>
 掲載情報の概要: 政策学部「政策実践・探究演習(海外)」京丹後市にて有機栽培野菜の販売、絶滅危惧種ゲンゴロウ等を活かした「ゲンゴロウ米」収穫の実施報告を龍谷大学 HP において公開した。(金紅実・谷垣岳人)
 公表日: 2017 年 9 月 27 日
3. <http://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-1341.html>
 掲載情報の概要: 龍谷IP事業「政策実践・探究演習(海外)南京プログラム」の FD 報告会の開催報告を龍谷大学 HP において公開した。(金紅実・谷垣岳人)
 公表日: 2017 年 12 月 18 日
4. http://www.worldwetlandsday.org/display-event?p_p_id=eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet&p_p_lifecycle=0&p_p_state=maximized&p_p_mode=view&p_p_col_id=column-1&p_p_col_count=2&_eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet_mvcPath=%2Fhtml%2Fevent%2Fdisplay%2Fview.jsp&_eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet_redirect=%2Fmap&_eventdisplay_WAR_ramwwdayportlet_eventEntryId=4595
 掲載情報の概要: 以下のポスター資料などをラムサール条約事務局世界湿地の日 2017 のウェブサイト上で公開した。(須川恒)
 ポスター発表資料詳細: 須川恒・野村祐美子・植田潤、「世界湿地の日 2017in 湖北—湿地と防災/減災・河川と流域へのまなざし—」
 公表日: 2017 年 4 月
5. http://www.est.ryukoku.ac.jp/est/yuhma/YUMA_hotaruDAS2018.html
 掲載情報の概要: 里山学研究センターにおける京滋のホテル発生状況に関する調査結果について、所属研究室の web において公表した。(遊磨正秀)
 公表日: 2018 年 7 月
6. http://zenhoken.sakura.ne.jp/HP_HotRef2016/HotRef2016_index.htm
 掲載情報の概要: ホテルに関する文献(日本人による文献 6,243 編, 海外の方による文献 1,516 編)を収録した「ホテル関連文献目録(2016 年版)」の web において公開をした。(遊磨正秀)
 公表日: 2019 年 1 月
7. <http://edna-lab.org/>
 掲載情報の概要: 里山学研究センターでのプロジェクトで中心的課題として担当している環境 DNA 分析について、関連研究の成果講評情報を所属研究室の web において公表した。

<これから実施する予定のもの>

該当なし

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

14 その他の研究成果等

●資料集など

1. 『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』(※内容は、No.5～No.23 を参照。)
発行日:2019年3月31日
(編集)龍谷大学里山学研究センター
URL: <https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2019/05/post-2.html> * 53

2. 『「南大萱の地名」 明治期南大萱村小字境界図』
発行日:2016年7月
(製作・刊行)南大萱資料室・龍谷大学里山学研究センター
(協力団体)瀬田北学区自治連合会・瀬田北学区文化振興会
URL: <https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2016/08/post.html> * 115

3. 「八日市てくてくまっぷ」
発行日:2018年3月31日
(刊行)聖徳太子の足跡をたどる近江鉄道を活かした観光促進協議会
(制作)みらいの環境を支える龍谷プロジェクト
(協力)龍谷大学里山学研究センター * 70

4. 「奥永源寺てくてくまっぷ」(※以下の4種類) * 71

「杠葉尾・黄川田てくてくまっぷ」
発行日:2019年3月
(刊行)龍谷大学里山学研究センター
(制作)みらいの環境を支える龍谷プロジェクト
(協力)SLYCE BASE CAMP、HALO CAFÉ、
藤井俊矢、東近江市エコツーリズム推進協議会 * 71

「政所・蓼畑てくてくまっぷ」
発行日:2019年3月
(刊行)龍谷大学里山学研究センター
(制作)みらいの環境を支える龍谷プロジェクト
(協力)東近江市エコツーリズム推進協議会、政所茶生産振興会 * 71

「蛭谷・箕川てくてくまっぷ」
発行日:2019年3月
(刊行)龍谷大学里山学研究センター
(制作)みらいの環境を支える龍谷プロジェクト
(協力)葛原穂高、川嶋富夫、小椋重則、東近江市エコツーリズム推進協議会 * 71

「君ヶ畑てくてくまっぷ」
発行日:2019年3月
(刊行)龍谷大学里山学研究センター

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

(制作)みらいの環境を支える龍谷プロジェクト

(協力)木地師のふるさと高松会、東近江市エコツーリズム推進協議会 * 71

5. 林珠乃・太田真人、“琵琶湖水域圏の特徴”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp2-15、(2019年3月)
6. 中川晃成、“空から見た鴨川の一年”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp16-23、(2019年3月)
7. 中川晃成、“県都大津:その現代化の源流を鳥瞰する”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp24-37、(2019年3月)
8. 中川晃成、“近江の戦争遺跡”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp38-47、(2019年3月)
9. 林珠乃・宮浦富保、“龍谷の森のオルソ画像”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp48-52、(2019年3月)
10. **林珠乃、“地図で見る滋賀県物産誌”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp53-90、(2019年3月) * 94**
11. **牛尾洋也、“琵琶湖水域圏概念の位置づけー資料集刊行に寄せてー”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp91-94、(2019年3月) * 78**
12. 中川晃成、“空から見た鴨川の一年”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp95-98、(2019年3月)
13. 中川晃成、“県都大津:その現代化の源流を鳥瞰する”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp99-103、(2019年3月)
14. 中川晃成、“近江の戦争遺跡”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp104-109、(2019年3月)
15. 林珠乃・宮浦富保、“こがた UAV で里山林を観察する”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp110、(2019年3月)
16. **林 珠乃、“滋賀物産誌の視覚化”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見える琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp111-118、(2019年3月) * 95**

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

17. 秋山道雄、“滋賀県の土地利用”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp119-120、(2019年3月)
18. 林珠乃、“里山・里湖の自然資源利用”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp121-122、(2019年3月)
19. 秋山道雄、“米の生産と流通”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp123-124、(2019年3月)
20. 林珠乃、“滋賀県における酒造りの歴史”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp125-127、(2019年3月)
21. 遊磨正秀、“琵琶湖の水産業 今昔”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp128-130、(2019年3月)
22. 伊達浩憲、“明治期「大中の湖」周辺村落における漁業・採藻の展開”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp131-142、(2019年3月)
23. 須川 恒、“琵琶湖のカモ猟について”、龍谷大学里山学研究センター(編)『目で見る琵琶湖水域圏一人と自然となりわいとー』、龍谷大学里山学研究センター pp143-144、(2019年3月)

●年次報告書

1. **2015年度年次報告書里山学研究*111**

『琵琶湖の保全再生と里山・里湖一人と水との共生にむけてー』

発行日：2016年3月31日

URL：<https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2017/02/2015.html>

【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

- ・嘉田由紀子、「文理連携をめざす環境研究者の理想をいかに政策実践にむすびつけたのか？
ー琵琶湖研究40年・滋賀県知事8年の経験からー」
- ・岡田英基、「琵琶湖の課題と琵琶湖保全再生法の制定」
- ・牛尾洋也、「琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究ーSatoyamaモデル
による地域・環境政策の新展開ー」
- ・山中裕樹、「汲んだ水から生物調査ー環境DNA分析による水棲生物の分布推定ー」*6
- ・宮浦富保、「里山の食とエネルギー」
- ・林珠乃、「琵琶湖水域圏の景観のみかた」
- ・大崎康文、「日本遺産 琵琶湖とその水辺景観 ー祈りと暮らしの水遺産ー」
- ・山口美知子、「東近江市が目指す流域政策 ー森里川湖から始まる環境基本計画ー」
- ・秋山道雄、「琵琶湖保全再生法の成立を受けて」
- ・村澤真保呂、「「こころ」と里山についての試論」
- ・牛尾洋也・嘉田由紀子・大崎康文・山口美知子・秋山道雄・山中裕樹・村澤真保呂、
「全体ディスカッション」

【2.研究会報告】

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・夏原由博、「パターンが決めるランドスケープの機能」
- ・秋山道雄、「変貌する琵琶湖ー沿岸域研究の経験からー」
- ・深町加津枝、「琵琶湖湖岸の里山景観めぐり研究と今後の方向性」
- ・大崎理沙、
「岩手県三陸海岸地域南部における里山・里海ライフスタイルの被災時危機適応力
に関する研究」
- ・横山秀司、「景観生態学的にみた琵琶湖集水域」
- ・山中裕樹、「次世代シーケンサーによる環境 DNA 分析でできること：
里山里湖の生物相解析に向けた応用」* 6
- ・劉璨、「中国の集団林権制度改革及びその関連政策の制度整備に関する研究」
- 【3.研究活動報告】
- ・宮浦富保、「龍谷の森での学生の研究活動」
- ・西脇秀一郎・太田真人、「滋賀県高島市における重要文化的景観の現況
ー重要文化的景観に関する研究調査報告ー」
- ・牛尾洋也・船越裕美・田中楓子・塩崎由香・吉見彩音、
「琵琶湖水域圏における重要文化的景観調査 その1 ー高島市大溝ー」* 49
- ・谷垣岳人、「中国河北省承德市平泉県における集団林権改革後の
自然資源の利活用の調査報告」
- ・牛尾洋也、「世界農業遺産調査ー和歌山県『みなべ・田辺の梅システム』ー」* 50
- ・西脇秀一郎、「京都弁護士会公害・環境委員会による里山実地修習」* 103
- ・林珠乃、「「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」
- ・伊藤大輔・横田岳人、「「龍谷の森」におけるササクサの分布と光環境について」
- ・井上なな・横田岳人、「収穫時期を逸したモウソウチクの食品化について」
- ・太田真人、「シンポジウム『琵琶湖・淀川の水質の現状と課題』について」
- ・太田真人、「シンポジウム『田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト交流会・琵琶湖』について」
- ・太田真人、「流域のこれからをみんなで考えるシンポジウム」について」
- ・西脇秀一郎、
「歴史まちづくり法の動向ー「近畿歴史まちづくりサミット in 京都」シンポジウム報告ー」
- ・西脇秀一郎、「適正な意思決定による災害復旧とまちづくり
ー「グリーンインフラと防潮堤問題」研究会報告ー」
- ・西脇秀一郎、「水の公共性から見る法と共同性
ー琵琶湖疏水「鴨川運河の魅力再発見」学術シンポジウムをうけてー」
- ・西脇秀一郎、「文化財(文化遺産)にかかわる法制度の一動向
ー「まち・ひと・こころかが織り成す京都遺産」制度創設記念シンポジウム報告ー」
- 【4.研究論文】
- ・高橋佳孝、「草原管理を反映する指標植物マニュアルの検証」* 46
- ・岩瀬剛二・松永将幸、
「特定外来生物オオハンゴンソウの繁殖能力および効率的駆除方法の検討」
- ・江南和幸、「比叡山と琵琶湖の自然を巡る」
- ・中川晃成、「琵琶湖湖岸線の変遷ー烏丸半島とその周辺域の絵図、地図、空中写真ー」
- ・高桑 進、「炭焼きの科学と木炭の現代的利用」
- ・遊磨正秀・丸山 敦・山中裕樹・太田真人、「琵琶湖の回遊魚と流入河川の河口付近環境」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

2. 2016 年度年次報告書里山学研究 * 112

『流域のくらしと奥山・里山 ～愛知川から考える～』

発行日: 2017 年3月 31 日

URL: <https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2017/06/2016.html>

【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

- ・田中滋、「なぜ愛知川流域を研究するか ―琵琶湖の健全な「乳母」であるために―」
- ・山口美知子、「東近江市の流域政策」
- ・須藤護、「小椋谷と木地屋」
- ・松尾扶美「東近江市 里山林整備の現場から」
- ・山下直子「東近江の森林資源～特徴と利用可能性」
- ・宮浦富保・山口美知子・須藤護・松尾扶美・山下直子・田中滋・林珠乃、
「森・川・湖の統一的な流域政策へ」

【2.研究会報告】

- ・中川晃成、「琵琶湖、その湖際の景観変遷 ―それを望むのは誰か―」
- ・**林珠乃、「地理情報システム(GIS)の基礎とその可能性」* 54**
- ・大崎康文、「水と暮らしの文化 ―日本遺産の取り組みについて―」
- ・山口美知子、「森林の現状と課題及び所有権の問題について」
- ・須川恒、「ラムサールシンポジウム 2016 中海・宍道湖」参加のための事前学習会」
- ・須川恒、「ラムサール条約を活かした湿地保全活動―世界湿地の日 in 湖北―」
- ・赤松喜和・金紅実、「ラムサールシンポジウム 2016 中海・宍道湖への参加・報告」
- ・小池浩一郎、「木質バイオマス発電と課題」
- ・泊みゆき、「日本における木質バイオマス利用の現状と課題」
- ・筒井正、「廃村茨川に生まれて ―森林文化再考―」
- ・須藤護、「木地師の活動と里村」
- ・Bosco Rusuwa、「マラウイ湖の水産業と暮らし」
- ・丸山敦、「マラウイ湖と琵琶湖の比較を考える」
- ・岡田英基、「琵琶湖保全再生施策に関する計画」の検討状況について」
- ・**釜井俊孝、「埋もれた都の防災学:都市と地盤災害の 2000 年」* 58**

【3.研究活動報告】

- ・宮浦富保、「龍谷の森での学生の研究活動」
- ・西脇秀一郎、「地域における新たな森林・林業施策の一動向
―滋賀県長浜市における自伐型林業施策に関する調査報告―」
- ・西脇秀一郎、「森林組合における里山及び奥山管理の現状
―滋賀県「東近江市永源寺森林組合」に関する調査報告―」
- ・**西脇秀一郎、「京都弁護士会公書・環境委員会への 2016 年度里山実地修習」* 104**
- ・牛尾洋也・宮浦富保・吉岡祥充、
「森林を中心とする地域資源の循環的利用による持続可能な地域づくりの先進事例
―ドイツ・バイエルン州アルゴイ地域とオーストリア「ブレゲンツの森」地域―」* 17
- ・村澤真保呂、「愛知川源流域(茨川)現地視察報告」
- ・太田真人・遊磨正秀、「「河辺いきものの森」のチョウ類相」
- ・清水万由子、「琵琶湖一周フィールド研究会報告」
- ・岡野大樹・嶋田可菜・古太恵人・浦諒太郎・山本竜平・由良康太・米住京子・山本英樹・
安達弘暉・西元康宏・井上優大・吹野僚平・藤坂妃那・今西 徹・野間元綺・菅野優香・

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

石田聡子・中原広貴・牛尾洋也、

「新潟県地域創生調査—国家戦略特区、世界農業遺産、日本遺産、環境政策—」* 51

- ・山中裕樹、「環境 DNA メタバーコーディングによる魚類相解析」
- ・森本健吾・横田岳人、「琵琶湖岸ヨシ群落について聞き取り調査」
- ・清水憲柱・横田岳人、「武奈ヶ岳登山道の荒廃の現状」
- ・濱田明里・横田岳人、
「伐採後放棄された里山の林床植生—伐採後経過年数の違いによる植生の違い—」
- ・高桑進、「松村式改良型ドラム缶炭窯の性能について—黒炭窯、白炭窯と比較して—」
- ・岩瀬剛二・小林龍昇、「メドハギに見られる帯化現象」
- ・好廣眞一、「城陽生きもの調査隊と青谷くぬぎ村—宇治川のヨシで竪穴住居をふきかえる—」
- ・高橋佳孝、「阿蘇における野焼き(burning)と草原維持の特殊性」* 47
- ・林珠乃、「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」

【4.研究論文】

- ・中川晃成・吉田天斗・井上康裕、「琵琶湖水位の 150 年、特にその自然変動および長期推移」* 97
- ・鈴木龍也、「自然鑑賞型遊歩道の管理責任判断における考慮事由
—2 つの落枝事故訴訟の検討を通して—」
- ・遊磨正秀・太田真人、「愛知川における河床高の変動」
- ・糸川風馬・河崎佑美・西川大夢・井上裕美・坂本風輝・谷口弘明・出口眞生樹・西村大輝・
長谷井典・半林奈津子・彭開源・俣野有紀・清水万由子、
「里川と人々の関わり—琵琶湖周辺地域の暮らしから考える—」
- ・片桐悠・清水万由子、「琵琶湖沿岸域の社会・文化に関する文献レビュー」

3. 2017 年度年次報告書里山学研究 * 60

『里山学から考える防災・減災 ～琵琶湖水域圏の保全・再生に向けて～』

発行日：2017 年3月 31 日

【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

- ・大熊孝、「日本人の伝統的自然観と治水のあり方」
- ・西田貴明、「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)という考え方と国内外の動向」
- ・瀧健太郎、「減災型治水システムの社会実装とその課題」* 1
- ・釜井俊孝、「里山開発と宅地災害—戦後日本の「遅れてきた公害」—」
- ・横田岳人、「奥山の自然は蝕まれている～ニホンジカに自然植生の荒廃は災害を誘発する
のか？」
- ・清水万由子・大熊孝・西田貴明・瀧健太郎・釜井俊孝・横田岳人、
「これからの防災・減災に求められること」

【2.研究会報告】

- ・池田恒男、
「日本民法によって捉えられるべき共同体的所有
—近代民法における「共有(広義)の諸形態」理論のパースペクティブに關説して」
- ・丸山徳次、「森のある大学」の里山学—「龍谷の森」の過去と未来—
- ・林珠乃、「地理情報システム(GIS)による『滋賀県物産誌』の視覚化
—明治初期の滋賀県における産業と自然の様相—」
- ・丸山徳次、「里湖(さとうみ)を包摂する里山学の展開」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・田井中慎、「カンボジアにおける野蚕エリサン養蚕事業
—持続可能な開発に向けた企業の取り組み—」
- ・吉岡祥充、「叢書合宿研究会報告」
- ・林珠乃、「マラウイ湖国立公園の森林資源の利用と保全」* 21
- ・太田真人、「アフリカの里山 —森林資源の利用と保全のバランス(植生調査報告)—」* 23
- ・劉璣、「中国の集団林権制度改革の政策課題に関する研究」
- ・劉浩、「中国の林業財政投資政策に関する研究」
- ・清水万由子、「シンポジウム「里山学から考える防災・減災～琵琶湖水域圏の保全・再生～」
に向けた事前研究会」
- ・高村学人・西脇秀一郎・古積健三郎、
「入会権をめぐる判例・学説の法学的検討「琵琶湖保全再生施策に関する計画」の検討状況に
ついて」
- 【3.研究活動報告】
- ・吉岡祥充・金 紅実・池田恒男・谷垣岳人・高桑進・張志濤・吳偉光・吳ウ松・謝屹・渠美・劉浩・
張婷婷、「日中森林政策研究ワークショップ「日中森林資源総合利用と政策」の開催」* 18
- ・吉岡祥充・金紅実・池田恒男・谷垣岳人・高桑進、
「中国広西壮族自治区の森林総合利用に関する実態調査報告」* 19
- ・林珠乃・太田真人・遊磨正秀・丸山敦、
「マラウイ湖国立公園での森林資源の利用と保全に関する調査」* 25
- ・林珠乃・宮浦富保・谷垣岳人、「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」
- ・林珠乃、「GISを活用した「滋賀県物産誌」の解析」* 56
- ・林珠乃、「南大萱の小字についての聞き取り調査」* 55
- ・太田真人、「愛知川沿岸土地改良区ヒアリング調査及び現地視察」
- ・太田真人・田中滋・高桑進・林珠乃、「葺元 藤居本家ヒアリング調査報告」
- ・丸山徳次、「韓国調査団の訪問報告」
- ・西脇秀一郎、
「里山学と法律実務家のかかわり —京都弁護士会公害・環境委員会(自然保護部会)
第 70 期選択的実務修習(環境問題体験コース)の実施—」* 105
- ・谷垣岳人、「龍谷講座×里山学研究センターシリーズ「伏見のいきものを知る」の実施報告」*
100
- ・牛尾洋也・本田大輝・山本英樹・由良康太・米住京子・井上優大・中田景子・安田奈於・
湯川希・斎藤菜乃子・澤村奈叶・鈴木彩有里・中原広貴・野間元綺・吹野僚平、
「フットパスを活かした地域づくり活動調査」* 72
- ・占部武生・水原詞治、
「褐鉄鉱触媒等による薪ストーブ燃焼ガス中 CO、HC 濃度の低減に関する基礎的研究」
- ・占部武生・水原詞治、
「薪ストーブ燃焼ガス中未燃ガス(一酸化炭素、炭化水素)の褐鉄鉱触媒による
完全燃焼化実験—前加熱温度の影響—」
- ・山中裕樹、
「魚類の環境 DNA メタバーコーディングにおける採水方法と検出種数の関係についての検討」
- ・遊磨正秀、「里地・里川におけるホタル類の生息環境
—愛知川流域および瀬田丘陵における予備調査—」
- ・高桑進、「2017 年度里山を活用した環境教育活動報告」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

・好廣眞一・田中昭夫・竹内康・久田晴生・上田員也・田部富男・奥田奈々美・平賀美和子、
「子どもたちと生きものを調べ、環境の現状と変化を知る ―城陽生きもの調査隊の 20 年―」

【4.研究論文】

・中川晃成、「近江国野洲郡の条里と荘園」* 98

・仲畑了・大澤晃、「「龍谷の森」における細根動態の長期観測」* 38

・浅海一暉・井上滉平・大下智輝・金本さくら・川端日菜々・河野拓海・小松右詩・清水莉子・
辻井宏佑・外山由利菜・濱田直幸・藤本和・松崎里歩・松元彰汰・横山智恵・清水万由子、

「琵琶湖流域における人と水のかかわり―環境社会学から考える―」* 63

4. **2018 年度年次報告書里山学研究** * 113

『SDGs と里山モデルー持続可能社会に向けてー』

発行日：2019 年3月 31 日

URL： <https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2019/06/2018sdgs.html>

【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

・野田真里、「SDGs と地域社会の挑戦」

・丸山徳次、「持続可能社会の里山モデル」* 83

・湯本貴和、「里山の生態系サービス:その歴史的変遷と将来」

・宮内泰介、「順応的な環境ガバナンスのあり方を求めて」

・田中滋・野田真里・丸山徳次・湯本貴和・宮内泰介、

「SDGs と里山モデルー持続可能社会に向けてー」

【2.研究会報告】

・林竜馬、「花粉分析から探る過去の植生と景観」

・清水万由子、「琵琶湖水域圏の可能性ー里山学からの展望ー」

・笠井賢紀、「滋賀県栗東市の左義長調査に見る意味空間の変遷ー地域社会論の視点からー」

・本田大輝・牛尾洋也・須川恒・江南和幸・鈴木龍也、

「<景観を楽しむ、地域を作る>フットパスーフットパスづくりの経験を踏まえてー」

・坂本寧男、「北小松用地の問題について」

・養父志乃夫、「里山に生きる家族と集落ーこころと絆、持続可能な暮らしー」

【3.研究活動報告】

・宮浦富保、「龍谷の森での学生の研究活動」

・太田真人・牛尾洋也・鈴木龍也・中川晃成・江南和幸・高桑進・山中勝次、

「北小松用地視察・探勝会」

・太田真人・遊磨正秀、「愛知川の砂礫州における昆虫相調査」* 11

・太田真人、「東近江市環境円卓会議ーみんな語り合う東近江の森「いま」と「これから」」

・西脇秀一郎、「弁護士会実務修習と里山学ー京都弁護士会公害・環境委員会第 71 期選択的
実務修習(自然保護部会)の実施ー」* 106

・西脇秀一郎、「地域資源の利活用と山林所有・管理の課題に関するー動向

ー「京都丹波高原国定公園」への京都弁護士会公害・環境委員会自然保護部会実施のフィー
ルドワーク調査報告ー」

・西脇秀一郎、「土地改良区の水管理に関する団体内部組織体制と国営農地再編整備事業の
現況と課題ー愛知川沿岸土地改良区及び東近江市農林水産部農村整備課への事例調査から
ー」

・林珠乃・宮浦富保・谷垣岳人、「「龍谷の森」里山保全の会の活動報告」

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- ・牛尾洋也、「龍谷の森おこし」推進ワーキンググループ 活動の経緯と現地検討会」
- ・牛尾洋也・野間元綺・斎藤菜乃子・本田大輝・鈴木彩有里・中田景子・澤村奈叶・安田奈於・湯川希・綾部友宥・峠元太、「フットパスによる地域活性化の研究と実践」* 73
- ・近藤駿・横田岳人、「ミヤコザサ個体の地下茎の分布」
- ・米田安沙佳・横田岳人、「森林環境における鳥類の調査方法の検討」
- ・東郷正文・須藤護、「大津市田上の衣生活資料・概要書」
- ・好廣眞一、「城陽生きもの調査隊この5年の活動」
- 【4.研究論文】
- ・小田奏・宮浦富保・林珠乃、「小型 UAV による空撮画像からの「龍谷の森」植生図作成の試み」* 37
- ・笠井賢紀、「地域社会における民族の意味とその変換－滋賀県栗東市の左義長を事例として－」
- ・中川晃成、「オールドオオツの歴史的諸相と地理的因子－川がながれ、街はまわる－」* 99
- ・占部武生・水原詞治、「薪ストーブ燃焼ガス中未燃ガス(一酸化炭素、炭化水素)の褐鉄鋼触媒による完全燃焼化実験－優れた酸化触媒効果を持つミネット鉱等の調査－」* 41

5. 2019 年度年次報告書里山学研究 * 75

『琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～』

発行日: 2020 年3月 31 日

URL: <https://satoyama.kenkyu.ryukoku.ac.jp/publication/2020/03/2019.html>

【1.龍谷大学里山学研究センターシンポジウム】

- ・三和伸彦、「琵琶湖なう 2019～琵琶湖のこれまで、そしてこれから～」
- ・水田有夏志、「東近江市 100 年の森づくりビジョンとその実現に向けて」* 69

【2.研究会報告】

- ・丸山徳次、「持続可能社会と里山モデル－琵琶湖水域圏の保全再生に向けて－」
- ・村澤真保呂、「精神・社会・自然環境の持続可能性」
- ・伊達浩憲、「里山学から見た東日本大震災－岩手県陸前高田市の事例－」
- ・宮浦富保、「里山の植生とバイオマス－「龍谷の森」を例として－」* 36
- ・中川晃成、「オールドオオツの景観情報学」
- ・林珠乃、「過去の文化的景観を復原する－明治初期の滋賀県における里山・里湖利用－」
- ・斎藤菜乃子、「活動からみるフットパスの意義と里山保全」
- ・牛尾洋也、「琵琶湖水域圏における人と自然との再構築－森・水・人・未来－」

【3.研究活動報告】

- ・Christian Busse・榎澤能生、「ドイツの農林地取引法－歴史的発展と現在の議論状況－」
- ・牛尾洋也・村澤真保呂・宮浦富保・丸山徳次・鈴木龍也・田中滋・遊磨正秀・伊達浩憲・中川晃成・林珠乃・越川博元・石塚武志・渡辺めぐみ・江南和幸・好廣眞一・猪谷富雄・占部武生・池田恒男・秋山道雄・高桑進・須川恒・岩瀬剛二・西脇秀一郎・太田真人・野間元綺、「琵琶湖を中心とする循環型自然・社会・文化環境の総合研究」プロジェクトの最終とりまとめに向けて」
- ・眞田章午、「2019 年度叢書合宿研究会－5 年プロジェクトの総括に向けて－」
- ・牛尾洋也・丸山徳次・伊達浩憲・田中滋・村澤真保呂・宮浦富保・遊磨正秀・秋山道雄・中川晃成・太田真人・眞田章午・野間元綺、「次年度に向けた合宿研究会」
- ・片野洋平、

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- 「放置される資産のゆくえー地域社会で放置される山林・農地・家屋の現状と対策ー」
- ・坂井マズミ、「森林の所有と整備と利用はなぜ混迷するのか」
 - ・北尾邦伸、「森林管理問題の話ー「森林管理」「森林経営」なるものをとらえなおすー」
 - ・宮浦富保、「龍谷の森での学生の研究活動」
 - ・林珠乃・宮浦富保、「龍谷の森」里山保全の会 2019 年度活動報告」
 - ・**眞田章午、「龍谷の森」を通じた司法修習生への実務修習ー京都弁護士会公害・環境保全委員会第 72 期選択的実務修習(自然保護部会)の実施ー*** 107
 - ・眞田章午、「東近江市 100 年の森づくり地域ワークショップ in 君ヶ畑ー「山」の所有と管理のあり方を中心にー」
 - ・鈴木龍也・野間元綺、「全国カレッジフットパスフォーラム 2019ー学生が考える持続可能な未来についてー」
 - ・**牛尾洋也・安田奈於・山口修平・澤村奈叶・湯川希、**
「岐阜県における地域資源管理調査ー世界農業遺産、食と農の景勝地ー」* 52
 - ・**牛尾洋也・野間元綺・斎藤菜乃子・鈴木彩有里・安田奈於・和田竜弥・久保智朗、**
「東近江におけるフットパスの在り方と今後の可能性について」* 74
 - ・遊磨正秀、「愛知川流域におけるホテル類の生息環境(続報)」* 10
 - ・太田真人・遊磨正秀、「龍谷の森」において初めて確認されたムラサキツバメについての報告」
 - ・高桑進、「龍谷の森での研究活動報告」
- 【4.研究論文】
- ・中川晃成、「近江宮川藩、最後の日々ー消えゆく近世・明治維新を小藩に生きたひとびとー」
 - ・**高桑進、「日本における木質バイオマス発電の現状と課題」*** 42
 - ・好廣眞一、「人はどこで変わり、育つのか(2)ー自然学校・城陽生きもの調査隊・ヤクザル調査隊ー」

●その他の研究成果等(ワーキングペーパー、口頭発表、社会貢献等)

1. 高橋佳孝、全国の草原の現状と草原の持つ公益的機能、全国草原の里市町村連絡協議会設立総会(主催:全国草原の里市町村連絡協議会)、2016 年 11 月 15 日、東京
2. 高橋佳孝、草原の保全・再生に向けた募金活動～阿蘇の草原再生募金の事例～、「草原の保全・再生に向けた募金活動」に係るセミナー(主催:美祢市観光協会)、2017 年 2 月 4 日、美祢
3. 高橋佳孝、地域資源を生かす和牛放牧の多様な価値、平成 28 年度畜産研修会(主催:山口県東部家畜保健衛生推進協議会主催)、2017 年 2 月 15 日、岩国
4. 須川恒、ラムサール条約を活かした湿地保全活動ー世界湿地の日 in 湖北ー、ラムサールシンポジウム 2016 in 中海・宍道湖、口頭発表、2016 年 8 月 29 日、米子全日空ホテル
5. 須川恒、ラムサール条約を活かした琵琶湖湖北地方における世界湿地の日の活動(2011-2016)、ラムサールシンポジウム 2016 in 中海・宍道湖、ポスター発表、2016 年 8 月 28 日、米子全日空ホテル
6. 須川 恒、鴨川のユリカモメの標識調査からはじまった日本とカムチャツカの交流史、大阪自然史フェスティバル 2016 ブース展示、2016 年 11 月 19-20 日、大阪市立自然史博物館
7. 須川 恒・佐藤達夫、カラーマーキング調査におけるポータルサイトの力、大阪自然史フェスティバル 2016 ブース展示、2016 年 11 月 19-20 日、大阪市立自然史博物館
8. 須川 恒、ユリカモメ立石プロジェクト(武庫川におけるユリカモメの標識鳥記録の解明)、兵庫県立川西明峰高校理科部勉強会、2016 年 4 月 3 日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

9. 須川 恒、渡り鳥は世界を結ぶ Part10『しあわせの「シジウカラガンプロジェクト」』、川西自然教室妙見山合宿(本瀧寺宿坊)連続講演、2016年5月14日
10. 須川 恒、京都府のカワウ問題、確かな管理へ、カワウ対策講演・意見交換会、2017年2月6日、上桂川漁協協同組合事務所会議室
11. 須川 恒、京都府のカワウ問題、確かな管理へ、カワウ対策講演・意見交換会、2017年2月7日、中丹広域振興局福知山庁舎
12. 須川 恒、「今でも出てくるかもしれない冠島のオオミズナギドリ標識情報」、大阪鳥類研究グループ総会、2017年3月11日、大阪市立自然史博物館
13. 須川 恒・狩野清貴、京都府冠島におけるオオミズナギドリ 標識調査・全国との連携など、オオミズナギドリ研究集会、ポスター発表、2017年3月25日、東京大学柏キャンパス大気海洋研究所
14. 須川 恒・須川 渡・村上 悟、あまいろチャンネル『びわ湖と渡り鳥と物語』(76分)、PN:村上 悟、2016年4月9日、栗東さくら、https://www.youtube.com/watch?v=-m57oaL_x_M305
15. 須川 恒、風になる、なら FM どっとこむ「風天」、PN:森啓・AS:森口知可子、2016年5月12日 19:00-19:30、
<http://784press.navvita.under.jp/?cid=33>、<http://navvita.under.jp/huten/20160512huten.mp3>
16. 沢田 隼・藤原壮平・遊磨正秀・丸山敦、“安定同位体比で判明した琵琶湖に生息するアユにおける各生活史型の産卵特性”、第65回魚類自然史研究会(龍谷大学、大津市)(2017年11月19日)
17. 谷垣岳人、“里山の自然”、(招待講演)京都府高等学校理科教育研究会連絡協議会実習助手部会(京都市)(2017年5月18日)
18. 谷垣岳人、“減りゆく日本の生物多様性と自然再生”、青島農業大学—龍谷大学研究交流会(中国青島市)(2017年9月13日)
19. 谷垣岳人、“日中相互訪問型里山実習”、大学間里山交流会 2017(兵庫県三田市)(2017年9月24日)
20. 須川 恒、“京都府冠島におけるオオミズナギドリの標識調査による生残率推定”、日本鳥類標識協会出雲大会(出雲市)(2017年10月1日)
21. 須川 恒、“渡り鳥は世界を結ぶ Part11『北の国からの来訪者—オオミズナギドリ・ユリカモメ・コクガン—』”、(連続講演)川西自然教室妙見山合宿(本瀧寺、大阪府豊能郡)(2017年5月13日)
22. 須川 恒、“文化財の中の探鳥”、八尾市旧植田家住宅企画展「植田家に潜む“鳥”」講演会(八尾市)(2017年11月25日)
23. 谷垣岳人、“京都の里山と昆虫たち”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る第1回、龍谷大学(京都市)(2017年10月7日)
24. 須川 恒、“伏見とかかわる身近な鳥、渡りをする水鳥たち”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る第2回、龍谷大学(京都市)(2017年10月21日)
25. 好廣眞一、“伏見に暮らすけものたち”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る第3回、龍谷大学(京都市)(2017年11月18日)
26. 谷垣岳人・好廣眞一・須川恒・上西実、“夜の野生動物観察会”、龍谷講座×里山学研究センター〈シリーズ〉伏見のいきものを知る現地学習(京都市)(2017年11月10日)
27. 高橋佳孝、“九州の宝”千年の草原をどう守り育むか”、第31回肥後の水とみどりの愛護賞シンポジウム(熊本市)(2017年10月25日)
28. 高橋佳孝、“火山と草原”、阿蘇ガイド養成講座(主催:阿蘇ガイド養成講座実行委員会)(阿蘇市)(2017年10月21日)
29. 平舘俊太郎・楠本良延・森田沙綾香・小柳知代・横川昌史・高橋佳孝、“表層土壌の化学特性お

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

- よび管理手法が草原における出現植物種に及ぼす影響～阿蘇の草原における事例～”、日本
 土壌肥料学会九州支部例会(佐賀市)(2017年9月22日)
30. 高桑進、“日本の森林資源の保全と有効利用について～若者へのメッセ～ジ”、第1回大阪エコ
 パートナーシップ交流会講演(大阪市)(2017年7月29日)
 31. 高桑進、“生命環境教育しています”、大阪ベンチャー研究会(大阪市)(2017年8月19日)
 32. 高桑進、“環境教育プログラムとしての新しい炭焼きの取り組み”、第12回大学間里山交流会(兵
 庫県三田市)(2017年9月24日)
 33. 高桑進、“天然スギの起源と利用の歴史”、宮津杉保存会研究会(宮津市)(2017年10月9日)
 34. *16 林珠乃、『滋賀県物産誌』にもとづく酒造業の分布地図作成(2017年3月)
 35. 遊磨正秀(2015/12/18) 琵琶湖と流入河川の魚類と環境. 滋賀県立大学環境科学セミナー, 彦
 根市
 36. 遊磨正秀(2015/7/3) 「ゲンジボタルの生態-移動性および個体群動態-」, シンポジウム「ホタル
 の発光多様性と環境保全」 in 昆虫 DNA 研究会 第12回研究集会, 福井県あわら市.
 37. *14 竹村嘉礼(2016) 地表性甲虫の多様性に対する里山の部分的伐採の影響、龍谷大学理工学
 部環境ソリューション工学科 2015年度卒業研究
 38. 遊磨正秀、“愛知川における河床高の変動とアユ”、愛知川 成果発表会・ワークショップ、五個荘
 コミュニティセンター、(滋賀県東近江市)(2018年10月30日)
 39. 遊磨正秀、“ホタルのくらし”、京都市御所東小学校学習会、(京都市)(2018年10月18日)
 40. 遊磨正秀、“ゲンジボタル成虫発生量の年変動:降雨以外に月の明るさは影響するのか”、第51
 回全国ホタル研究会 北海道稚内・豊富大会、(稚内市)(2018年7月21日)
 41. 遊磨正秀、“教えて! Goo, コラム「教えて! ウォッチャー」、ホタルの見頃や生態を調べてみた”、
<https://oshiete.goo.ne.jp/> (2018年6月5日)
 42. Hayato Sawada, Kanji Shigeta, Masaki Kawakami, Sohei Fujiwara, Masahide Yuma, Atsushi
 Maruyama. Spawning characteristics of life-history polymorphic landlocked Ayu in Lake Biwa as
 revealed by stable isotope analysis. The 8th EAFES International Congress, Nagoya. (2018/4/22)
 43. 江南和幸、“ヨーロッパ人びとを魅了した日本の園芸—江戸植物絵本と名所図会にその源を探
 る”灘浜サイエンススクエア(2018年9月2日)
 44. 江南和幸、“川の恵み—野草食の喜びと植物文化”河川レンジャー:木津川管内出張所主宰
 (2018年5月26日)
 45. 秋山道雄、“琵琶湖保全再生計画の試金石—クリティカルポイント・赤野井湾の事例から—”、
 水資源・環境学会 2018年度研究大会(東京都文京区)(2018.6.2)
 46. 好廣眞一、“親戚や祖先の「あたま」の模型を作ろう”、龍大 REC ジュニアキャンパス 2018(京都
 市)(2018年8月)
 47. 好廣眞一、“ヤクザル調査隊 30年—これまでのあゆみと分ったこと—”、ヤクザル調査隊講演会
 (屋久島町)(2018年8月)
 48. 高橋佳孝、“森林の国で、野原を守る ～古くて新しい草の循環利用～”、ウスイロヒョウモンモド
 キ意見交換会(新庄村)(2018年2月18日)
 49. 高橋佳孝、“草原の危機:火入れと利用が守る草原の生態系と地域の将来”、第12回サイエンス
 カフェ RRM(豊岡市)(2018年7月28日)
 50. 伊達浩憲、“里山学から見た東日本大震災—岩手県陸前高田市の事例”、龍谷大学里山学研究
 センター2019年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発
 信—」(滋賀県大津市)(2019年12月21日)
 51. 丸山敦・沢田隼・中川晃成・遊磨正秀、“河川における瀬切れの発生要因および瀬切れが魚類に
 及ぼす影響の探索:同位体分析と空撮による革新的アプローチ”、龍谷大学理工学部 新春技
 術講演会(大津市)(ポスター発表)(2019/1/16)
 52. 遊磨正秀、“京都市内10か所におけるホタル成虫の発生量の年変動ならびに生残率に関して”、
 京都ほたるネットワーク講演会(京都市)(2019年4月4日)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

53. 遊磨正秀・西野伸・京都ほたるネットワーク、“京都市内 10 か所におけるホタル成虫発生量の年変動ならびに生残率(2010 年～2018 年)” 全国ホタル研究会沖縄久米島大会(沖縄県久米島町)(2019 年 4 月 20 日)
54. 野村将一郎・吉村理・森脇優介・太田真人・遊磨正秀、“ため池に生息する魚類—滋賀県と兵庫県と比較—” 龍谷大学里山学研究センター シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～(大津市)(ポスター発表)(2019 年 12 月 21 日)
55. 吉村理・野村将一郎・森脇優介・久保星・福岡太一・太田真人・遊磨正秀、“梅雨期の市街地植生におけるクチベニマイマイの移動能力” 龍谷大学里山学研究センター シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～(ポスター発表)(大津市)(2019 年 12 月 21 日)
56. 森脇優介・野村将一郎・吉村理・久保星・福岡太一・太田真人・遊磨正秀、“色の異なる LED 電球に集まるガ類の比較” 龍谷大学里山学研究センター シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～(大津市)(ポスター発表)(2019 年 12 月 21 日)
57. 久保星・福岡太一・野村将一郎・吉村理・森脇優介・太田真人・遊磨正秀、“木津川下流域におけるコクチバス *Micropterus dolomieu* の食性” 龍谷大学里山学研究センター シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～(ポスター発表)(大津市)(2019 年 12 月 21 日)
58. 福岡太一・田邑龍・久保星・野村将一郎・吉村理・森脇優介・太田真人・遊磨正秀、“水田におけるクロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aube 幼虫期の食性” 龍谷大学里山学研究センター シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～(ポスター発表)(大津市)(2019 年 12 月 21 日)
59. 太田真人・遊磨正秀・野村将一郎・吉村理・安田光児・新堀萌・前川順登・久保星・福岡太一、“砂礫州に生きる昆虫たち—植生との関係性—” 龍谷大学里山学研究センター シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現～里山学からの発信～(ポスター発表)(大津市)(2019 年 12 月 21 日)
60. 中川晃成、“オールドオオツの景観情報学”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
61. 金紅実、“战后日本农业政策和环境问题、向环保型农业转型”、2019 Japan-China Economic Comparative Research Association、(鳥根県立大学)(2019 年 4 月 20-21 日)
62. 金紅実、“龍谷大学の社会貢献型実践的教學活動の紹介—政策学部の実践型/課題解決型教學活動経験—(中国語題目: 龍谷大学社会貢献型實踐教學的介紹-政策学部的實踐型/解決問題型教學經驗-)”、2019 新實踐・台日大学連盟地方連携及び社会實踐研究國際シンポジウム、国立台湾大学(台北市)(2019 年 5 月 22 日)
63. 金紅実、“龍谷大学政策学部の実践型教育科目の開発—政策実践・探究演習 I A II A(海外)(通称名: 京都・南京 PBL)”、2019 USR EXPO 大學社會實踐博覽會(高雄市)(2019 年 12 月 1 日)
64. 金紅実、“PBL(課題解決型学修)國際交流プログラムの設計と運営—龍谷大学政策学部×南京大学金陵学院の共同開発—”、2019USR 成果発表/國際社会實踐年會(国立政治大学・台北市)(2019 年 12 月 14 日)
65. 金紅実、“戦後日本の近代工業化と環境経済学的发展—独占資本主義への挑戦”、南京大学金陵学院講演会(南京市)(2019 年 12 月 26 日)
66. 猪谷富雄・有田啓一郎、ポスター発表、“水稻自然農法の東近江市における栽培事例”、龍谷大学里山学研究センターシンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(大津市)(2019 年 12 月 21 日)
67. 須川恒、“ネチャエフの千島列島海鳥情報”、日本鳥学会員近畿地区懇談会 117 回例会(京都市龍谷大学深草学舎)(2019 年 6 月 15 日)
68. 須川恒、“琵琶湖湖岸の鳥類生息環境から～未来につなげる課題は何か～”(ポスター発表)、龍谷大里山学研究センターシンポジウム(大津市ピアザ淡海)(2019 年 12 月 21 日)

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

69. 秋山道雄、“高梁川水系柳井原貯水池をめぐる論点—治水と利水の歴史的な重層構造—”、水資源・環境学会 2019 年度研究大会(京都府長岡京市)(2019 年 6 月 8 日)
70. 秋山道雄、“戦後日本の地域開発(国土開発)における水資源管理の位置”、総合地球環境学研究所実践プログラム 1:「環境変動に柔軟に対処しうる社会への転換」(京都市)(2019 年 6 月 27 日)
71. Iwase, K, “Some notable characteristics of jojoba plants found in cultivation in a greenhouse”, 12th International symposium exploring the global sustainability(東大阪市)(2019 年 8 月)
72. Yuki Yoshida, Masaaki Amemiya, Koji Iwase, “Branching properties of Tsumekusa (Sagina japonica) under cultivation condition”, 12th International symposium exploring the global sustainability(東大阪市)(2019 年 8 月)
73. 丸山徳次、“持続可能社会と里山モデル—琵琶湖水域圏の保全再生に向けて—”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
74. 村澤真保呂、“精神・社会・自然環境の持続可能性”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
75. 宮浦富保、“里山の植生とバイオマス—「龍谷の森」を例として—”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
76. 林珠乃、“過去の文化的景観を復原する—明治初期の滋賀県における里山・里湖利用—”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
77. 斎藤菜乃子、“活動を通してみるフットパスの意義と里山保全”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
78. 牛尾洋也、“琵琶湖水域圏における人と自然との再構築—森・水・人・未来—”、龍谷大学里山学研究センター2019 年度シンポジウム「琵琶湖を中心とする自然共生型社会の実現—里山学からの発信—」(滋賀県大津市)(2019 年 12 月 21 日)
79. 好廣眞一、“ヤクザル調査隊の始まりと、海岸域・山岳域の分布調査”、ヤクザル調査隊 30 周年記念シンポジウム(東京)(2019 年 4 月)
80. 渡辺 めぐみ、“農林漁家民宿における女性労働”、第 31 回日本労働社会学会大会(所沢市)(2019 年 11 月 2 日)
81. 村澤真保呂、「環境問題と精神疾患」、慶應義塾大学・三田哲学会共催国際シンポジウム『病いは物語である』、東京(発表確定 2020 年 2 月 23 日)
82. 村澤真保呂、「日吉台まちづくり協議会の取り組みと地域社会の課題:SDGs との関連から」、滋賀県大津市日吉台自治連合会と奈良県王寺町自治会『合同研修会』、大津市(2019 年 5 月 12 日)
83. 村澤真保呂、「現代世界の課題」、立命館大学学生自主団体主催講演会『大学でなにを学ぶか』、京都市(2018 年 4 月 13 日)
84. 村澤真保呂・原口剛・村上潔、「ジェントリフィケーションの変容」、カルチュラルスタディーズ学会、東京(2017 年 9 月 24 日)
85. 村澤真保呂、「若者とモラトリアムの現在」、ユースワーカー養成協会、京都市(2017 年 6 月 21 日)
86. 村澤真保呂、「『ローカル』をどう考えるか」、立命館大学丹後村おこしチーム主催第三回『地方から社会を考えるシンポジウム』、茨木市(2016 年 11 月 20 日)
87. Mahoro MURASAWA, “ Politics, Economy, and Culture in Society of Affect :Is There Any Future for Global Capitalism?”, International Cultural Typhoon 2018, Kyoto, (23 June 2018)査読付
88. Mahoro MURASAWA, “Gentrification in East Asia: Capitalism, Development, Violence”, International Cultural Typhoon 2018, Kyoto, (23 June 2018)査読付
89. Ryuya Okada, Satsuki Tsuji, Naoki Shibata, Keigo Morita, Hiroki Yamanaka, Tadao Kitagawa,

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

“Distribution patterns of two sympatric Japanese dojo loach species within a wetland as revealed by direct collection and environmental DNA surveys.”、XVI European Congress of Ichthyology, Lausanne(2019 年)査読付

90. Hiroki Yamanaka, “Current movement in and around environmental DNA analysis in Japan”、3rd Environmental DNA Technical Exchange Workshop(Tampa)(2019 年)
91. 小関右介・武島弘彦・野原健司・満尾世志人・飯田碧・釣健司・廣原嵩也・山中裕樹、“佐渡島で環境 DNA メタバーコーディングやってみた！ ～全島スケールの河川魚類群集構造の理解に向けて～”、第 41 回魚類系統研究会(札幌)(2019 年 11 月 21 日)
92. 牛尾洋也、「土地所有権の自由と環境利用秩序」、関西取引法研究会 11 月例会(大阪)(2018 年 11 月 17 日)
93. 牛尾洋也、「里山学の視点から」<ディスカッサント>「2018 年度農業法学会学術大会シンポジウム報告」(京都)(2018 年 11 月 10-11 日)
94. 牛尾洋也、「自然資源と法—森林の経営・管理を中心として—」「持続可能社会における法と倫理—里山学からの発信—」関西大学法学研究所第 57 回公開講座、(大阪)(2020 年 2 月 15 日)
95. 牛尾洋也、「自然共生型・交流型総合政策としてのフットパス、WaWについて」、滋賀県エコツーリズム推進ネットワーク形成会議(滋賀県)(2020 年 2 月 6 日)
96. 牛尾洋也、「『まちづくり権』に関する意見書・レジュメ」、大阪弁護士会まちづくり権勉強会(大阪)(2019 年 1 月 23 日)
97. 牛尾洋也、「民事上の『まちづくり権』に関する意見書」、神戸地方裁判所尼崎支部提出、(2019 年 1 月 29 日)

●受賞リスト

1. Hiroki Yamanaka, Toshifumi Minamoto, Junichi Matsuura, Sho Sakurai, Satsuki Tsuji, Hiromu Motozawa, Masamichi Hongo, Yuki Sogo, Naoki Kakimi, Iori Teramura, Masaki Sugita, Miki Baba, Akihiro Kondo, Limnology Excellent Paper Award, “A simple method for preserving environmental DNA in water samples at ambient temperature by addition of cationic surfactant.” 2019 年 9 月 30 日

●報道発表リスト

1. “おはようパーソナリティ道上洋三です「ホタルの季節ですね その生態を徹底解剖」”、ラジオ朝日、2018 年 5 月 29 日
2. “知りたがりっ！「食を通じて里山を守る」”、NHK 大阪放送局、2018 年 5 月 30 日

●報道掲載リスト

1. “山林寄付 相続税ずしり 母 81 歳「とても無理」”、毎日新聞朝刊(全国版)、2017 年 4 月 4 日
2. “ピンクのキリギリス見つけた 京都、色素が変異”、京都新聞、2017 年 9 月 23 日
3. “ゲンゴロウ見つけたよ”、京都新聞、2017 年 7 月 9 日
4. “島と人と海鳥の遺産・冠島”、京都大学新聞
(Web 版 <http://www.kyoto-up.org/archives/2575>)、2017 年 7 月 1 日
5. “オオミズナギドリ 府鳥、繁殖に陰り？ 舞鶴・冠島で生態調査”、毎日新聞(京都地方版)、2017 年 8 月 29 日
6. “龍谷講座×里山学研究センター 身近な鳥に関心を”、龍谷大学新聞(625 号、Web 版 <http://www.rpress.net/article/625/07.html>)、2017 年 11 月 15 日
7. “「カブ王国」滋賀 種子保存の支援体制を”、京都新聞、2017 年 11 月 24 日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

8. “かんさい情報ネットten.”、読売テレビ、2017年12月1日
9. “千年の草原 地下水育む「肥後の水とみどりの愛護賞」表彰式 講演 阿蘇草原再生協議会 高橋佳孝氏”、熊本日日新聞、2017年11月24日
10. ゲンゴロウ米 地域活性 龍谷大生がブランド提言 京丹後、過疎の三重・森本地区／京都”、毎日新聞(地方版、<https://mainichi.jp/articles/20180116/dtl/k26/100/394000c>)、2018年1月16日
11. “里山の達人一押 里山食べ語り”、京都新聞滋賀版、2018年4月2日～9月24日
12. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ① 近所の空き地遊びが原点」”、熊本日日新聞、2019年10月13日
13. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ② 尾根沿いの野で癒やされ」”、熊本日日新聞、2019年10月14日
14. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ③ ススキの草原迷い遭難騒ぎ」”、熊本日日新聞、2019年10月16日
15. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ④ 進路を決めた万博ツアー」”、熊本日日新聞、2019年10月17日
16. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑤ 農水省に進み草地研究へ」”、熊本日日新聞、2019年10月18日
17. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑥ 三瓶山 草原失い森林に」”、熊本日日新聞、2019年10月19日
18. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑦ 和牛放牧 24年ぶりに復活」”、熊本日日新聞、2019年10月20日
19. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑧ 理解されなかった草原研究」”、熊本日日新聞、2019年10月21日
20. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑨ 生物多様性の保全研究へ」”、熊本日日新聞、2019年10月22日
21. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑩ 消滅した草原跡地を訪ねる」”、熊本日日新聞、2019年10月23日
22. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑪ 阿蘇でも喪失の危機潜む」”、熊本日日新聞、2019年10月24日
23. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑫ 阿蘇に導いてくれた恩師」”、熊本日日新聞、2019年10月25日
24. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑬ 草小積み 人々の営み学ぶ」”、熊本日日新聞、2019年10月26日
25. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑭ 賢く草利用 多様性はぐくむ」”、熊本日日新聞、2019年10月27日
26. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑮ 牛馬はつつじ山の造園師」”、熊本日日新聞、2019年10月28日
27. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑯ 草千里 シバの”利子“で存続””、熊本日日新聞、2019年10月29日
28. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑰ 牛馬 草千里の池を涵養””、熊本日日新聞、2019年10月30日
29. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑱ 野草堆肥 阿蘇の未来をつくる””、熊本日日新聞、2019年10月31日
30. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑲ 阿蘇の野草に熱い視線””、熊本日日新聞、2019年11月1日
31. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ⑳ 野焼きの実態を明らかに””、熊本日日新聞、2019年11月2日
32. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉑ 野焼きボランティア提案””、熊本日日新聞、2019年11月3日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

33. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉔ 左手で敬礼 永久の別れ」”、熊本日日新聞、2019年11月4日
34. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉓ いい人、いい仕事に出会う”、熊本日日新聞、2019年11月5日
35. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉔ 野焼き支える市民組織”、熊本日日新聞、2019年11月6日
36. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉕ 実務能力にたけた戦略家”、熊本日日新聞、2019年11月7日
37. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉖ 担い手と支え手をむすぶ”、熊本日日新聞、2019年11月8日
38. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉗ 野焼きは天候にしたがう”、熊本日日新聞、2019年11月9日
39. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉘ 外輪山で草原再生の調査も”、熊本日日新聞、2019年11月10日
40. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉙ 全国草原サミット始まる”、熊本日日新聞、2019年11月12日
41. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉚ 全国草原ネットワーク発足へ”、熊本日日新聞、2019年11月13日
42. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉛ 全国草原サミット再開へ”、熊本日日新聞、2019年11月14日
43. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉜ 北広島町大会でサミット一新”、熊本日日新聞、2019年11月15日
44. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉝ 草原自治体ネット発足”、熊本日日新聞、2019年11月16日
45. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉞ 草原の多様な恵み 発信へ”、熊本日日新聞、2019年11月17日
46. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㉟ 自然の古文書を読み解く”、熊本日日新聞、2019年11月18日
47. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊱ 肥後は草原の国だった”、熊本日日新聞、2019年11月19日
48. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊲ 草原の土壌は炭素貯蔵庫”、熊本日日新聞、2019年11月20日
49. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊳ 阿蘇草原は「九州の水がめ」”、熊本日日新聞、2019年11月21日
50. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊴ 寒冷な時代の生き物を守る”、熊本日日新聞、2019年11月22日
51. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊵ 意外に優しい草原の火”、熊本日日新聞、2019年11月23日
52. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊶ あか牛 多様な価値もつ”、熊本日日新聞、2019年11月24日
53. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊷ チョウ守る野焼きと放牧”、熊本日日新聞、2019年11月25日
54. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊸ つなごう「美と知と技」”、熊本日日新聞、2019年11月26日
55. “わたしを語る「原っぱにいざなわれ ㊹ 一期一会のご縁大切に”、熊本日日新聞、2019年11月27日
56. “精神科医・中井久夫の思想に迫る：村沢・龍谷大教授ら新著”、読売新聞夕刊、2018年10月21日
57. “岩手に寄り添い歩む”、岩手日報、2020年3月11日
58. “ヤクシマザル生態調査、成果紹介 30年記念シンポジウム”、Yahoo! ニュース、2019年4月21日

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

日

- 59.. “ヤクザル研究 30 年シンポ”、京都新聞、2019 年 4 月 22 日
60. “ヤクシマザル調査隊 研究 30 年の成果紹介 都内でシンポジウム”、東奥日報社
61. “サルの声追い 30 年 屋久島調査隊、群れの生態解明”、2019 年 5 月 16 日
62. “龍谷大学講師 生息する魚を推定する新技術「環境 DNA」の開発、普及に取り組む”、世界の水事情、2019 年 2 月 27 日、<http://water-news.info/10213.html/trackback>
63. “山林寄付 相続税ずしり 母 81 歳「とても無理」”、毎日新聞朝刊(全国版)、2017 年 4 月 4 日

●その他(各種委員会活動、成果頒布等)

1. 谷垣岳人、京都府外来種専門委員会、2016 年 8 月～現在
2. 谷垣岳人、レッドデータ改訂検討委員会、2019 年 6 月～現在
3. 須川恒、環境省モニタリング 1000 ガンカモ類検討委員会委員、2004 年～現在
4. 須川恒、環境省モニタリング 1000 海鳥調査検討委員会委員、2008 年 12 月～現在
5. 須川恒、京都府カワウ対策協議会(副会長)、2009 年～現在
6. 須川恒、滋賀県カワウ総合対策協議会委員、2010 年 7 月～現在
7. 須川恒、三重県紀伊長島鳥獣保護区カワウ対策連絡協議会委員、2011 年 8 月～現在
8. 須川恒、関西広域連合関西地域カワウ広域保護管理計画検討委員会委員、2011 年 11 月～現在
9. 須川恒、大阪府榎尾川上流部自然環境保全対策検討委員会委員、2012 年 4 月～現在
10. 須川恒、滋賀県カワウ総合対策協議会個体数調整部会委員、2013 年 11 月～現在
11. 須川恒、新名神高速道路、滋賀県域自然環境保全検討会 WG 委員、2014 年 8 月～現在
12. 須川恒、新名神高速道路、京都府域自然環境保全検討会委員、2015 年 10 月～現在
13. 須川恒、京都府外来種実態調査専門委員会(鳥類班代表)、2016 年～2018 年 3 月
14. 須川恒、滋賀県カワウ特定計画(第 3 次)検討委員会、2016 年～2017 年
15. 須川恒、京都府希少野生生物保全専門委員会(レッドリスト改訂鳥類班代表)2017 年 10 月～現在
16. 須川恒、国交省淀川流域委員会地域委員会委員(環境)、2014 年～現在
17. 高桑進、京都伝統と文化の森推進協議会森林整備・景観対策専門委員会委員長、2016 年 4 月～現在
18. 金紅実、特定非営利活動法人近畿環境市民活動相互支援センター(NPO 法人エコネット近畿)理事、2017 年 2 月～現在
19. 遊磨正秀、大津市緑の基本計画審議会委員、2016 年 4 月～2019 年 3 月
20. 遊磨正秀、天然記念物「船小屋ゲンジボタル発生地」保護指導委員会・委員長、2015 年 4 月～現在
21. 遊磨正秀、天然記念物山口ゲンジボタル発生地現状変更申請審査会・委員長、2015 年 4 月～現在
22. 遊磨正秀、大津市廃棄物処理施設に関する意見聴取会委員、2009 年 4 月～現在
23. 遊磨正秀、琵琶湖博物館総合研究・共同研究審査委員会委員、2011 年 4 月～現在
24. 遊磨正秀、日本景観生態学会運営委員会委員、1999 年 4 月～現在
25. 遊磨正秀、生態学会近畿地区会 自然保護専門委員会委員、2009 年 4 月～現在
26. 遊磨正秀、環境技術学会編集委員、2004 年 4 月～現在
27. 遊磨正秀、滋賀ビオトープ研究会幹事、2001 年～現在
28. 遊磨正秀、全国ホタル研究会会長、2015 年 4 月～現在
29. 宮浦富保、材木育種技術戦略委員会(森林総合研究所材木育種センター)委員、2014 年度～現在
30. 宮浦富保、近江湖南アルプス自然休養林管理運営協議会(会長)、2014 年度～現在

法人番号	261014
プロジェクト番号	S1511030

31. 宮浦富保、大津市環境影響評価専門委員会・委員、2019年11月1日～2021年10月31日
32. 牛尾洋也、京都市景観審査会・委員：2013年11月～現在
33. 牛尾洋也、京都市所有者不明等の森林に関する対策検討会議・座長：2017年11月～2018年3月
34. 牛尾洋也、京都市大規模集約型林業推進協議会・アドバイザー、2018年4月～現在
35. 牛尾洋也、東近江市鈴鹿の森おこしワーキンググループ・アドバイザー、2017年12月～2019年3月
36. 牛尾洋也、東近江市エコツーリズム推進協議会フットパス部会・部会長、2018年5月～現在
37. 山中裕樹、環境DNA学会・理事、2018年4月18日～現在
38. 山中裕樹、Environmental DNA (Wiley 社)、Associate Editor、2018年11月12日～現在

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

該当なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

該当なし

<「中間評価時」に付された留意事項>

第1回目の外部評価では、特記事項として、第1に、「里山モデル」という議論のプラットフォームが不明確であり、MA や JSSA などのプラットフォームを意識した改善が求められた。

第2に、「龍谷の森」を起点とするこれまでの森林管理や研究、教育、地域連携と、本プロジェクトにおける関りの明確化が求められた。

第3に、本プロジェクトにおける文理連携の横串をさす研究成果による知見を現場の政策にいかん反映させ研究を発展させるかについて問われた。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

第1点目については、上述のよう最終年度までに「里山モデル」に関する研究を大きく発展させ、共通のプラットフォームとして提示するに至った。さらに「琵琶湖水域圏」というもう一つの議論のプラットフォームの確立を果たした。

また、第2点目および第3点目に関わり、特に大きな評価を受けた「龍谷の森」を中心とした森林管理・研究・教育・地域連携の従来成果を活かし、とくに文理連携の横串を指す研究成果による知見の一つとして、基盤的景観情報の整備と森林・林業政策との連携を図り、国内外の研究機関および行政主体との連携し、一定の成果を挙げることができた。

特に、②政策提言としては、滋賀県及び東近江市の政策に深くかかわり、それぞれの課題を踏まえた研究の成果として、叢書の『森里川湖のくらしと環境』においてそれぞれの分野の提言を行うことができた。

法人番号	261014A01
プロジェクト番号	S1511030

年度・区分	支出額	内 訳						備 考
		法 人 負 担	私 学 助 成	共同研 究機関 負担	受託 研究等	寄付金	その他()	
平成 27 年度	施 設	16,259	9,676	6,583				
	装 置	0						
	設 備	16,027	5,343	10,684				Miseqシステム
	研究費	12,091	8,777	3,314				
平成 28 年度	施 設	0						
	装 置	0						
	設 備	0						
	研究費	23,684	16,721	6,963				
平成 29 年度	施 設	0						
	装 置	0						
	設 備	0						
	研究費	20,291	14,974	5,317				
平成 30 年度	施 設	0						
	装 置	0						
	設 備	0						
	研究費	17,775	13,911	3,864				
令 和 元 年 度	施 設	0						
	装 置	0						
	設 備	0						
	研究費	18,401	13,382	5,019				
総 額	施 設	16,259	9,676	6,583	0	0	0	0
	装 置	0	0	0	0	0	0	0
	設 備	16,027	5,343	10,684	0	0	0	0
	研究費	92,242	67,765	24,477	0	0	0	0
総 計	124,528	82,784	41,744	0	0	0	0	

法人番号	261014A01
------	-----------

17

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
里山学研究センター (内訳)	27	292.00㎡		50			
紫光館3階 里山学研究センター事務室		140.81㎡	2	30	既存設備	—	
(瀬田)3号館301研究室		28.35㎡	1	3	既存設備	—	
(瀬田)3号館302研究室		26.25㎡	1	3	既存設備	—	
紫光館3階PD・RA室		96.00㎡	1	2	13.167	6,583	私学助成
紫光館3階展示・会議スペース							
紫光館3階全室							

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

96 m²

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
該当なし				h			
(研究設備)				h			
Miseqシステム	平成27年度	MS-J-001	1台	501	16,027	10,684	私学助成
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況 (千円)

年 度	平成 27 年度	積 算 内 訳		
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	2,750	用品・消耗品・資料図書	2,750	用品(1,728)、消耗品(513)、資料図書(509)
光熱水費	0		0	
通信運搬費	193	郵便費	193	切手代、シンポジウム運搬費等
印刷製本費	1,089	書籍・年次報告書	1,089	書籍、年次報告書、チラシ、パンフレット等作成
旅費交通費	1,224	出張旅費・交通費	1,224	出張旅費(1,067)、交通費(157)
報酬・委託料	546	報酬・委託料	546	業務委託費(319)、講師謝礼(227)等
賃借料	130	会場賃借料等	130	シンポジウム会場賃借料
(その他)	581	会合費・雑費・謝金等	581	講演会に伴う昼食代、講演会参加費等
計	6,513			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	820	経費担当アルバイト代	568	時給900円、年間時間数632時間、実人数1名
		学生アルバイト代	252	時給900円、年間時間数280時間、実人数13名
教育研究経費支出 計	820			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	723		723	会議用テーブル、椅子等
図 書				
計	723			
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	1,455		1,455	学内1人
ポスト・ドクター	2,571		2,571	学内1人(6ヶ月間)
研究支援推進経費	0			
計	4,026			学内2人

法人番号

261014A01

(千円)

年 度	平成 28 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	6,294	用品・消耗品・資料図書	6,294
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	93	郵便費	93
印 刷 製 本 費	749	年次報告書	749
旅 費 交 通 費	2,460	出張旅費・交通費	2,460
報 酬 ・ 委 託 料	2,610	報酬・委託料	2,610
賃 借 料	134	会場賃借料等	134
(その他)	697	会合費・雑費・謝金等	697
計	13,037		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,027	経費担当アルバイト代	562
		学生アルバイト代	465
教育研究経費支出 計	1,027		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書	1,165	高速印刷機器	1,165
計	1,165		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	3,201		3,201
ポスト・ドクター	5,247		5,247
研究支援推進経費	0		
計	8,448		

(千円)

年 度	平成 29 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	2,345	用品・消耗品・資料図書	2,345
光 熱 水 費	0		0
通 信 運 搬 費	114	郵便費	114
印 刷 製 本 費	3,123	書籍、年次報告書	3,123
旅 費 交 通 費	3,065	出張旅費・交通費	3,065
報 酬 ・ 委 託 料	1,555	報酬・委託料	1,555
賃 借 料	137	会場賃借料等	137
(その他)	465	会合費・雑費等	465
計	10,804		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,426	経費担当アルバイト代	578
		学生アルバイト代	848
教育研究経費支出 計	1,426		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,796		2,796
ポスト・ドクター	5,252		5,252
研究支援推進経費			
計	8,048		

法人番号

261014A01

(千円)

年 度	平成 30 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,222	用品費 消耗品費 資料図書費	385 240 597
光熱水費	0		
通信運搬費	126	郵便費	126
印刷製本費	3,650	印刷製本費	3,650
旅費交通費	1,679	出張旅費 交通費	1,550 129
報酬・委託料	1,783	業務委託費 支払手数料・報酬	1,513 270
賃借料	152	会場賃借料等	152
(その他)	417	会合費 諸会費 教育研究補助費 損害保険料	352 34 2 29
計	9,029		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	588	経費担当アルバイト代 学生アルバイト代	394 194
教育研究経費支出 計	588		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,886		学内1人
ポスト・ドクター	5,264		学内1人(12ヶ月)
研究支援推進経費 計	8,150		学内2人

(千円)

年 度	令和 元 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
備 品	299	教育研究用機器備品	299
消 耗 品 費	550	用品費 消耗品費 資料図書費	427 92 31
光熱水費	0		
通信運搬費	376	郵便費	376
印刷製本費	4,799	印刷製本費	4,799
旅費交通費	1,653	出張旅費 交通費	1,204 449
報酬・委託料	1,268	業務委託費 支払手数料・報酬	1,169 99
賃借料	126	会場賃借料等	126
(その他)	426	会合費 諸会費 謝金 損害保険料	315 17 65 29
計	9,497		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,785	経費担当アルバイト代 研究補助員 学生アルバイト代	275 326 1,177 7
教育研究経費支出			

		法人番号		261014A01	
計	1,785				
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品					
図書					
計	0				
研究スタッフ関係支出					
リサーチ・アシスタント	1,782			学内1人	
ポスト・ドクター	5,328			学内1人(12ヶ月)	
研究支援推進経費					
計	7,110			学内2人	